

辯護人長島鷲太郎日高直次上告趣意辯明擴張書ノ第一點ハ本件上告人ハ誣告ヲ爲シタル後明治三十六年十一月十七日ヲ以テ富山地方裁判所檢事正ニ自首ヲ爲シタルモノナリ(記録第四十七目)抑モ誣告事件ニ於ケル自首ハ刑法第三百五十六條ニ適合セルトキハ刑ノ全免ヲ成スノ結果ヲ生スルヲ以テ其自首カ適法ナルヤ否ヤハ頗ル重要ノ事實ニ屬ス故ニ裁判所ハ判決ヲ爲スニ當リ其事實ヲ審理シ效力ノ有無ヲ判定スヘキハ當然ノ理ナリ然ルニ原院ハ當ニ其判決ヲ下サ、ルノミナラス自首ノ事實ニ付テ何等ノ審理ヲ盡サ、ルハ不適法ナリト云ヒ」第二點更ニ一步ヲ進メテ自首ノ事實ヲ觀ルニ誣告事件ノ被告人タル木下八兵衛ニ對スル告訴ハ明治三十六年十一月六日ヲ以テ不起訴ノ處分ニ付シ(記録第二十四目)却テ本件被告ニ對シ同日ヲ以テ豫審ヲ求メタルモノナリ(記録第二十五目)而シテ被告ハ第一點ヲ通り明治三十六年十一月十七日ヲ以テ自首ヲ爲シタル故ニ其自首タルヤ誣告ノ被告人タル木下八兵衛ニ對シ未其推問ヲ爲サ、ル以前ニ於テ爲シタルモノナレハ刑第三百五十六條ニ依リ當然刑ノ全免ヲ言渡スヘキモノナリ稍モスレハ刑法第三百五十六條ノ所謂推問トハ檢事カ捜査處分ニ依リ聽取書ヲ作成スル場合モ亦之ヲ包含スルト爲スモノナキニ非スト雖モ然ラス元來告訴ノ目的ハ檢事ノ起訴ヲ促スニアリ故ニ一旦起訴ノ手續アルトキハ告訴ハ茲ニ其目的ヲ達シタルモノト謂フヘシ此ニ依リ誣告ヲナシタル場合ニ於テ未タ起訴以前ニ於テ其虛偽タリシコトヲ自首スルトキハ何等ノ實害ヲ生スルコトナクシテ已ムノミナラス可成犯人ヲシテ悔悟ノ機ヲ得セシメンガ爲メニ特ニ刑法第三百五十六條ヲ設ケタルナリ左レハ所謂推問トハ公判若クハ豫審ニ於ケル取調ヲ指稱スルモノニシテ檢事カ任意ニ出頭セル者ニ對スル聽取ヲ包含

スルモノニ非ス右ノ理由ニ依リ原院ハ刑ノ全免ヲ言渡スヘキニ然ラサルハ不法ナリト云フニ在リ○然レトモ自首ノ有無ハ一ノ事實問題ナルヲ以テ原院カ自首ノ事實ヲ認メタル以上ハ之カ法律上ノ效果ヲ判定スヘキ必要アルヘシト雖モ本件ニ於テハ原院ハ自首ノ事實ヲ認メタルニヨリ其法律上ノ效力ノ如何ヲ判示スヘキ必要ナシ第一點論旨ハ要スルニ原院ノ認メサル事實ヲ提出シテ原判文ヲ非難スルニ在レハ上告ノ理由ナシ又本件ニ付テハ被告ヨリ明治三十六年十一月十七日附自首狀ノ提出アリト雖モ原院ハ之ヲ自首ノ事實トシテ認メサリシコト前顯説明ノ如クナルヲ以テ第二點論旨ハ畢竟原院ノ判旨ニ副ハサル攻撃ニシテ固ヨリ採ルニ足ラサル所ナルノミナラス假リニ被告カ明治三十六年十一月十七日ニ自首ヲ爲シタルモノトスルモ被告ニ對スル誣告事件ノ豫審請求ハ明治三十六年十一月六日ナレハ被告ノ自首ハ自己ノ誣告罪ノ發覺後ニ係ルコト一件記録ニヨリ明了ナリトス而シテ刑法第三百五十六條ノ規定ハ刑法第八十五條ノ自首ノ一般條件ニ對シ一ノ特例ナル推問前ナルコトヲ要スル條件ヲ加ヘ以テ刑罰ノ全免ヲ定メタルモノニ過キサレハ該條規定ニヨル自首モ事ノ發覺前ナルコトヲ必要條件トスルハ固ヨリ論ナキヲ以テ本件ノ如ク被告ニ對シ誣告事件ノ訴追後ニ於テ自首スルモ決シテ刑法第三百五十六條ヲ適用スヘキモノニアラス故ニ本件ニ於テハ八兵衛ニ對シ未タ何等ノ訴追ナキ場合即未タ推問ヲ始メサル際ニ於テ被告カ自首シタルコト明ナリト雖モ已ニ自己犯罪ノ發覺後ノ自首ナルニヨリ到底該條ノ全免ヲ得ヘキモノニアラス然ラハ原院カ該條ヲ適用セサリシハ結局相當ニシテ上告論旨ハ何レヨリ見ルモ理由ナシ

●私印及公文書偽造行使事件 明治三十七年(己)第一一八號
行使及公文書偽造 明治三十七年六月十三日判決 (棄却)

判決要旨

一、身分登記ノ申請ハ形式上ノ要件ヲ備フル以上ハ戶籍吏ハ實體上ノ要件ヲ缺ケルコトナ理由トシテ登記ノ手續ヲ拒ムコトヲ得ス

從テ戶籍吏カ當事者ヨリ申請シタル事項カ實體事實ニ適合セサルコトヲ知テ之ヲ登記スルモ爲メニ刑事上ノ責任ヲ負フコトナシ

一、戶籍吏カ死後ニ申出タル登記事項ヲ故意ニ日附ヲ溯及シテ生前ニ申出タルモノトシテ登記ヲ爲シタル所爲ハ刑法第二百五條ノ犯罪ヲ構成ス

一、養子縁組ハ身分取得ノ原因ニシテ之レカ成立ハ當事者間ニ多數ノ權利義務ヲ發生セシムルモノナレハ該縁組ノ届書ハ

權利義務ニ關スル證書ナリトス

一、文書偽造罪ハ被告ニ他人ヲ害スルノ意思アルコトヲ必要トセス正當ニ他人ヲ利シ又ハ自己ノ權利ヲ實行スルノ目的ニ出テタル場合ト雖モ虚偽ノ事項ヲ記載シ文書ノ真正ヲ害スルニ於テハ文書偽造罪ノ犯意ニ缺ケル處ナシ

說明

文書偽造罪ノ犯意如何ニテ足レリトス不正ニ自己ノ利ヲ圖リ又ハ他人ヲ害セントスルカ如キ卑劣ナル目的ノ爲メニ偽造セラレタルコトヲ要セス竊盜ノ犯人カ貧者ノ饑餓ヲ救ハンカ爲メ博愛心ニ驅ラレテ富者ノ財物ヲ竊取スルモ竊盜罪ヲ構成スルニ付テハ夫レノ私利ノ慾心ヲ滿スルカ爲メニ行ハル、竊盜ト敢テ選ム處ナキト等シク文書偽造罪ノ場合ニ於テモ被告ノ目的カ私利ニ在ルト然ラサルトハ此ノ罪ノ成立ニ影響スル所ナシ抑モ法律カ文書偽造ノ行爲ヲ罰スル所以ノモノハ虚偽ノ文書ヲ行使シテ其ノ對手者ニ一定ノ損害ヲ加フルカ爲メニアラスシテ偽造文書ノ行使カ一般社會ニ於ケル文書ノ信用ヲ毀損スルニ由ル思ニ社會ノ信用ヲ毀損スルハ文書

戶籍吏ノ文書偽造○日附溯及ノ登記○養子縁組届書ノ性質○文書偽造ノ犯意

其ノモノ、偽造ナルカ爲メニシテ之ヲ作成シタル被告ノ目的ノ何レニ在ルカハ
爰ニ何等ノ關係ヲ及スヘキモノニアラサルヲ想スルトキハ本判決ノ基因スル
所自ラ釋明セラルハ得ン乎

(參照) 官吏其管掌ニ係ル文書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ前二條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ其文書ヲ毀棄シ
タル者亦同シ(刑法第二百五條)

(參照) 買賣貸借贈遺交換其他權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮
ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス(刑法第二百十條第一項)

第一審 靜岡地方裁判所濱松支部 第二審 東京控訴院
被告人 進 榮其 辯護人 今田鎌太郎
外三名 飯岡鈴木 田村宏輝 作彦

右私印盜用私書偽造行使及公文書偽造行使被告事件ニ付明治三十七年五月三日東京控訴院ニ於テ
言渡シタル判決ニ對シ被告共ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ
判決スル左ノ如シ

被告高次郎辯護人今田鎌太郎上告趣意辯明書第一點ハ戸籍吏カ其權限ニ屬スル事務ヲ執行スルヤ
法令ノ規定ニ準據スルノ外苟モ個人ノ資格ニ於テ開知シタル事實ヲ參酌採量シテ届書若シクハ報
告書記載以外ノ事項ヲ登記シ又ハ變更抹消等ノ手續ヲナスヲ許サス詳言スレハ自己カ私人ノ資格
ニ於テ開知シタル事實ヲ叨リニ參酌シテ届書若シクハ他ノ國家機關ヨリ受理シタル報告書記載ノ
事項ヲ登記セサルカ又ハ届書若クハ報告書ニ記載ナキ事項ヲ自己ノ意見ノミニ依テ登記スルカ如

キハ却テ管掌文書ノ偽造若クハ變造ノ行爲タルヲ免レサルナリ行政法上國家機關タル戸籍吏
ノ性質上然ラサルヘカラサルノミナラス戸籍法第十五條ニ依レハ戸籍吏カ身分ニ關スル届出ヲ受
ケ又ハ其届出ノ送付ヲ受ケタルトキハ其登記手續ヲ爲スヘキ旨ヲ規定シ又同法第六十五條ニ依レ
ハ届出期間ヲ經過シタル後ニ届出タル場合ト雖モ戸籍吏ハ其届出ヲ受理スルコトヲ要スト規定シ
而シテ同法第十八條ニ依レハ戸籍吏カ届出其他登記ニ關スル書類ヲ受理シタルトキハ(中略)遲滯
ナク登記ノ手續ヲ爲スコトヲ要スト規定スル所ニシテ其第十六條ニ於テ届出其他送付ノ手續カ本
法ノ規定ニ依ルニ非サレハ登記ヲ爲スコトヲ得サル旨ヲ規定シタル所以ノモノハ元來身分關係ノ
如キ方式行爲ハ方式ヲ履行シタルモノニアラスンハ受理スルコトヲ得サル旨ヲ規定シタルニ過キ
スシテ事實内容ノ絕對的眞實ヲ企圖シタルノ法意ニ非サルハ蓋シ論ヲ俟タス然リ而シテ原審ニ於
テ認定シタル事實ニ依レハ被告ハ當事者ヨリ完全ナル方式ヲ具備シテ提出セル届出ニ基キ毫モ増
減變換スルコトナク登記ノ手續ヲ爲シタルモノニシテ法令ノ執行ニ外アラズ然ルニ原審カ之ニ擬
スルニ公文書偽造行使ノ罪ヲ以テシタルハ國家機關タル戸籍吏ノ性質ヲ誤解シ戸籍法ノ精神ヲ無
視シタル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ○依テ按スルニ戸籍吏カ身分登記ヲ爲スニ當リテハ常ニ必
ラス當事者ノ登記申請ニ基ツキテ之ヲ爲スコトヲ要シ當事者ノ申請ニ拘ハラズ自己ノ現ニ職務外
ニ於テ認知スル所ヲ基礎トシテ登記ヲ爲スヘキモノニアラサルコト又當事者ノ申請カ苟モ法律ニ
定ムル形式上ノ要件ヲ具備スル以上ハ登記ノ手續ヲ爲スヘク其申請カ實體上ノ要件ヲ缺ケルヲ理
由トシテ登記ヲ拒ムヘキモノニアラサルハ誠ニ所論ノ如シ故ニ戸籍吏カ當事者ヨリ申請シタル事

戸籍吏ノ文書偽造○日附湖及ノ登記○養子縁組届書ノ性質○文書偽造ノ犯意

項カ實體事實ニ適合セザルコトヲ知リテ之ヲ登記スルモ戸籍吏ハ是レカ爲メ何等刑事上ノ責任ヲ負フコトナカルヘキハ論ヲ俟タサル所ナリ然レトモ戸籍吏カ豫メ虛偽ノ身分登記ヲ爲サントスル他人ノ企畫ニ賛同シテ之レカ實行ノ任ニ當リ虛偽ノ登記ヲ爲スカ如キハ決シテ其職務ヲ實行シタルモノト謂フコト能ハサルノミナラス死者ノ名義ヲ以テ爲シタル届出ヲ死後ニ受領シ且ツ其届出ハ死者ノ生前ニ受領シタルモノトシ日附ヲ溯ラシメテ之レカ登記ヲ爲スカ如キハ戸籍吏カ戸籍ニ關スル登記上ニ於テ遵守スヘキ手續ニ違背シタルモノニシテ正當ニ職務ヲ執行シタルモノト謂フコトヲ得ス果シテ然ラハ是等ノ場合ニ於テ戸籍吏ノ爲シタル登記ハ官吏カ其管掌ニ係ル簿冊ニ虛偽ノ事項ヲ記載スルニ依リテ成立スル刑法第二百五條ノ犯罪ヲ構成スルヤ明カナリ而シテ原院ノ認メタル事實ニ依レハ被告ハ吉津村助役トシテ戸籍吏タル村長ノ事務ヲ補助シ戸籍事務ノ取扱中明治三十五年十月初旬被告榮良厚善カ死亡者菊間日莊名義ノ飯田峯作養子縁組届ヲ偽造シ右偽造ノ届書ニ基ツキ虛偽ノ相續人届出ヲ爲サントスル計畫ニ賛同シ身分登記簿ニ菊間日莊ハ飯田磯吉弟峰作ヲ養子トナシ明治三十五年九月十八日ニ養子縁組届出同日受付タル旨又菊間峰作ハ明治三十五年九月二十二日前戸主養父日莊死亡ニ因リ家督相續戸主トナリタル旨何レモ虛偽ノ登記ヲ爲シタル事實ニシテ被告ノ所爲ハ刑法第二百五條ニ該當スルコト明カナルヲ以テ原院カ同條ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

被告榮良厚善兩名辯護人鈴木八郎上告意趣擴張書第二點原判決ハ菊間日莊ノ名義ヲ以テ被告等カ養子縁組届ヲ作成シ以テ戸籍役場ニ提出シタル所爲ニ對シテ刑法第二百五條第一項ヲ適用セラレ

タレトモ縁組届ナルモノハ單ニ縁組ノアリタル事實關係ノ成立ヲ明白ナラシムルニ留マリ決シテ權利義務ニ關スル文書ナリト云フコトヲ得ス假リニ一步ヲ讓リテ權利關係ヲ證明スルノ文書ナリトスルモ縁組届ハ身分關係ヲ證明スルモノニシテ決シテ刑法第二百五條第一項ニ該當スル文書ニアラス抑モ刑法第二百五條一項ニ規定スル權利義務ニ關スル文書トハ買賣貸借贈遺交換等其他ノ財産權ニ關スル文書ヲ偽造行使シタルモノヲ罰スルノ法意ニシテ決シテ身分關係ヲ證明スルノ文書マテモ罰スル廣汎的ノ法意ニアラサルナリ然ルニ原院ニ於テハ被告進榮良ノ縁組届ヲ作成シタル所爲ニ對シテ刑法第二百五條第一項ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤アルモノナリト信スト云フニ在リ○依テ刑法第二百五條ノ規定ヲ按スルニ法律ハ先ツ第一ニ「買賣貸借贈遺交換」等權利ノ得喪變更ノ原因ヲ例示シ然ル後「其他權利義務ニ關スル證書」ナル極メテ廣汎ナル文詞ヲ用ヒ以テ本條偽造ノ目的物タル文書ヲ概括的ニ指示セルヲ以テ刑法第二百五條ニ所謂權利義務ニ關スル證書中ニハ苟クモ權利義務ノ發生消滅變更ノ原因タル事實關係ヲ證明スルニ適切ナル文書ハ其何タルヲ論セス總テ之ヲ包含スルモノト解釋スヘク其權利義務發生消滅若クハ變更ノ原因カ當事者間ノ法律行為ナルト其他ノ法律的事實ナルトハ之ヲ問フノ要ナク又其原因ハ特定セル權利義務ニ關スルト包括的ニ權利義務ノ一體ニ關スルトヲ論スルコトヲ要セス而シテ養子縁組ハ相續、結婚、下等シク一面ニ於テ身分取得ノ原因タルト同時ニ他ノ一面ニ於テハ當事者間ニ於テ包括的ニ數多ノ權利義務ヲ發生セシムル一大原因ヲ爲スモノナレハ當事者間ニ於テ養子縁組ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル届書ハ刑法第二百五條ニ所謂「權利義務ニ關スル證書」タルコトヲ失ハサルモノトス故ニ原

戸籍吏ノ文書偽造○日附溯及ノ登記○養子縁組届書ノ性質○文書偽造ノ犯意

院カ木件菊間日莊名義ノ養子縁組届書ヲ偽造行使シタル被告兩名ニ對シ刑法第二百十條ヲ適用處
斷シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

被告榮良厚善辯護人飯田宏作上告趣意辯明書ハ私書偽造私印盗用ノ罪ハ作成サレタル證書カ他人
ニ害ヲ及ホシ得ヘキ場合ニアラサレハ構成セサルコトハ御院ノ判例ニ依ルモ明カナリ而シテ原判
決ハ「明治三十五年九月二十二日死亡セシカ同人生存中死亡後遺産ハ弟子等ニ處置セシムト云ヒ
タルコトアリシニ依リ當時東京市下谷區中上三崎南本通寺住職タリシ被告榮良ハ日莊ノ弟子ニシ
テ且弟子中ノ最長兄ナリシヲ以テ日莊ノ死亡後直ニ本興寺ニ來リ同人ノ遺産ヲ處分セントセシモ
相續人ナキヲ以テ貸付金ヲ取立テ難ク加フルニ單身戸主死亡セシトキハ法律上親族會ヲ招集シテ
相續人ヲ選定セサルヘカラサルコトヲ聞知セシモ日莊ノ親族ハ伊豆地方ニ在リ又本興寺ノ法類日
莊ノ弟子中ニハ急ニ相續人ト爲スヘキ者ナカリシヨリ本興寺ノ末寺タル同郡白須賀町成林寺住職
被告厚善ト謀リ親族會招集ノ煩累ヲ避ケ日莊カ生存中本興寺ノ檀徒飯田忠次郎ノ倅肇作ヲ養子ト
シ既ニ縁組ヲ爲シタル者ノ如ク拵ヘ一時峰作ヲ日莊ノ相續人トスルコトヲ共謀シ」云々ト認定サ
レタリ即チ本件ノ養子縁組届ハ單身戸主菊間日莊ノ遺言ニ依リ其遺産ヲ處置スルニ際シ貸付金ヲ
取立ル爲メ親族會招集ノ煩ヲ避ケ一時飯田峰作ヲ相續人ト爲ス所ノモノナリトノ事實ニシテ何等
他人ニ害ヲ及ボサル養子縁組届ニ過キス然ルニ刑法第二百十二條等ニ該當スル犯罪ナリトシタ
ルハ不法ノ判決ナリト云ヒ右ノ外吉田勇吉佐原高次郎ノ辯護人ノ提出ニ係ル上告趣意ヲ援用スト
云フニ在リ○依テ按スルニ文書偽造罪ノ成立要件トシテハ偽造文書ノ行使ニ因リ現ニ害ヲ生シ得

ヘキモノナルコトヲ必要トシ偽造文書ノ行使カ何等ノ害惡ヲ生セス又タ之ヲ生スルノ虞レナキト
キハ文書偽造罪ハ絕對ニ成立セサルコトハ當院カ判例トシテ認ムル所ナリ然レトモ地方ニ於テ文
書偽造罪ハ苟クモ實害ノ要件ヲ具備スルニ於テハ完全ニ成立シ犯人カ不正ニ自己ヲ利シ又ハ他人
ヲ害セントスル卑劣ナル目的ニ出テタルト正當ニ他人ヲ利シ又タハ自己ノ權利ヲ實行セントスル
ノ精神ニ基ツキタルトハ犯罪ノ情狀ニ於テハ多大ノ影響ヲ及ホスコトアルヘキモ犯罪ノ構成ニハ
毫末タモ影響ヲ及ボサルモノトス何トナレハ各人ノ遂行セントスル目的ハ如何ニ善美ナルニモ
セヨ之レヲ遂行スル爲メニ執ルヘキ手段ハ常ニ必ラス適法ノモノナルコトヲ必要トスルヲ以テ其
ノ手段ニシテ法網ニ觸ル、ニ於テハ刑罰ノ制裁ヲ受クヘク動機ノ善良ナルコトハ決シテ其ノ動機
ノ下ニ爲シタル不法行為ヲ適法ナラシムルノ作用ヲ爲サルヲ以テナリ故ニ假リニ被告等ハ菊間
日莊ノ遺言ニ依リ其遺産ヲ處置スルノ權限ヲ有シ貸付金ヲ取立ツルノ必要上本件養子縁組届ヲ作成
行使シタルコト所論ノ如クナリトスルモ養子縁組ノ實際之レナキニ拘ハラヌ菊間日莊名義ノ養子
縁組届ヲ偽造シ依テ以テ菊間日莊ノ眞實ノ養子ニモアラス又タ其正當相續人ニモアラサル飯田峰
作ヲシテ戸籍簿上同人ノ相續人タルノ身分ヲ取得セシメタルモノナレハ被告カ其届書ヲ作成シタ
ル意思如何ニ拘ハラヌ實害ヲ生スヘキ性質ノモノナルヲ論テ俟タス隨テ文書偽造罪ノ成立ニ要ス
ル實害ノ條件ヲ完備スルモノト謂ハサルヲ得ス抑モ被告ニシテ財產處分ノ任務ヲ完フセントセハ
自カラ遵由スヘキ適法ノ手續アリ之ニ由リテ充分ニ其目的ヲ達シ得ヘキニ事茲ニ出スシテ是等手
續ノ踐行上ニ於テ遭遇スヘキ些少ノ煩累ヲ避ケルカ爲メニ身分登記ノ紛糾相續法ノ紊亂ヲ醸生ス

戸籍更ノ文書偽造○日附測度ノ登記○養子縁組届書ノ性質○文書偽造ノ犯意

ヘキ虚偽ノ養子縁組届ヲ偽造行使スルコトヲ敢テスルカ如キハ不正ノ尤モ甚タシキモノニシテ貸金取立ノ爲メニスル一時ノ方便タルニ過キサルヲ理由トシテ其罪責ヲ免脱セシメントスル本論旨ハ畢竟手段ト目的トヲ混同シタルモノニ外ナラスシテ上告適法ノ理由トナラサルモノトス

●國稅徵收法違犯事件 明治三十七年(レ)第一一五七號
明治三十七年六月十六日判決 (破毀)

判決要旨

一、國稅徵收法第三十二條ハ財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虚偽ノ契約ヲ爲シ以テ國庫ニ損害ヲ加ヘ又ハ加ヘントスル者ヲ處罰スルモノナレハ藏匿脱漏等ノ行爲カ滞納者ト爲リタル以後ニ行ハレタルト其ノ以前ニ行ハレタルトハ犯罪ノ成立ニ何等ノ影響ヲ及スコトナシ
一、滞納者カ自己ノ財産ヲ藏匿脱漏シタリトスルモ國稅徵收法第九條ニ依リ納稅ノ督促ヲ受ケ指定ノ期限内ニ税金ヲ完納シタトキハ前項ノ處罰ヲ受クルコトナシ

(參照) 國稅ノ納期限ヲ過キ其税金ヲ完納セザル者アルトキハ收稅官吏ハ期限ヲ指定シ之ヲ督促スヘシ但シ第四條ノ一ニ依

リ國稅ノ徵收ヲ爲ストキハ此ノ限ニ在ラス(國稅徵收法第九條第一項)

滞納者又ハ納稅者ノ財産ヲ占有スル者其ノ財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虚偽ノ契約ヲ爲シタルトキハ一月以上二年以下ノ重懲罰ニ處ス(國稅徵收法第三十二條第一項)

第一審 水月地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 飯村典三郎 外一名

右國稅徵收法違犯被告事件ニ付キ明治三十七年五月十一日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告兩名ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告與三郎ノ上告趣意書第一點ハ原判決ニ依レハ被告人ニ對シテ明治三十六年七月一日附ヲ以テ明治三十五年酒造年度第一期納稅金八百六十七圓七十錢ヲ同月十四日納付スヘキ旨下館稅務署ヨリ發セラレタル納稅告知書ヲ同月五日ニ受取リタルモノナル事實ヲ認メ又同月六日酒造用ノ器具四十點ヲ百三十圓ニテ鼎建具類ヲ二十圓ニテ柳橋峰吉ニ賣渡シ尙同日風呂桶其他日用ノ雜品凡ソ六十餘點ヲ代金六十圓ニテ同様峰吉ニ賣渡シ同月六日中島福次郎ニ營業精酒二十駄ヲ代金四百圓ニテ賣渡シ同月七日田中サダヘ營業ノ燒酎二駄ヲ代金五十六圓ニテ同月九日同サダヘ同様燒酎一挺ヲ代金十四圓ニテ賣渡シタルモノナリ然レトモ國稅徵收法第三十二條第一項ニ該當スルモノトシテ處罰シタルモノナリ然レトモ國稅徵收法第三十二條第一項ニハ滞納者ノ財産ヲ占有スル者其ノ財産ヲ藏匿脱漏シ云々トアリテ被告人カ滞納者ナルコトヲ要件トセリ然ルニ原判決ニ認ムル如ク被告人ハ明治三十六年七月十四日ニ納稅スヘキ旨ヲ命セラレタルモノニシテ其ノ日以前ニ

滞納者ノ財産藏匿及ビ脱漏

於テ滯納者タラサルハ勿論ナリ而シテ原判決ハ其ノ日以前ニ在テ賣買等ノ事實アルコトヲ認メタルモノナレハ未タ滯納者タルニ至ラサル間ニ於テ財産脱漏ノ事實アルコトヲ認メタルニ過キヌサレハ國稅徵收法第三十二條第一項ヲ適用シ得ヘカラサル等ナルニ原院カ此法條ニ依リ被告人ヲ有罪ト判決シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルモノナリト云ヒ「被告峰吉ノ上告趣意書ハ國稅徵收法第三十二條第一項ニハ滯納者又ハ滯納者ノ財産ヲ占有スル者其財産ヲ藏匿脱漏シ云々トアリテ主犯者飯村與三郎カ滯納者ナルコトヲ要件トセリ然ルニ原判決ニ認ムル如ク與三郎ハ明治三十六年七月十四日ニ納稅スヘキ旨命セラレタルモノニシテ其日以前ニ於テ滯納者タラサルハ勿論ナリ而シテ原判決ハ其日以前ニ在テ賣買等ノ事實アルコトヲ認メタルモノナレハ未タ滯納者タルニ至ラサル間ニ於テ財産脱漏ノ事實アルコトヲ認メタルニ過キヌサレハ國稅徵收法第三十二條第一項ヲ適用シ得ヘカラサル等ニシテ從テ被告人ニ對シテモ同條第三項ヲ適用シ得ヘカラサル等ナルニ原院カ此法條ニ依リ被告人ヲ有罪ト判決シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法アルモノナリト云フニ在リ○依テ按スルニ國稅徵收法第三十二條ハ財産ヲ藏匿脱漏シ又ハ虛偽ノ契約ヲ爲シ以テ國庫ニ損害ヲ加ヘ又ハ加ヘントスル者ヲ處罰スルモノニシテ其藏匿脱漏等ノ行為カ納稅者ノ滯納者トナリタル後ニ在ルモノ又其前ニ在ルモノ國庫ニ對スル危害ノ點ニ於テハ同一ナルヲ以テ其前後ハ本罪ノ成否ニ關係ナキモノトス然レトモ納稅者カ國稅徵收法第九條ニ依リ督促ヲ受ケ指定ノ期限内ニ在リテ税金ヲ完納スルニ於テハ假令藏匿脱漏等ノ行為アルモノ國庫ハ何等損害ヲ受ケサル筈ナルヲ以テ同法第三十二條ヲ適用スルニハ納稅者カ藏匿脱漏等ノ行為前又ハ後ニ前示ノ期

限ヲ經過シ滯納者トナリタル事實アルヲ要ス是レ同條ニ「滯納者其財産ヲ藏匿脱漏云々トアル所以ナリ然ルニ原判決ヲ閱スルニ被告與三郎カ滯納者トナリタル事實ヲ認定セスシテ直チニ同法第三十二條第一項ヲ適用シ被告峰吉ニ知情補助ノ所爲アリトシテ同條第三項ヲ適用處斷シタルハ重要ナル事實ノ明示ヲ次キタル判決ニシテ上告ハ其理由アルモノトス既ニ此點ニ於テ原判決ヲ破毀スル以上ハ他ノ論旨ニ對シニ々説明スルノ要ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ刑事訴訟法第二百八十六條ニ依リ原判決ヲ破毀シ事件ヲ宮城控訴院ニ移ス

官吏職務執行妨害事件

明治三十七年(九)第九三五號

明治三十七年六月三日宣告

(棄却)

判決要旨

一、稅務官吏カ酒造検査ヲ爲スヘキ時ニ關シテハ法律上別段ノ制限ナキヲ以テ夜間ニ之ヲ爲スモ不法ニ非ス

第一審 松山地方裁判所宇和島支部 第二審 廣島控訴院

被告人 清家助松

外一名

右官吏職務執行妨害被告事件ニ付明治三十七年四月十八日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告兩名ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ、刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

酒造検査ヲ爲スヘキ時

被告兩名上告趣意ハ原判決ヲ閱スルニ被告人ニ職務妨害ノ行為アルコトヲ認定セラレタリ然レトモ夜間ニ在テ強制的ニ検査ヲ爲シ若シハ犯罪檢舉ノ爲メ家宅ヲ搜索セントスルニハ必ず日没前ナラサルヘカラス然ルニ原判決中證據トシテ引用セラレタル被告助松ノ豫審調書ニ依ルモ夜間検査ハ之ヲ拒ム旨明言シアルニモ拘テス強テ之カ検査ヲ行ハントシタルモノナルコトノ記載アリ果シテ然ラハ假令原判決中ニ認メラレタルカ如キ暴行ノ事實アリトスルモ家主不承諾ノ下ニ強テ検査ヲ行ハントシタル不法アルニ依リ決シテ如斯場合ニ官吏職務執行妨害ノ罪ノ成立スヘキモノニアラス即チ原判決ハ不法タルヲ免レスト云フニ在リ○然レトモ稅務官吏カ酒造検査ヲ爲スヘキ時ニ間シ法律上別段ノ制限ナキヲ以テ夜間ニ之ヲ爲スモ不法ト云フヲ得ス而シテ原判決ニ依レハ被告等ハ暴行ヲ以テ検査官吏ノ職務執行ニ抗拒シタル事實ナレハ原院カ刑法第三百二十九條ヲ適用シテ被告等ヲ處罰シタルハ相當ニシテ本論旨ハ理由ナシ

判決要旨

一、如何ニ程度ノ酒精分ニセヨ之ヲ含有スル飲料ハ一石ニ付キ十六圓ノ割合ヲ以テ酒造稅ヲ科ス從テ此ノ割合ヲ越ヘサル酒造稅ノ賦課ニ對シテハ酒精分ノ度数ヲ示スノ必要ナシ

●酒造稅違犯并稅法違犯事件 明治三十七年六月二十日判決 (棄却)

酒造稅含有飲料

一、酒精及酒精含有飲料法并ニ酒造稅法中純酒精ノ容量幾個ト云コト、酒精分何度ト云フコトハ元來同一ノ意味ナルモ一ハ容量ト云ヘルヲ以テ之ニ對シ幾個トシテ其度数ヲ現ハシ他ハ酒精分ト云ヘルヲ以テ何度トシテ其度数ヲ現ハシタルニ外ナラス

(參照) 酒精又ハ酒精含有飲料ヲ製造スルトキハ一石ニ付原重量百分中純酒精ノ容量一箇毎ニ金七十五錢ノ割合ヲ以テ其ノ石數ニ應ジテ造石稅ヲ課ス但シ一石ニ付金十六圓ノ割合ナドトナ得ス(酒精及酒精含有飲料稅法第二條)

第一審 水戸地方裁判所 第二審 東京控訴院
被告人 宇野清左衛門 辯護人 一本 田 恒 虎
外一名 森 富 綱

右清左衛門ニ對スル酒造稅法違反被告事件ニ對スル酒精及酒精含有飲料稅法違犯被告事件ニ付明治三十七年五月十六日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

被告辯護人本田恒虎上告趣旨辯明書第三點第二ノ犯罪ノ目的タル酒精含有飲料物カ若干純酒精ヲ含有スルヤヲ定ムルハ罰金額ヲ算出スル上ニ於テ必要ナル事項タルハ酒精及酒精含有飲料稅法第二條ニ依リ明瞭ナリ果シテ然ラハ被告等カ製造シタル酒精含有飲料物カ一石ニ付若干純酒精ヲ包含スルヤヲ認定セサルヘカラス然ルニ原判決カ遂ニ若干ノ純酒精ヲ含有セシヤヲ明ニセザリシハ犯罪ノ事實ヲ明示セサルノ違法アリト謂ハサルヘカラス或ハ云ハシ原判決ニ(酒精分二十

酒精分ノ認定○酒精分ノ測定

度以下ノ酒精含有飲料二石一斗五升ヲ製造シタリトノ文字ハ明カニ含有酒精ノ量ヲ示シタルモ
 ノナラント果シテ然ラハ第四點、原所決ハ理由不備ノ違法アリ抑モ純酒精ノ何物タルヤハ同法第
 三條ニ明記セラル、カ如ク自ラ酒精分ナル文字ト別箇ノ意義ヲ有ス加之ナラス同法中酒精分ナル
 文字ヲ使用シタル所ナキヲ以テ若シ純酒精ノ容量一箇ト酒精分一度ト同様ナリトセハ之カ關係ヲ
 説明セサルヘカラス故ニ原判決ハ漫然酒精分二十度以下云々ト判示シ其他ニ及ぶサルヲ以テ之ヲ
 以テ直チニ同法第三條第二條ニ從テ酒精含有飲料物ニ包含セラル、純酒精ノ容量ノ何箇ナルヤヲ
 明示シタルモノト認ムル能ハス故ニ若シ原判決カ數箇ノ文字ニ依テ純酒精ノ精量ヲ示サントシタ
 ルモノナリトセンカ結局理由不備ノ違法アリトシテ批難セサルヲ得ス加之ナラス若シ原裁判カ酒
 精二十度以下云々ノ文字ヲ以テ被告等ノ製造シタル酒精含有飲料物ニ包含セル純酒精ノ容量ヲ
 示シタルモノト認ムルコトヲ得ヘキモノトセンカ第五點、原判決ハ證據ノ明示ヲ欠キタル違法ヲ
 リ何トナレハ原判決ノ採用シタル證據中酒精分カ二十度以下ナリシヤ否ヤヲ決スルニ足ルヘキモ
 ノ、存在セサルハ判決文ニ依テ明瞭ナレハナリト云フニ在レトモ、酒精及酒精含有飲料税法第二
 條ニ依レハ酒精又ハ酒精ヲ含有スル飲料ヲ製造スルトキハ一石ニ付原容量百分中純酒精ノ容量一
 箇毎ニ金七十五錢ノ割合ヲ以テ其石數ニ應シテ造石稅ヲ課ス但シ一石ニ付金十六圓ノ割合ヲ下ル
 コトヲ得ストアルヲ以テ如何ニ低度ナル酒精分タルニモセヨ既ニ酒精分ヲ含有スルモノタル以上
 ハ法律ハ常ニ必ス一石ニ付金十六圓ノ割合ナル造石稅ヲ課スヘキコト、而シテ此金十六圓ハ法
 律上一定セル最下額ノ造石稅ナレハ此造石稅額ヲ超ヘサルヘキ場合ニハ酒精分ノ一定ノ度數ヲ示

スノ必要ナシ今原判決ノ事實理由ト其主文中ニ對シ言渡シタル罰金額ノ計算等ヨリ之ヲ按ス
 ルニ原院ハ酒精分ノ度カ一石ニ付金十六圓ノ割合ナル造石稅ヲ要スルモノヨリハ猶ホ低度ナル酒
 精分ヲ有セシモノト認メタルモノナルコト其算數上明白ナレハ前顯說示ノ理由ニヨリ特ニ酒精分
 ノ幾分ナリシヤヲ明示スルノ必要ナシ唯夫レ酒精分何度以下トシテ即チ一石ニ付十六圓ノ割合ナ
 ル造石稅ヨリ上ルコトナキ所以ヲ示セハ即チ足ルヘケレハ原院カ第二ノ事實理由中酒精分二十度
 以下トシテ別ニ一定ノ度數ヲ示サ、リシハ不當ニ非ス何トナレハ酒精分二十度以下タル上ハ如何
 ナル度數タルヲ問ハス其造石稅ハ法律上金十六圓ヨリ上ルコトナケレハナリ又其所謂純酒精ノ容
 量幾箇ト云フト酒精分何度ト云フトハ元來同一ノコトナルモ酒造稅法及酒精及酒精含有飲料稅
 法ノ解釋上前者ハ容量ト云ヘルヲ以テ之ニ對シ幾箇トシテ其數ヲ現ハシ後者ハ酒精分ト云ヘルヲ
 以テ何度トシテ其度數ヲ現ハシタルニ外ナラサレハ原院カ第二事實理由ノ部ニ酒精分二十度以下
 云々ト說示シタルハ違法ニアラス要スルニ本論旨ハ總テ上告ノ理由トナラス

●詐欺取財未遂事件

明治三十七年(レ)第九六〇號 明治三十七年六月二日判決 (棄却)

判決要旨

一、被告カ實際ニ債權ヲ有セサルニ不拘故意ヲ以テ被害者ニ對
 スル支拂命令ヲ申請シタル所爲ハ詐欺取財ノ着手ニシテ未

詐欺取財罪ノ成立

遂犯ヲ構成ス

說明

詐欺取財ハ人ヲ欺キタル結果トシテ財物ヲ騙取スレハ成立スルモノナルヲ以テ其ノ欺カレタル人ハ必スシモ財物ノ被害者タルコトヲ不要即チ甲者ヲ偽罔ニ陷レタル結果乙者ヨリ財物ヲ騙取スルヲ得タリトセハ詐欺取財ハ之ニ依リテ完成スルヲ妨ケス裁判所ニ向テ支拂命令ノ申請ヲ爲ストキハ法律ノ規定ニ依リ其ノ申請ノ原因タル債權ハ存在スルモノナリトノ推定ヲ爲シ之ニ依テ支拂命令ヲ發スルモノナレハ此推定ノ基本タル支拂命令ノ申請ヲ爲ストキハ即チ裁判所ヲ欺罔スル所爲ニ外ナラス詐欺取財ノ未遂犯ハ詐欺的爲行ニ着手シタルトキニ成立スルカ將タ財物ノ騙取ニ着手シタルトキニ成立スルヤハ從來學者ノ間ニ異論ナキニアラスト雖モ近時ノ定論ハ犯罪ノ客觀的要件ノ一ニ着手シタルヤ否ヤヲ以テ未遂犯ノ分界トナス詐欺取財ノ場合ニ於テ欺罔ニ着手スルノ行爲ハ則チ詐欺取財ノ客觀的要件ニ着手シタルモノニシテ茲ニ未遂犯ノ構成ヲ認ムルハ蓋シ正ヲ得タルモノト云フヘシ

第一審 浦和地方裁判所

第二審 東京控訴院

被告人 久積 運 惠

右詐欺取財未遂被告事件ニ付明治三十七年四月十八日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被

告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ辯護人ノ上告趣意書第三點ハ原判決ハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリ假リニ事實ニ關スル原院ノ認定ヲ相當トスルモ(第一點冒頭參照)未タ以テ被告ノ所爲ニ所謂欺罔手段アリト云フヘカラス蓋シ本罪ハ單ニ虛偽ヲ告ケ他人ノ財物ヲ得ルヲ罰スルニアラスシテ其欺罔手段カ原因トナリ被害者ニ不眞實ノ認識ヲ與ヘ之ニ因リテ財物ヲ取得スル場合即チ欺罔ト騙取トカ因果ノ關係ヲナス場合ヲ罰スルニアレハ假令未遂ノ場合ト雖モ其欺罔手段タルヤ少クモ他人ヲ瞞着シ得ヘキ性質ノモノナラサルヘカラス今本件證書カ果シテ原院ノ云フ如ク架空ノモノトセハ(寺債ヲ起ス爲メノ用意トシテ交付セラレシモノト)之ヲ提供シテ其架空ナルコトヲ知ル被害者ニ(前論點ノ如ク原判決ハ被害者ノ誰タルカヲ明示セサレトモ假リニ宥全權徒融林等ト假定シテ)架空ナラサルコトヲ信セシメントスルモ到底不能タルヤ明ナリ故ニ被告ニ於テ更ニ其證書記載ノ金額ヲ自己ニ於テ立替又ハ他人カ寺債ニ應シタリト信セシメ得ヘキ方法ヲ採リタランニハ則チ格別ナルモ斯ル事實ナキ本件ニ於テハ到底所謂欺罔手段アリト云フヘカラス換言スレハ不能ノ欺罔手段ヲ以テ欺罔スルコトハ到底アリ得ヘカラサルナリ但シ欺罔ハ必スシモ騙取セラレタル人ニ施スヲ要セストスルモ尙前同一ニ論定シ得ヘシ則チ本件ニ於テ右ニ論スル如ク被害者ノ方面ニ欺罔セラレシモノナシトセハ則チ裁判所ヲ欺罔シタリヤ否ヤヲ決スレハ足ル然ルニ支拂命令ナルモノハ一定ノ形式ヲ具備シテ申請スルトキハ必ス之ヲ發セラルヘキモノニシテ其權利ノ眞否如何ヲ調査スルヲ要セサルヲ以テ被告カ裁判所ニ申請シテ支拂命令ヲ發セシメタリトモ之ヲ以テ裁判所ヲ欺罔シタリ

詐欺取財罪ノ成立

ト云フヘカラス又裁判所カ欺罔セラレテ發シタルモノニモアラサルガリ要之被告カ架空ノ證書ヲ提供シテ財物ヲ騙取セント企ツルモ架空ノ事實ヲ知悉セル被害者ヲ欺罔シ得ヘカラサルヤ明ナレハ假リニ本件ニ於テ被害者カ財物ヲ犯人ニ交付スルコトアリトモ開ハ必スヤ欺罔ノ結果ニアラスシテ他ニ原因アルモノト斷言シ得ヘシ從テ本件ニ於テハ其未遂犯ヲ構成スヘキモノニアラス然ルニ原院カ刑法第三百九十條ヲ適用處斷シタルハ不當ト云ハサルヲ得スト云フニ在レトモ○詐欺取財ハ財物ヲ騙取セントスル對手人ヲ欺カサルモ他人ヲ欺キタル結果トシテ財物ヲ騙取スレハ成立スルモノナレハ本件ニ於テ被告ノ手段ハ有全等ヲ欺ク能ハサルモノトスルモ裁判所ヲ欺クヲ得ヘキモノナレハ本件被告ノ行為ハ詐欺取財罪ノ着手タルモノニシテ裁判所ハ支拂命令ノ申請ニ對シ證據調ヲ爲サレモノナレハ其申請ノ原因タル債權ノ存スルヤ否ヤノ實體的事實ヲ確定スルモノニアラサレトモ形式上適法ナル支拂命令ノ申請アルトキハ法律ノ規定ニ因リ其申請ノ原因タル債權ハ存在スルモノナリトノ推定ヲ爲シ支拂命令ヲ發スヘキモノナレハ此推定ノ基本タル事實換言スレハ適式ナル支拂命令ノ申請ヲ爲スノ事實ハ裁判所ニ對スル欺罔手段ト爲ルモノナルヲ以テ原判決ニ於テ認定セル被告ノ所爲ハ詐欺取財ノ着手タルヤ明カナリ故ニ本論旨ハ其理由ナシ

●酒造稅法違犯事件 明治三十七年(元)第一一〇四號 (棄却)

判決要旨

一、酒類ノ製造販賣ヲ業トセサル者ノ家族雇人等カ酒造稅法ニ

違犯シタル場合ハ同法第三十二條ノ規定ニ該當セサルヲ以テ現ニ違犯行為ヲ爲シタル者刑罰ノ責メニ任ス

說明

刑罰權ノ基本ヲ折衷主義ニ求ムルト將タ必要主義若クハ豫防主義ニ求ムルトヲ間不凡ソ刑罰ノ目的トスル所ハ犯人ヲ制裁スルニ在ルヲ以テ法律違犯ノ所爲ニ對スル刑罰ハ行為ノ本人ニ加フルヲ以テ一般ノ原則トナス酒造稅法第三十二條ノ如キハ或ル特別ナル必要ノ爲メニ此普通ノ原則ニ一ノ例外ヲ設ケタルモノニシテ之レカ適用ハ專ラ其ノ規定ノ範圍ニ限定セシムヘキハ例外規定ヨリ來ル當然ノ結果タラスンハアラス是レ本判決ノ存スル所以ナリ矣

(參照) 酒類ヲ製造スル者又ハ之ヲ販賣スル者ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其業務ニ關シ此ノ稅法ヲ犯シタルトキハ其ノ製造者又ハ販賣者ヲ處罰ス(酒造稅法第三十二條)

第一審 山口地方裁判所赤間關支部 第二審 廣島控訴院

被告人 金子米藏

右酒造稅法違犯被告事件ニ付明治三十七年四月十九日廣島控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ上告趣意ハ酒造稅法第三十二條ノ規定ノ趣旨ニ依レハ酒造稅法違反ノ責罰ハ實際ノ違反者ハ何人クルヲ問ハス戶主金子喜兵衛ニ於テ負擔スヘク家族タル上告人カ處罰セラルヘキ理由ナシ而シテ

家族ノ酒造法違犯

原判決ハ戸主ハ喜兵衛ニシテ上告人ハ其家族タルヲ認メナカラ上告人カ實際ノ醸造者ナリトノ理由ノ下ニ上告人ヲ罰セラレタルハ不法ノ判決ナリト云フニ在リ○然レトモ酒造税法第三十二條ハ免許ヲ受ケ酒類ヲ製造スル者又ハ之ヲ販賣スル者ノ代理人戸主家族同居者雇人其他ノ從業者カ業務ニ關シ税法違反ノ所爲アル場合ニ其製造業者販賣者ヲ責任者トシテ處罰スヘキ旨ヲ規定シタルモノナレハ酒類ノ製造販賣ヲ業トセサル者ノ家族雇人等カ酒造税法ニ違反シタル場合ハ該條ノ規定ニ該當セサルニ依リ實際違反行爲ヲ爲シタル者ヲ以テ刑罰ノ責任ヲ受ケシムヘキハ當然ナリ本件被告家ノ戸主ハ實父鈴木喜兵衛ナルコトハ判文後段ノ説明ニヨリ明ナレトモ被告家ニハ被告ヲ始メトシ何人モ酒類製造ノ免許ヲ受ケ居ル者ナキコトモ亦タ原院ノ判示ニヨリ明ナルヲ以テ原院カ被告ニ濁酒密造ノ所爲アリト認メ酒造税法第二條第二十二條ヲ適用シ被告ヲ處罰シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ其ノ理由ナシ

三三

●出版法違犯事件 明治三十七年(九)第一〇五號 (棄却)

判決要旨

一、春畫ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ニシテ發賣頒布ノ目的ヲ以テ之ヲ印刷スルハ出版法ノ禁スル所ナリ從テ發賣頒布ノ目的ヲ以テ印刷シタル春畫ハ法律ニ於テ禁制シタル物件ニシテ

何人ノ所有ヲ不問是ヲ沒收ス

(參照) 左ニ記載シタル物件ハ宣告シテ官ニ沒收ス但法律規則ニ於テ別ニ沒收ノ例ヲ定メタル者ハ各其法律規則ニ從フ

一、法律ニ於テ禁制シタル物件(刑法第四十三條第一號)

法律ニ於テ禁制シタル物件ハ何人ノ所有ヲ問ハズ之ヲ沒收ス犯罪ノ用ニ供シ及ヒ犯罪ニ因テ得タル物件ハ犯人ノ所有ニ係リ又ハ所有主ナキ時ノ外之ヲ沒收スルコトヲ得ス(刑法第四十四條)

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 柴部光葉

右出版法違犯被告事件ニ付明治三十七年四月十三日大阪控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ辯護人中村儀藏ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ上告趣意書ハ原判決ハ不當ニ法則ヲ適用シタル違法アリ(イ)原判決ノ認メタル事實ハ「被告ハ前記肩書ノ住所ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ云々數次ニ春畫五百枚餘ヲ印刷シタルモノナリ」ト云フニアリ右認定事實ノミニテハ被告ノ所爲ハ果シテ帝國内ニ於テ發賣頒布スルノ目的ナリシトノ認定ナルカ將タ又帝國外ニ於テ發賣頒布スルノ目的ニ出テタルモノナリトノ認定ナリヤハ不明ナリト雖モ凡ソ罪トナルヘキ事實ハ證據ニ依リテ之ヲ認メサルヘカラサルト共ニ原院ハ武田兼松ノ大阪府北警察署ニ於ケル供述ヲ採テ斷罪ノ資料ニ供シタル點ヨリ觀レハ前記事實ノ認定ハ被告ハ朝鮮國ニ輸出販賣スルノ目的ヲ以テ春畫ヲ印刷シタモトノナリト認メタルモノト解セサルヘカラス何トナレハ右兼松ノ述供ハ被告カ兼松方ニ至リ今年ニ至リ在朝鮮ノ日本人ニ賣ル考ニテ春

春畫ノ沒收

三五

書ヲ製造シタルニ北警察署ノ爲メ差押ヘラレタリト陳述シタリト云フニ在ルヲ以テ原院ハ之ヲ採用シタルモノナレハ被告ノ意思ヲ推測スルニ當リテハ朝鮮國ニテ販賣スルノ目的ナリヲ認ムルノ外他ニ依ルヘキ證據ナケレハナリ以上ノ斷定ニシテ誤リナシトスレハ被告ノ所爲ハ法律上罪トナラサルモノト云ハサルヘカラス蓋シ出版法ノ罰則ハ發賣頒布ノ目的ヲ國內ニ限リタルノ明文ナシト雖モ先ツ法ノ精神ヲ按スルニ風俗ヲ壞亂スル圖書ノ發賣頒布ヲ禁止シタル所以ノモノハ日本帝國內ノ善良ナル風俗ヲ維持セントノ目的ニ出テタルモノニシテ他國ノ良俗ヲ保タントノ趣旨ニ出テタルモノニ非ルコト明カナルノミナラス假令斯ル希望ヲ有スルモ主權ノ性質上到底爲シ能フヘキコトニ非ルナリ從テ其發賣頒布ノ行爲乃至發賣頒布ノ目的ヲ以テスル印刷ノ行爲ヲ禁止シタル範圍モ亦帝國內ニ限定セラレタルモノト云ハサルヘカラス詳言スレハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ヲ帝國內ニ於テ發賣頒布シ又ハ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ印刷シタル者ニ非サレハ法律上罪トシテ罰スヘキモノニ非サルナリ是レ立法ノ精神上當然來ルヘキ解釋ニシテ外國ノ風俗ヲ壞亂スルト否トハ帝國出版法ノ毫モ關スル所ニ非ス何トナレハ假令外國ノ風俗ヲ壞亂スルモ爲ニ帝國ノ生存發達ニ何等支障アルコト無キヲ以テ之ヲ罰スヘキ理由ヲ發見スルコト能ハサレハナリ以上ノ理由ニ依リ本件被告ノ所爲ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ヲ朝鮮國ニ輸出販賣スルノ目的ヲ以テ印刷シタルモノナレハ法律上罪トナラサルモノナルニ拘ラス原院カ之ニ對シテ出版法ヲ適用處斷シタルハ不當ニ法則ヲ適用シタル失當ノ判決ナリト云ハサルヘカラスト云フニ在レトモ○原院ハ其判文ニ列舉セル各證據ヲ綜合判斷シテ被告カ其住所即チ大阪市北區天神橋筋三丁目三十三番屋敷ニ於テ發賣頒布スル目的ヲ以テ本件春畫ヲ印刷シタル事實ヲ認定シタルモノニシテ朝鮮國ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ之ヲ印刷シタル事實ヲ認定シタルコトナケレハ本論旨ハ原判旨ニ副ハサルモノトスル(ロ)原院ハ刑法第四十三條第一號同第四十四條ヲ適用シテ抑收ニ係ル春畫ヲ沒收シタルヲ以テ春畫ハ法律ノ禁制シタル物件ナリト認メタルコト明カナリ而シテ法律ニ於テ禁制シタル物件トハ必ス其存在ヲ禁止シタル物ナラサルヘカラス然ルニ春畫ハ必スシモ一私人ノ所持ヲ禁シタル物ニ非サルナリ何トナレハ法律ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ノ發賣頒布又ハ發賣頒布ノ目的ヲ以テスル印刷ノ行爲ヲ禁止セルモ此等犯人ヨリ賣買贈與等ニ依リテ其物件ヲ得タル者ハ更ニ之ヲ發賣頒布スルニ非サレハ法律ハ罪トシテ罰セサルノミナラス此等獲得者ニシテ該物件ヲ秘藏スルニ於テハ法律ハ完全ニ其物ノ所有權ヲ認メテ之ヲ保護セサルヘカラスルコト敢テ多辯ヲ要セサルヘシ然ラハ則春畫モ亦所有權ノ目的タルコトヲ得ヘキ物ニシテ法律ハ決シテ其存在ヲ禁シタルモノニ非サレハ之ヲ法律ノ禁制物件トシテ沒收シタルハ不當ニ法則ヲ適用シタル違法アリト云ハサルヘカラスト云フニ在レトモ○春畫ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ニシテ出版法ニ於テ發賣頒布ノ目的ヲ以テ之ヲ印刷スルコトヲ禁止シタルモノニシテ其禁制物ナルコト勿論ナレハ刑法第四十三條第一號第四十四條ニ依リ其現存スルモノハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收スヘキモノトス故ニ原院カ刑法第四十三條第一號第四十四條ニ依リ之ヲ沒收シタルハ違法ニアラス

布スル目的ヲ以テ本件春畫ヲ印刷シタル事實ヲ認定シタルモノニシテ朝鮮國ニ於テ發賣頒布スルノ目的ヲ以テ之ヲ印刷シタル事實ヲ認定シタルコトナケレハ本論旨ハ原判旨ニ副ハサルモノトスル(ロ)原院ハ刑法第四十三條第一號同第四十四條ヲ適用シテ抑收ニ係ル春畫ヲ沒收シタルヲ以テ春畫ハ法律ノ禁制シタル物件ナリト認メタルコト明カナリ而シテ法律ニ於テ禁制シタル物件トハ必ス其存在ヲ禁止シタル物ナラサルヘカラス然ルニ春畫ハ必スシモ一私人ノ所持ヲ禁シタル物ニ非サルナリ何トナレハ法律ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ノ發賣頒布又ハ發賣頒布ノ目的ヲ以テスル印刷ノ行爲ヲ禁止セルモ此等犯人ヨリ賣買贈與等ニ依リテ其物件ヲ得タル者ハ更ニ之ヲ發賣頒布スルニ非サレハ法律ハ罪トシテ罰セサルノミナラス此等獲得者ニシテ該物件ヲ秘藏スルニ於テハ法律ハ完全ニ其物ノ所有權ヲ認メテ之ヲ保護セサルヘカラスルコト敢テ多辯ヲ要セサルヘシ然ラハ則春畫モ亦所有權ノ目的タルコトヲ得ヘキ物ニシテ法律ハ決シテ其存在ヲ禁シタルモノニ非サレハ之ヲ法律ノ禁制物件トシテ沒收シタルハ不當ニ法則ヲ適用シタル違法アリト云ハサルヘカラスト云フニ在レトモ○春畫ハ風俗ヲ壞亂スヘキ圖書ニシテ出版法ニ於テ發賣頒布ノ目的ヲ以テ之ヲ印刷スルコトヲ禁止シタルモノニシテ其禁制物ナルコト勿論ナレハ刑法第四十三條第一號第四十四條ニ依リ其現存スルモノハ何人ノ所有ヲ問ハス之ヲ沒收スヘキモノトス故ニ原院カ刑法第四十三條第一號第四十四條ニ依リ之ヲ沒收シタルハ違法ニアラス

強盜殺人事件

明治三十七年(レ)第一一八三號
明治三十七年六月二十四日宣告 (棄却)

強盜殺人罪ノ既遂犯

判決要旨

一、強盗人ヲ死ニ致シタルトキハ其殺害行爲ノ毆打致死タルト謀故殺タルトヲ問ハス又財ヲ得タルト否トヲ論セス強盜殺人罪ノ既遂犯トシテ處斷スヘキモノトス

第一審 佐賀地方裁判所 第二審 長崎控訴院
被告人 永田市太郎

右強盜殺人被告事件ニ付明治三十七年五月五日長崎控訴院カ言渡シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ
上告趣意書第一ハ原審判決ハ擬律錯誤ノ違法アリ原審認定ノ事實ニ依レハ金員強取ノ目的ヲ以テ倉庫ノ外戸ヲ破壊シタルモ内戸ヲ開ク能ハサルヨリ其目的ヲ達シ得ストシ是ヲ以テ強盜未遂ト殺入ノ所爲アリトシテ刑法第三百八十條ニ間擬スレトモ倉庫内ニ在ル金錢ヲ得ントシ未タ倉庫内ニモ入ラス又其戸サヘモ開カサルヲ強盜罪ノ着手未遂ト言ヒ得ヘカラサルハ事理明白ナリ左レハ原審認定ノ事實トスルモ殺人及ヒ家宅侵入ノ法條ニヨリ數罪俱發ノ例ヲ以テ處罰スヘク決シテ強盜殺人ノ法條ヲ適用スヘキモノニアラスト云ヒ一第二ハ原審判決ハ理由不備ノ違法アリ第一所論ノ結果本件ニ付テハ殺人及ヒ家宅侵入ノ法條ヲ擬スヘキモノナリトセハ其福地島ヲ殺害シタルハ毆打致死ナルヲ謀故殺ナルヲ事實ヲ定メサルヘカラサルニ事茲ニ出テサルハ理由不備ノ違法アル

モノナリト云フニ在リ○然レトモ強盜殺人罪ハ一種特別ノ犯罪ニシテ盜罪ト殺人罪トヲ各別ニ構成スルモノニアラス苟クモ強盜ニシテ人ヲ死ニ致シタル以上ハ其殺害行爲ハ毆打致死タルト謀故殺タルトヲ問ハス又財ヲ得タルヲ否ヤニ拘ハラズ強盜殺人罪ノ已遂罪ヲ以テ處斷スヘキモノトス
今原判決カ認メタル事實ニ依レハ一被告ハ人ヲ殺傷シテ金員ヲ強取スルノ決意ヲ爲シ(中畧)小城銀行支店ニ侵入シ宿直部屋ニ進ミ出刃庖丁ヲ以テ當夜宿直セル福地島ノ頭部頰部ヲ切り左方腋窩乃至前胸ヲ刺シ(中畧)即死セシメ同店倉庫ニ入ラントシ唐鍬ヲ以テ其外部ノ戸ノ錠ヲ壞チテ之ヲ開キタレトモ内部ニ鐵板ノ戸アリテ破開シ難ク未タ金員盜奪ノ目的ヲ遂ケサル際巡查來リタルニ因リ逃走シタリトアリテ強盜殺人罪已遂ノ事實ヲ認メアレハ刑法第三百八十條ヲ適用處斷シタルハ相當ニシテ上告論旨ハ其理由ナシ

●森林法違犯事件 明治三十七年(レ)第一二七一號 (棄却)
明治三十七年六月二十七日宣告

判決要旨

一、上訴ハ訴訟關係人各自ノ利益ノ爲メ前裁判ノ不當ヲ矯正スルコトヲ得セシムルノ趣旨ニ出テタルモノナレハ縱令前裁判ニ不當ノ點アルモ之カ矯正ヲ求ムルニ付キ正當ノ利益ヲ有セズンハ之ヲ爲スコトヲ得ス

上訴ノ權利者○管轄違ノ言渡ニ對スル上告

一、裁判所ニ於テ管轄ヲ否認シ管轄違ノ言渡ヲ爲シタルトキハ其判決ハ結局被告人ニ利益ナル性質ヲ有ス從テ該判決ヲ不當ト爲シ其破毀ヲ求ムル被告人ノ上告ハ不適法ナリトス

第一審 宇都宮地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 松本 子太郎 辯護人 花井 卓藏

右森林法違犯被告事件ニ付明治三十七年五月二十日東京控訴院ニ於テ裁判管轄違ヲ言渡シタル判決ヲ不當トシ辯護人花井卓藏ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ

判決スル左ノ如シ
按スルニ凡ソ上訴ハ訴訟關係人各自ノ利益ノ爲メ前裁判ノ不當ヲ矯止スルコトヲ得セシムルカ爲メ設ケタルモノナレハ縦シ前裁判ニ不當ノ廉アルモ之ヲ矯正ヲ求ムルニ付利益ヲ有スル者ニ非サレハ上訴ヲ爲スコトヲ得サルモトス故ニ被告人ヨリ上告ヲ爲スニ付テモ必ス被告人自己ノ利益ニ關スル場合ナラサルヘカラス之ニ反シ若シ被告人ノ不利益ニ歸スルモノナルトキハ其上告ハ不適法ナリトス而シテ裁判管轄ノ點ニ付被告人ノ利害關係如何ヲ審按スルニ裁判所ニ於テ若シ不當ニ管轄ヲ認メシカ其結果被告人ハ正當管轄裁判所ノ裁判ヲ受クルノ權利ヲ奪ハルニ至ルヲ以テ其判決ニ對シ上告ヲ爲シ之ヲ矯正ヲ求ムルコトヲ得ルハ勿論ナレトモ之ニ反シ裁判所ニ於テ管轄ヲ否認シ管轄違ノ言渡ヲ爲シタルトキハ其判決ノ當否如何ニ拘ハラヌ其結果トシテ被告人ハ既ニ受

判決要旨

●村税賦課取消請求ノ訴 明治三十六年第四百六十二號 (請求不立)

一、町村制第二條ニ所謂町村ノ公共事務トハ町村ノ公益ニシテ町村法人カ町村制ノ記定ニ依リ當然處理スヘキ事務ヲ指稱スルモノトス

一、町村制第八十八條ニ所謂町村ノ必要ナル支出トハ町村ノ權能ニ屬セシメタル公共事務ニ要スル支出ヲ指示スルモノニシテ事務ノ性質カ町村ノ公益ニ關スルモノナルモ未タ町村ノ權能ニ屬セシメサル事項ノ爲メニ出支スルハ同法文ノ許容セサル所ナリ

千葉縣千葉郡豐富村車方 三百二番地平民 廣 告 湯 淺 瓦 輔

千葉縣知事 千葉縣議會 被 告 石 原 健 三

千葉縣廳 訴訟代理人 木 村 市 太 郎

町村制第二條ノ解○町村費ノ支出

右當事者間ニ於ケル村税賦課取消請求ノ訴訟審理ヲ遂クル處
 原告請求ノ要旨ハ明治三十五年四月二十三日豊富村長ヨリ村税賦課令狀ヲ交付セラレ其令狀中ニ
 ハ農會補助費金二十圓ヲ編入賦課シアルヲ以テ同村長ニ對シ該費分擔金賦課取消ノ訴願ヲ提起セ
 リ然ルニ同村長ハ取消スヘキ限リニアラスト裁決セリ依テ不服ナルヲ以テ千葉郡參事會ヘ訴願シ
 裁決ヲ受ケ遂ニ千葉縣參事會ヘ訴願シタレトモ是亦明治三十六年九月二十二日附ヲ以テ取消ス可
 キ限リニアラスト裁決シタルハ不服ナリ第一農會ハ町村ノ設立シタルモノニアラサルヲ以テ町村
 制第二條第八十八條及第二百二十七條ノ範圍外ノモノナリ第二町村ハ町村制及其他法律勅令等ニ規
 定アルモノヲ除外他ノ個人及集合體事業及事務ノ爲メニ要スル費用ハ負擔ノ義務ナキモノナリ
 第三町村住民ハ町村ノ負擔ノ義務ナキモノハ從テ分任スルノ義務ナキモノナリ第四農會ノ經費ハ
 明治三十三年勅令第三十號第十三條ニ依リ其會員ノ負擔タルヘキ規定ナキナリ故ニ其會員ニアラ
 サル一般住民ニ村税トシテ賦課スルハ勅令ヲ無視シタルモノナリ第五豊富農會ナルモノハ村内或
 ル一部ノ農民ノ組織シタル集合體ニシテ豊富村ナル法人ノ設立シタルモノニアラサレハ其事業ニ
 モアラス又事務ニモアラス故ニ豊富村一般住民ハ農會經費ノ爲ニスル村税ハ負擔ノ義務ナキモノ
 ナレハ被告ノ裁決並ニ豊富村長カ明治三十五年四月二十一日及同年十一月十日附ヲ以テ原告ニ賦
 課シタル明治三十五年度村税中ニ編入セル農會補助費分擔金十四錢九厘ノ賦課ヲ取消スヘシトシ
 裁判アリタシト云フニ在リ
 被告答辯ノ要旨ハ町村ハ本來其區域内ニ於ケル公共事務處辨ノ目的ヲ以テ成立スル公法人ニシテ

法令ノ範圍内ニ於テ其目的ヲ遂行スルカ爲諸般ノ事務ヲ處辨スルハ當然ノ權能ニ屬ス而シテ町村
 農會ハ明治三十二年六月法律第百三號農會法ニ依リ農事ノ改良發達ヲ計ルノ目的ヲ以テ設立シタ
 ルモノナルノミナラス其ノ區域モ亦町村ノ區域ニ依ルモノナルカ故ニ其事業ノ振否ハ町村ノ公利
 益ニ密接至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ町村カ之ヲ公利公益ト認メ助長發達セシムルカ爲ニ補助ヲ與
 フルハ即チ町村ノ公共事務ニシテ從テ其必要ノ費用ヲ村税トシテ賦課スルコトモ亦其權能ニ屬シ
 何等法令ニ違反スル所ナキモノトス故ニ豊富村カ其村農會ニ補助費金二十圓ヲ村税ニ編入シ之ヲ
 賦課シタルハ町村制第二法ノ範圍内ノ行爲ニシテ其支出ハ同制第八十八條ニ所謂必要ノ費用ナリ
 ト云ハサルヘカラス其他毫モ不當ノ點アラサルヲ以テ原告ノ請求相立タスト判決アリタシト云フ
 ニ在リ

依テ判決ノ理由ヲ説明スルコト左ノ如シ

被告ニ於テ町村ハ公益事務處辨ノ目的ヲ以テ成立スルモノナレハ法令ノ範圍内ニ於テ其目的ヲ遂
 行スル爲諸般ノ事務ヲ處理スルハ當然ノ權能ニ屬ス町村農會ハ農會法ニ依リ設立セラレ其區域モ
 町村ノ區域ニ依ルモノナルカ故ニ町村カ之ヲ其公利公益ト認メ助長發達セシムルカ爲ニ補助ヲ
 與フルハ即チ町村ノ公共事務ナリ從テ其必要ノ費用ヲ村税トシテ賦課スルコトモ其權能ニ屬シ何
 等法令ニ違反スル所ナシト云フト雖町村制第二條ニ所謂町村公共ノ事務トハ町村ノ公益ニシテ町
 村自カラ當然處理スヘキ事務ヲ謂フモノナリ又町村ハ同制第八十八條ノ規定ニ依ルニアラサレハ
 支出ヲ爲スコトヲ得サルモノナリ其必要ナル支出トハ即チ第二條ノ事務ニ必要ナル支出ヲ謂フモ

ノニシテ本件補助ノ如キハ町村制第二條ノ町村公共事務ニアラス隨テ同制第八十八條ノ必要支出ニアラス故ニ之ヲ村税中ニ編入シテ賦課シタルハ違法ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ
明治三十六年九月二十二日原告ニ對シ被告カ與ヘクル裁決ハ取消ス豐富村長ハ明治三十五年度歲入中ニ加算シタル村農會ニ與フル補助費ノ賦課即原告ニ對スル金十四錢九厘ノ賦課ハ之ヲ取消スヘキモノトス
訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

●退隱料請求ニ關スル不當處分取消ノ訴
明治三十六年第五百三十七號
明治三十七年六月二日宣告 (請求不立)

判決要旨

一、甲乙二個ノ尋常小學校ヲ合併シテ新ニ一ノ尋常小學校ヲ設立シタルトキハ從來ノ甲乙二校ハ廢止ニ歸スルモノナレハ從テ該二校ノ正教員ハ小學校令施行規則第二百二十八條ニ依リ當然退職者タルモノトス
一、知事カ前項ノ退職教員ニ向テ爾後退職ノ辭令ヲ與フルモ之

レカ爲メ退職者ノ身分ニ變更ヲ來スヘキモノニアラス

(參照) 市町村立小學校正教員左ノ各號ノニ職當スルトキハ當然退職者トスニ當該學校ノ廢セラレタルトキハ小學校令施行規則第二百二十八條第一號)

原告 小學校教員 新瀉縣知事
被告 宮野 瑞樹
訴訟代理人 尾原 榮治

右當事者間ニ於ケル退隱料請求ニ關スル不當處分取消ノ訴原告ノ書面ニ就キ被告ノ辯論ヲ聽キ審理判決スルコト左ノ如シ
被告カ明治三十六年十月二十四日原告ノ退隱料請求ニ對シ爲シタル却下處分ヲ取消ス
原告ハ退隱料請求ノ權利アルモノトス訴訟費用ハ被告ノ負擔トス

理由

原告訴求ノ要旨ハ原告ハ明治十六年八月ヨリ村立加治尋常小學校訓導ノ職ヲ奉シ二十年間勤績シタルモノナリ然ルニ明治三十六年ニ至リ學區委員ハ加治尋常小學校ト上館尋常小學校ノ各學區ヲ合併シ一學區ト爲シ一箇ノ尋常小學校ヲ新設スルコトニ決シ村長ハ村會ノ決議ニ依リ郡長ニ申立其指定ヲ受ケ同年七月十一日附ヲ以テ新設加治尋常小學校設備完了ノ旨ヲ開申シ現今ノ加治尋常小學校ヲ新設スルニ至リ之ト同時ニ元加治尋常小學校及ヒ上館尋常小學校ハ廢校ニ歸シタルヲ以テ小學校令施行規則第二百二十八條ノ規定ニ依リ原告ハ當然退職者トセラレタルヲ以テ明治二十三

小學校ノ併合ニ依リ教員ノ退職

年法律第九十號市町村立小學校教員退職料及遺族扶助料法第二條第三號ニ從ヒ退職料ヲ受クヘキ權利アルニ依リ被告ニ之カ請求ヲ爲シタル處被告ハ原告ニ其權利ナシトシテ却下シタルハ不法ナルヲ以テ右被告ノ處分ハ取消シ原告ニ退職料ヲ請求ノ權利アリトノ判決ヲ求ムト云フニ在リ被告答辯ノ要旨ハ原告ハ十五年以上小學校正教員ノ職ニ在リシコト明カナルモ原告ハ明治三十六年七月四日附ヲ以テ退職ヲ出願シ其理由ハ全ク原告自己ノ便宜ニ依ルモノナルヲ以テ被告ハ小學校令施行規則第百二十六條ノ規定ニ依リ同月三十日原告ニ退職ヲ命シタルモノニシテ同月十一日原告カ勤務セル村立加治尋常小學校ノ廢校ニ依リ退職者トナリシニアラス本件ノ如キ加治尋常小學校及ヒ上館尋常小學校ノ各學區ヲ合併シ同時ニ二校ヲ一校ニ減シタル場合ハ唯々其使用セサル上館尋常小學校ヲ廢スルニ止マリ元來ノ加治尋常小學校ハ依然存續シテ其使用區域ヲ擴張シタルニ過キサレハ原告カ廢校ニ依リ當然退職者トナルヘキ謂レナシ故ニ被告カ原告ノ退職料請求ヲ却下シタルハ相當ナルヲ以テ原告ノ請求ヲ棄却セラレ度シト云フニ在リ○按スルニ原告提出ニ係ル明治三十六年四月二日附ノ郡長ヨリ加治村會ニ對スル諮問書及同月七日附ノ加治村長ヨリ郡長ニ宛テタル答申書ニハ孰レモ加治尋常小學校ト上館尋常小學校トヲ合併シ更ニ加治尋常小學校ト稱シ校數並ニ位置變更云々ト記載シアリ又同月二十八日附郡長ノ指定書ニモ一加治尋常小學校トアル上ニ新設スヘキ分トアリ尙ホ加治村長ノ證明書ノ記事ニ參照スレハ明治三十六年七月十一日加治尋常小學校ト上館尋常小學校ト合併シ更ニ加治尋常小學校ナルモノヲ新設シタルモノト認ムルニ足レハ即チ其新設ト同時ニ從來ノ加治尋常小學校ハ廢校セラレタルモノト云ハサルヘカラス

然ラハ則チ原告ハ其際小學校令施行規則第百二十八條ノ所謂當然退職者トアルニ該當ス左レハ被告カ原告ノ退職願ニ對シ同月三十日附ヲ以テ退職ノ辭令ヲ與ヘタルコトアルモ之カ爲メ既ニ原告カ當然退職者トナリシ身分ニ變更ヲ來スヘキ理由ナシトス以上ノ如クナレハ原告ハ明治二十三年法律第九十號第二條第三號ノ規定ニ依リ終身退職料ヲ受クル權利ヲ有スルヲ以テ本件被告ノ處分ハ其當ヲ得サルモノトス依テ本文ノ如ク判決ス

●民地引戻請求事件不當取消ノ訴

明治三十四年第二百七號
明治三十七年六月十一日判決

(棄却)

判決要旨

一境界査定ニ由リ官地ニ編入セラレタルコトヲ不當トスル事件ハ國有土地森林原野下戻法ニ依リ出訴スルコトヲ得ス

原告 旗野 義藏

(訴訟代理人) 河邊 熊次郎

(復代理人) 高尾 傳七

農商務大臣男爵

被告 清浦 奎吾

(訴訟代理人) 元 田 肇

右當事者間ニ於ケル民地引戻請求事件不當取消ノ訴審理判決スル左ノ如シ
本訴ハ之ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

理由

境界査定ニ依リ編入セラレタル官地ノ下戻請求

原告ハ本訴請求ノ山林ハ正徳五年檢地ヲ受ケ中途荒廢ニ屬シ明治五六年中原告ノ先々代旗野木七カ再ヒ耕作ニ着手シ桑茶等ヲ培養セシニ此地ハ他ニ類ナキ強風吹キ下シ收穫覺束ナキ有様ニ立至リタルヲ以テ種々苦心ノ末風防林ヲ栽植シ近來成木シタルモノナルニ官民有地區別調査ノ際地引繪圖ト現地トノ齟齬ノ點ヲ上陳シ實地ノ形狀ニ依リ境界査定ヲ受クヘキ處原告ハ當時幼年ニシテ右ノ事實ヲ熟知セス其結果官地ニ編入セラレタルハ失當ト認ムルヲ以テ之カ下戻ヲ請求シ且被告ノ抗辯ニ對シ本訴ノ山林ハ地租改正ノ節官地ニ編入セラレタルモノニシテ其町歩ニ變更ナシ若シ被告カ云フ如クナレハ町歩ハ變更スヘキ筈ナリト陳辯セリ」被告ハ本件原告ノ請求地ハ明治三十年境界査定ノ際官有地トセラレタルモノニシテ原告ハ之ヲ不當トシ下戻ヲ求ムト云フニ在リ左レハ本件ハ下戻法ニ依ルヘキモノニアラス又原告カ本訴ノ證據トシテ提出シタルモノハ公書ニアラサレハ適法ノ證據ト爲ヌヲ得ヌ殊ニ字ツベタニハ幾多ノ民有地存在シ原告ハ其大部分ヲ所有シ官地ニ侵入スルヲ以テ從前ノ如ク境界ヲ査定シタルモノナリ故ニ本訴ハ速ニ却下セラレタシト答辯セリ按ズルニ原告ハ本訴ノ山林ハ其町歩ニ變更ナキヲ以テ地租改正ノ節官地ニ編入セラレタルモノナリト云フモ他ニ證明スルモノナキ以上ハ單ニ其町歩ニ變更ナキノミヲ以テ之ヲ地租改正ニ依リ官有地ニ編入シタルモノト認定スルヲ得ヌ而シテ本訴ハ明治三十年境界査定ニ依リ係争地ヲ官有トセラレタルヲ不當トスル主旨ナルコトハ訴狀及原告カ被告省ニ申請シタル主旨モ訴狀ト同一ナリトノ陳述ニ依リ明カナリトス然レハ本件ハ國有土地森林原野下戻法ニ依リ出訴シ得サルモノナルヲ以テ主文ノ如ク判決ス

●恩給金請求事件 明治三十七年第五十五號 (請求不立)

判決要旨

一、恩給ヲ受クヘキ權利ノ發生シタル時ヨリ三年ノ期間内ニ恩給ノ請求ヲ爲サ、ルトキハ其ノ權利ヲ喪失ス

一、一旦恩給權ヲ喪失スルトキハ其ノ喪失ノ時ヨリ新ニ所定ノ任官年限ヲ經過スルニアラスンハ更ラニ恩給權ハ發生セス

原告 西垣 浩

内閣恩給局長

被告 一木喜徳郎

右當事者間ニ於ケル恩給金請求ノ雙方ノ書面ニ就キ審理判決スル左ノ如シ

原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

理由

原告訴求ノ要旨ハ明治五年正月十四日ヨリ同八年四月五日迄陸軍兵卒トシテ現役ニ服シ明治十九年五月大阪府警部補ニ任セラレ奈良縣警部補ニ轉任後明治三十一年十二月諭示ニ依リ退官シ明治三十二年六月專賣局監視ニ任セラレ同三十五年十一月廢官トナレリ而テ右奈良縣警部補退官ノ際

恩給權ノ得喪

同縣ハ第一號證ノ如ク右現役中ノ日數ヲ在官年數中ニ算入セヌ單ニ在官十二年ニ對スル退官賜金給與セラレタリ原告ハ右賜金給與ハ官廳ノ處分ナルヲ以テ之ニ對シ何等ノ疑モ容レヌシテ止ミダリ依テ專賣局監視廢官後即明治三十五年十二月二十九日恩給請求書ヲ本屬長官ニ提出シタル處第三號證ノ如ク既ニ奈良縣警部補退官ノ當時在官十五年以上ナルヲ以テ進達ス可カラサル旨ヲ以テ却下セラレタルニ付被告恩給局ノ裁決ヲ仰キタル處原告ノ申立相立タストノ裁決ヲ爲シタリ元來奈良縣ニ於テ原告ノ武官在職年數等ヲ不明ナリトシ在官十五年未滿ト認メ一時賜金ヲ給與シ以テ原告ノ權利ヲ喪失セシメタリ然ルニ被告恩給局ハ單ニ兵役服務年數ヲ加算スヘキ理由ノミ説明シテ奈良縣カ原告ノ給恩ニ關スル權利ヲ障害シタル點ニ就テハ何等ノ説明ヲ與ヘサルハ不當ナルヲ以テ被告ノ裁決ヲ取消シ原告ニ相當ノ恩給ヲ下付スヘシトノ判決ヲ求ムト云フニアリ」被告答辯ノ要旨ハ原告ハ訴狀ニ記載セル如ク明治五年正月十四日以降八年四月五日迄軍人現役ニ服シ同十九年五月大阪府警部補ニ任セラレ轉任ノ後同三十一年十二月奈良縣警部補ヲ退官シタルニ付軍人現役中ノ日數ヲ通算シ七年臺灣役ニ關スル從軍年二個年ヲ加算スレハ在官十七年餘ニ及ヒタルヲ以テ其退官ノ當時恩給ヲ受クヘキ權利ノ發生シタルモノナリ然ルニ原告ハ右退官ニ關シ恩給ノ請求ヲ爲サ、ルヲ以テ同法第十六條ニ該當シ其權利ヲ拋棄シタルモノトス因テ被告ハ右退官前ノ在官月數ヲ除算シ恩給ヲ受クヘキ權利ナキモノト裁決シタルモノナレハ原告ノ請求ヲ排斥セラレ度シト云フニアリ按スルニ原告提出ノ履歷書及モ陸軍省人事局ヨリ大藏省ニ宛タル回答書ニ依レハ原告ハ明治五年正月十四日召集兵トシテ入營シ同七年二月七日陸軍伍長ニ任セラレ同年十月二十

五日臺灣ノ役ニ從軍シ同年十二月二日歸朝シ同八年四月五日步兵第一大隊解隊ニ付免官トナリシコト明カナリ而シテ陸軍伍長ハ明治六年布告第五百四十四號陸軍武官官等表ニ依リ判任官タルヲ以テ此任官ノ日ヨリ起算スレハ同八年四月五日免官マテ服役一年一個月餘ニシテ之ニ軍人恩給法第二十條第二十一條第一號及ヒ官吏恩給法第八條第二號及第三號ニ依リ從軍年二個年ヲ加算シ尙ホ大阪府警部補ニ任セラレタル日ヨリ同三十一年十二月六日退官ノ日マテノ月數ヲ加フルトキハ在官十五年以上ニ達シタルヲ以テ右十二月六日奈良縣警部補ヲ免セラレタル際原告ハ恩給ヲ受クヘキ權利ノ發生シタル者ナルニ拘ハラズ右退官ニ關シテ三年ノ期間内ニ恩給ヲ請求シタルコトナシ然ラハ原告ハ官吏恩給法第十六條ニ該當シ其權利ヲ拋棄シタルモノトス依テ其以前ノ月數ヲ控除シ明治三十二年六月原告カ專賣局監視ニ任セラレタル時ヨリ起算スルニ同三十五年十一月廢官ノ際ハ在官十五年未滿ナルヲ以テ原告ハ恩給ヲ受クヘキ權利ナキモノトス其他原告ハ被告ノ裁決ハ奈良縣カ原告ノ恩給ニ關スル權利ヲ障害シタル點ニ付キ説明ヲ與ヘサルハ不當ナリト云フニアスルモ此點ニ付テハ本件判決ニ必要ナキヲ以テ説明ヲ與ヘス以上ノ理由ナルニ依リ主文ノ如ク判決ス

●縣參事會ノ決定取消ノ件 明治三十七年第九十一號 明法三十七年六月十七日判決 (請求不立)

判決要旨

一、本籍、寄留、戸主、非戸主ヲ問ハス總テ一戸ヲ構ユル者ハ戸數割

戸數割ノ賦課

ナ負擔スヘシトノ縣令ノ本ニ在テハ一人ニテ數箇所ニ戸ヲ
構ユルノ事實アル以上ハ各所ニ於テ各別ニ戸數割負擔ヲ免
カレサルモノトス

原告 加藤 正 惠

愛媛縣選舉會
愛媛縣知事

被告 菅 井 誠 美

愛媛縣廳

訴訟代理人 近 藤 忠 敬

右當事者間ニ於ケル縣選舉會ノ決定取消ノ訴訟審理ヲ遂クル處

原告陳述ノ要旨ハ原告ハ從來愛媛縣斯居郡神鄉村ニ居住罷在候處明治三十六年三月二十三日職務
上ノ都合ニヨリ同郡多喜濱村へ轉住シ神鄉村ノ舊宅ニハ原告ノ分家(明治十七年十二月二十二日
分家)タル加藤清吉ナルモノ居住シ居レリ從テ原告ハ現住所多喜濱村ニ於テ縣稅村稅凡テノ租稅
ヲ負擔セリ然ルニ舊住所タル神鄉村長小野喜一郎ハ明治三十六年七月二十日附ヲ以テ三十六年度
縣稅戶數割上半期分金四十六圓二十三錢ノ賦課命令書ヲ原告ニ交付セリ依テ原告ハ不法ナル賦課
トハ確信スルモ法令ノ然ラシムル所ナルヲ以テ不得止同年八月十七日納稅シ之レカ異議申立書ヲ
同年八月三十日縣選舉會へ提出シ取消ヲ請求シタリ然ルニ縣選舉會ハ同三十七年一月十二日附ヲ
以テ神鄉村長ノ交付セル三十六年度上半期分戶數割金四十六圓二十三錢ノ徵稅命令書ハ明治三十
六年度愛媛縣令第一號地租割戶數割賦課規則ニヨリ賦課スヘキモノニシテ同規則ニ依レハ戶數割

ハ本籍寄留戶主非戶主ヲ問ハス總テ一戶ヲ構フルモノニ賦課スルノ規定ナリ故ニ苟モ神鄉村ニ住
居シテ一戶ヲ構フルノ事實アリトセハ神鄉村ニ於テ戶數割賦課ノ義務ヲ免カレ得可キモノニアラ
ス云々別莊ナリト申立ツル神鄉村ノ住居ヲ撤去シタリトノ事實ナキヲ以テ本件戶數割ノ徵稅傳令
書ヲ發シタルモノナリ依テ異議申立人ニ對シ神鄉村ニ於テ戶數割ヲ賦課シタルハ毫モ違法ニアラ
ストノ理由ヲ以テ取消ス可キ限リニアラスト決定セラレタリ前顯事實記載ノ如ク原告ハ明治三十
六年三月二十三日日本籍ト共ニ事實神鄉村ヲ撤去シ現住所へ移リタルモノナリ其事實ハ神鄉村長小
野喜一郎ト雖モ爭ハサル所ナラン即チ第六號證附屬封皮ノ肩書ニ多喜濱村加藤正惠ト記載セルヲ
見テ推知スルコトヲ得可シ故ニ原告カ多喜濱村ニ住居シ一戶ヲ構フルト同時ニ神鄉村ニモ尙ホ一
戶ヲ構ヘ居ルヤ否ヤノ事實カ本件係争ノ要點タリ然リ而シテ愛媛縣選舉會ハ原告カ神鄉村長ニ對
シ舊宅ハ別莊トシテ分家ノ加藤清吉ニ監守セシム可キ旨届出アリタルヲ以テ未タ神鄉村ノ住居撤
去セサルモノナリトノ認定ナルカ如シ然レトモ原告ハ神鄉村ニアル舊宅ハ家屋モ少々ナラス寒村
僻地ノ事ナレハ又借家ニモ適セス且空家ニナシ置クトキハ漸次損敗甚ク夫レ故留守番トシテ
分家加藤清吉ヲ住ハシメ之等ノ不便ヲ免カレンコトヲ希望シ別莊ノ名ヲ以テ届出タルニ過キス故
ニ別莊ノ名稱ニテ届出タルノ故ヲ以テ直ニ未タ住居ヲ撤去セス一戶ヲ構ヘ居ルモノナリトハ餘リ
速斷ニハアラサルナキヤ抑モ別莊トハ如何ナル意義ヲ有スルヤ而シテ世間近來往々此語ヲナスモ
ノアリ就中都市ニ於テ多ク散見スル所ナレトモ其意義甚ク疑ハシ實際ニ於テ或ハ一戶ヲ構ヘ居ル
モノモアラシ然レトモ又單ニ休息所ニ宛テタルニ過キサルモノアラシ其別莊ト云ヘハ常ニ一戶

戶數割ノ賦課

(三十六年度愛媛縣令第一號賦課規則ニ所謂一戸)ヲ構フルモノトハ到底解スル能ハサルナリ本件ノ如キ原告ハ單ニ加藤清吉ヲシテ該家屋ヲ守ラシメ其所有ハ依然原告ノモノナリトノ事實並ニ原告ハ多喜濱村へ移轉セシ事實ヲ立證的ニ届出ツル爲メニ所謂別莊ナル名ヲ以テ届出テタルニ外ナラサルナリ故ニ別郷ニ一戸ヲ構ヘ居ルモノハ加藤清吉其者ニシテ原告ハ現住所へ移轉後ハ更ニ神郷村舊宅ニ一戸ヲ構ヘ居ラサルコトハ附屬第一號證乃至第七號證ニヨリテ知ルコトヲ得可シ然リ而シテ愛媛縣參事會ハ原告届出書中ノ所謂別莊ナル漠然且ツ原告ハ其移住ヲ證セントノ意ヲ以テセシ語ヲ却テ取テ以テ裁決唯一ノ材料トセラレタリ然レトモ前顯ノ如ク其意義漠然タル所謂別莊ナル語ヲ以テ一戸ヲ構ヘ居ルモノナリトノ斷定ハ甚タ其空想的認定タルヲ免レス是レ原告カ之ニ服從スル能ハス本訴ヲ提起スル次第ニ御座候條何卒果シテ一戸構ヘ居ルヤ否事實上ノ問題ナルニ付第一號乃至第七號證ヲ斟酌シ御調査ノ上一定ノ申立ノ如ク判決相成度ト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ愛媛縣新居郡神郷村長小野喜一郎カ明治三十六年七月二十日附ヲ以テ原告加藤正惠ニ對シ明治三十六年度上半期縣稅戶數割金四十六圓二十三錢ノ徵稅傳令書ヲ交付シタルニ原告ハ明治三十六年三月二十三日新居郡神郷村ヨリ同郡多喜濱村ニ轉住シ神郷村ニ住居セサルニ依リ該戶數割賦課ヲ受クルノ義務ナキモノトシ明治三十六年八月三十一日附ヲ以テ之カ取消ニ關スル異議ヲ愛媛縣知事ニ申立ヲナシタリト雖其神郷村ノ住居ヲ撤去シタル事實ノ認ムヘキモノナキヲ以テ被告ハ明治三十七年一月十二日原告立證第九號ノ如ク本件戶數割ノ徵稅傳令書ハ取消スヘキ限ニアラストノ決定ヲ爲シタルモノナリ原告ハ第一神郷村長ニ對シ舊宅ハ別莊トシテ分家ノ加

藤清吉ニ監守セシムヘキ旨届出タルハ原告ハ多喜濱村ニ移轉セシ事實ヲ立證的ニ届出タルニ外ナラサルナリ故ニ此別莊ニ一戸ヲ構ヘ居ルモノハ加藤清吉其者ニシテ原告ハ現住所ニ移轉後更ニ此別莊ト現住宅ノ距離ハ僅カニ半丁ニ過キサレハ一家行爲上雙方ニ一戸ヲ構フル必要アルヘガラサルハ道理ノ然ラシムル所タリ又分家加藤清吉ハ單身殊ニ老體ナレハ保護ノ爲原告家族ノモノ往復スレハトテ尙原告ハ神郷村ニ一戸ヲ構フルモノナリト斷定スルハ誤認モ亦甚シト云ハサルヲ得ス

第二原告カ一步ヲ讓リ神郷村ニ未タ一戸ヲ構フルモノトシ納稅ノ義務アリトセンカ多喜濱村ニ於テ課稅ノ標準トナシタル同一ノ財產所得ヲ標準トシテ神郷村ニ於テモ課稅シ居レハ取リモ直サス一府縣内ニ於ケル一箇ノ資產カ甲乙兩村ニ於テ同時ニ同一ノ縣稅賦課ノ目的トセラレタルモノニシテ二重ノ課稅ナルハ第一號第三號第十號證ニ明ナリト謂フト雖モ第一原告カ多喜濱村ニ本籍ヲ移シタルト共ニ神郷村ノ住居ヲ撤去シタルノ事實ハ其主張ニ於テ立證ニ於テ一モ認ムルニ足ルヘキモノナク即チ原告立證第一號ハ神郷村賦課令書ニシテ第二號第三號ハ多喜濱村ニ現在シ同村ニ納稅スト云フニ止リ第四號ハ責任ナキ隣家者ノ轉住證明ニシテ第五號ハ原告カ神郷村ノ居宅ヲ別莊トシテ加藤清吉ニ監守セシムルトノ届出ニ止マリ第六號ハ神郷村長ノ送達スル書面ヲ原告カ受理セサルニ依リ便宜上現居所ニ送達シタルニ過キス第七號ハ加藤清吉ノ轉籍證明ニシテ何レモ原告カ神郷村ノ住居ヲ撤去シタルトノ證トナスニ足ラス而シテ原告カ明治三十六年三月多喜濱村へ轉籍ノ手續ヲナシタルモ其實神郷村ニ一戸ヲ構フルノ事實アルコトハ明治三十六年九月二十五日

神郷村ニ於テ執行シタル縣會議員選舉投票所ニテ原告カ村長小野喜一郎ニ對シ神郷村加藤正惠ト自稱シ選舉人名簿ノ對照ヲ經テ投票簿ニ捺印シ投票ヲ行ヒタル事實ヨリスレハ神郷村ニ依然住居セルコトハ明ナリサレハ同村ニ於テ戸數割負擔ノ義務ナシト云フヲ得ヌ第二戸數割各人ノ納頭ハ府縣制第九條ニ依リ之ヲ市町村會ノ議決ニ委シ其賦課標準及方法ニ關シテハ何等規定ヲ設ケス全ク其見ル所ニ一任シタルモノナレハ市町村會カ明治三十六年愛媛縣令第一號地租割戸數割賦課規則ニ依リ各戸ノ賦課額ヲ定ムルハ便宜ノ方法ニ依ルヲ得ヘシ要スルニ地租割戸數割賦課規則第五條ニ本籍寄留戸主非戸主ヲ問ハス總テ一戸ヲ構フルモノニ賦課ストアリ苟モ一戸ヲ構フルノ事實アレハ一人ニシテ二箇以上ノ町村ニ於テ納稅ノ義務ヲ免カル、ヲ得サルノミナラス村會カ其權限内ニ於テ定メタル賦課ニシテ違法ノ點ナキ以上ハ取消スヘキ限リノモノニアラス是レ原告ノ請求ヲ排斥スル所以ナリ依テ原告ノ請求相立タストノ判決ヲ謂フト云フニ在リ

依テ判決ノ理由ヲ説明スル左ノ如シ
被告提出ノ一號地租割戸數割賦課規則ニ依レハ戸數割ハ本籍寄留戸主非戸主ヲ問ハス總テ一戸ヲ構フルモノニ賦課スヘキモノニシテ數箇所ニ戸ヲ構フルノ事實アルニ於テハ各所ニ於テ賦課セラル、ヲ免カル、ヲ得ヌ原告ハ明治三十六年三月多籍濱村ニ移轉シタリトスルモ神郷村ニ於ケル舊本宅ハ原告ノ届出ニ依ルモ別荘トシテ存置シ實父ナル加藤清吉ヲシテ監守セシムルノ趣旨ナルノミナラス現住宅トハ僅カニ半丁ヲ距ツルニ過キスシテ朝夕自由ニ往來シ得ヘキノ狀況等ニ依レハ原告ハ神郷村ニ於テ尙ホ一戸ヲ構フルノ事實アリト認メサルヲ得ヌ又原告ハ賦課ノ標準ニ關シ

論スル所アルモ神郷村ニ於テ本件課稅ニ付果シテ原告主張ノ如キ標準ヲ適用シタルモノナル精確ナル立證ナキノミナラス村會ハ法律命令ニ別段ノ規定ナキ限リハ賦課徵收ノ法ヲ定メ得ヘキモノナレハ本件ノ賦課ハ違法ナリト云フヲ得ヌ又原告提出ノ該證ハ多籍濱村ニ關スル證明神郷村原告舊宅隣家ナル個人ノ證明及該村ニ於ケル原告名義ノ所有地價并ニ地租額取調ニ關スル證明等ニシテ孰レモ本件爭點ニ對シ有力ノ證ト認メサルヲ以テ逐一説明ヲ與フルノ必要ナキモノトス右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ
原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

雜 錄

●帝國義勇艦隊ノ創設。國運ノ伸張ハ海上權ノ發展ヲ促シ海運事業ノ隆興ハ今ヤ舊體ヲ脱シテ更ニ一大新面ヲ啓カントス我カ帝國海事協會ハ過日義勇艦隊創設委員會ヲ開キ左ノ趣旨書及ヒ綱領ヲ發表セリ

海國タル我日本ノ富強ハ主トシテ海事ノ振興ニ須タサル可ラス、我政府夙ニ見ル所アリ年々巨資ヲ投シテ海事獎勵ニ努メタル結果、造船及航海ノ事業ハ一年ニ進歩ノ状態ニ在リト雖モ海事ノ範圍タル廣且大ナリ苟モ海事ニ關スル凡百ノ事物一摺之ヲ振興シ相須テ完全ナル發達ヲナサント欲セハ舉國ノ民人奮テ其ノ經營ニ任セサル可ラス、是ニ於テカ吾人ハ公共團體ノ我海事ニ必要ニシテ官民相應シテ海事全體ヲ振興スル

ノ一大急務ナルヲ思ヒ同志相謀テ帝國海事協會ヲ組織シ誓テ海國民ノ本分ヲ盡サンコトヲ期シタルハ實ニ明治三十二年十一月ニテアリキ、爾來五閱年、國家ノ爲メ枚々企劃スル所アリシカ時勢ノ進運ハ自ラ吾人ヲシテ一大飛躍ヲ試ミルノ機運ニ乘セシメ、日露ノ事アルニ及テ倍々船舶ノ不足ヲ感シ本年二月總會ニ於テ戰時補助船舶(義勇艦隊)製造ニ努ムヘキコトヲ決議セリ爾來各國ノ制度ヲ參照シ實際ヲ調査シ、苦慮精考ノ結果益々其感ヲ深フスルモノアリ敢テ天下同憂ノ士ニ訴ヘ此ノ企劃ヲ實行セントス、抑モ本邦ノ海運事業ハ日清戰役以後頓ニ長足ノ進歩ヲ爲シタリト雖モ最近ノ調査ニ依レハ總噸數々千噸以上ノ汽船僅カニ百九十四艘五十二萬二千八百四十二噸ニシテ其ノ内遞信省ノ検査ニ依リ航海獎勵金下附認證ノ資格アリト認めラレタル船舶ハ四十五艘十九萬五千四百四十五噸ニ過キス

而モ其ノ多數ハ一朝事アルノ日ニ當リテ軍國ノ急ニ趨カサル可ラサルヲ以テ貿易通商殖民ヨリ延テ外交ニ至ル迄一大頓座ヲ生セサルヲ得ス其ノ影響スル處國力發達ノ點ニ於テ永ク回復ス可ラサル障害ヲ被ルノミナラス上ニ記スル如キ僅少ノ船舶ニテハ軍事輸送スラ完全ニ遂行スルコト能ハサルヲ恨ム」而シテ我カ海軍ノ現勢力ハ如何軍艦不足ハ官民共ニ認ムル所之レカ擴張ヲ計ルヘキハ夙ニ朝野ノ唱フル所ナルモ振興國ノ日本ハ新ニ施設經營スヘキ事業少ナカラス爲メニ軍艦製造ノコトハ十分ニ其ノ目的ヲ達スルニ至ラスシテ止ミシカ日露ノ事起リテ軍艦ノ不足ヲ感スルコト深ク戰爭ノ前途ヲ憂フルモノアリシモ幸ニ我將士ノ機敏ニシテ勇敢ナル毎ハ攻勢ヲ採リテ敵艦隊ヲ畏縮セシメ數回ノ交戦ヲ經テ極東ノ海上權全ク我ニ歸シタリト雖トモ將來ノ日本ハ今日ノ日本ニアラス列國環視ノ下ニ行動

謂戰時補助船ナルモノハ露國ニ於ケル義勇艦隊英國ニ於ケルキユナード汽船會社ノ如ク平時ニ在テハ普通ノ商船トシテ交通運輸ノ業務ヲ執リ一旦事アルノ日ニ當リテハ直チニ國家ノ命令ニ服シ或ハ假裝巡洋艦トシテ或ハ各種ノ補助船舶トシテ一大活動ヲ試ミ航海業ノ促進ヲ圖ルト共ニ海軍力ノ發現ヲ増大ナラシムルニ在リ彼ノ英國カ世界ノ海王トシテ無數ノ船艦ヲ有スルニ拘ラス尙且ツ年々巨大ノ補助金ヲ投シテキユナード汽船ノ擴張ヲ圖ルカ如キ彼レカ多年ノ經驗ニ徴シテ補助船舶制度ノ實際有效ナルコトヲ認識シタルニ依ル又タ之ヲ露國ニ見ヨ彼レカ遠ク絶東ノ地ニ於テ其ノ國防移民工業ノ進度ヲ顯著ナラシメ兎モ角モ日本海陸ノ精銳ヲ此處ニ引受テ未曾有ノ大戰爭ヲ爲スニ至レルモノ其ノ一半ハ露國義勇艦隊ノ活動ヨリ其ノ經營ヲ迅速ナラシメタルニ歸セサル可ラス

スヘキ日本ハ之レニ供フヘキ十二分ノ覺悟ヲ要ス單ニ一國ノ獨立ヲ保持スル上ヨリ云フモ東洋ノ永久の平和ヲ保全スル上ヨリ云フモ列強ノ現勢ニ鑑ミテ最モ適當ナル方法ヲ選ミ海軍力増進ノ道ヲ講セサル可ラス」蓋シ海軍ノ實勢力ハ商船ノ増加ヲ待テ擴充シ航路ノ伸張ハ海軍ノ輔導ニ依テ其ノ效ヲ完フスルモノナレハ完全ナル海軍ノ發達ヲ計ラント欲セハ勢ヒ軍艦ト商船ト聯進ニ歸セサル可ラス而モ我カ國ニ於ケル刻下ノ事情ハ力ヲ双方ニ專ラニスルコトヲ許サス此後ノ海軍ハ國民自覺ノ力ト當局者其ノ人ヲ得テ大ニ擴張セラル、所アルヘシト雖モ尙ホ之ヲ助長シ有效ナラシムル爲メ戰時補助船舶(義勇艦隊)ヲ建造シ一面海軍力ノ扶植ヲ圖ルト共ニ一面商船ノ不足ヲ補フテ通商貿易ノ増進ヲ計ルハ將來多大ノ希望ヲ有スル我日本カ列國ノ大勢ニ後レサランコトヲ期スル所以ニアラスヤ」吾人ノ所

斯如キハ普通ノ營利的事實ト自ラ其ノ選ヲ異ニシ平時ニ於ケル海軍事業ノ隆盛ト戰時及事變ニ於ケル軍事行動ノ振作ヲ目的トシ利害ノ外ニ超脱シ終始一貫公共的觀念ヲ以テ専心之レカ發達ヲ計ラサル可ラス從テ假裝巡洋艦其ノ他特殊ノ船舶ハ之ヲ一般普通ノ營業者ニ向テ到底其ノ企劃ヲ待ツヘキニアラス國民協力シテ之ヲ經營スルノ至當ナルヲ認メ本會自ラ進ンテ之レカ創業ノ任ニ當ラントス然レトモ其計劃頗ル遠大ニシテ舉國一致ノ協力ヲ待ツニアラサレハ之レカ成功ヲ期ス可ラス冀クハ大八洲ノ同胞舉テ吾人ノ此ノ企劃ヲ助成セラレンコトヲ

明治三十七年九月

要綱

第一條 帝國義勇艦隊ハ男女ヲ問ハス全國民ノ義金ヲ以テ之ヲ建設ス

第二條 船舶ノ製造ニ關シテハ關係當局大臣ノ指

示ヲ求ケ之ヲ定ム

第三條 帝國義勇艦隊船舶ハ總テ日本帝國ニ於テ之ヲ製造スル但シ時宜ニ依リ適當ト認ムル船舶ヲ購入スルコトアルヘシ

第四條 帝國義勇艦隊船舶ノ維持方法ハ創設委員ニ於テ之ヲ定ム

第五條 義金ハ一千五百萬圓ヲ募集スルヲ以テ目的トス

第六條 義金釀出者ニハ本會理事長ヨリ總裁ニ具申シ左ノ區別ニ依リ徽章ヲ贈與ス

一、一人ニテ義金一圓五十錢以上ヲ釀出シタル者

二、一人ニテ義金十五圓以上ヲ釀出シタル者

三、一人ニテ義金三十圓以上ヲ釀出シタル者

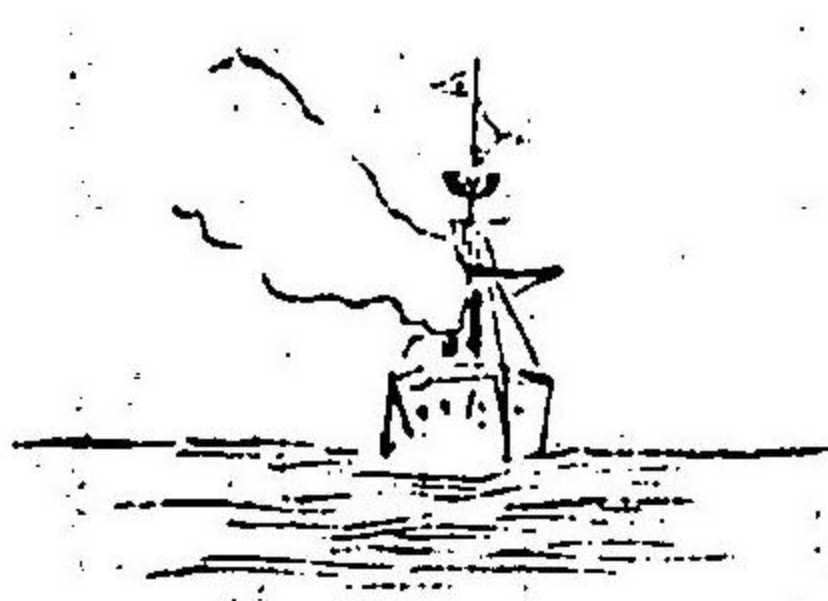
四、一人ニテ義金二百圓以上ヲ釀出シタル者

五、一人ニテ義金五百圓以上ヲ釀出シタル者

第七條 一人ニシテ金三百圓以上ノ義金ヲ釀出ス

ル者ハ本會理事長ヨリ總裁ニ具申シ有功章ヲ贈與ス

第八條 義金ハ義勇艦隊建設ノ目的以外ニ支出スルコトヲ得ス



廣告

東京市神田區淡路町二丁目七番地

電話番號本局八百七十二番

江木法律事務所

靜岡縣靜岡市紺屋町百廿一番地

江木倉橋法律事務所

辯護士法學博士

江木 衷

辯護士

下部喜太郎

事務所

東京市麹町區上六番町二番地

辯護士

倉橋 政直

事務所執務時間

每日

自午前九時
至午後五時

日曜。大祭日。休業

示ヲ承ケ之ヲ定ム

第三條 帝國義勇艦隊船舶ハ總テ日本帝國ニ於テ之ヲ製造ス。但シ時宜ニ依リ適當ト認ムル船舶ヲ購入スルコトアルヘシ

第四條 帝國義勇艦隊船舶ノ維持方法ハ創設委員ニ於テ之ヲ定ム

第五條 義金ハ一千五百萬圓ヲ募集スルヲ以テ目的トス

第六條 義金釀出者ニハ本會理事長ヨリ總裁ニ具申シ左ノ區別ニ依リ徽章ヲ贈與ス

一、一人ニテ義金一圓五十錢以上ヲ釀出シタル者

二、一人ニテ義金十五圓以上ヲ釀出シタル者

三、一人ニテ義金三十圓以上ヲ釀出シタル者

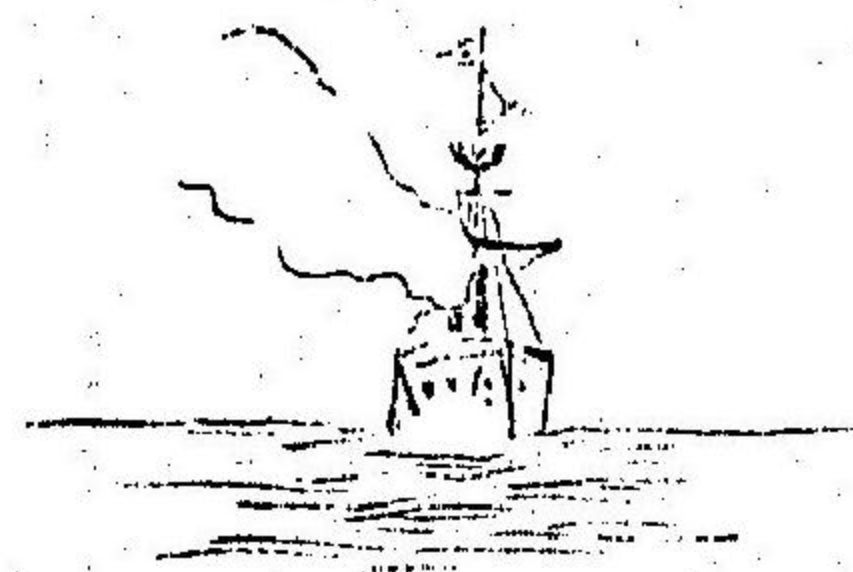
四、一人ニテ義金二百圓以上ヲ釀出シタル者

五、一人ニテ義金五百圓以上ヲ釀出シタル者

第七條 一人ニシテ金三百圓以上ノ義金ヲ釀出ス

ル者ハ本會理事長ヨリ總裁ニ具申シ有功章ヲ贈與ス

第八條 義金ハ義勇艦隊建設ノ目的以外ニ支出スルコトヲ得ス



廣 告

東京市神田區淡路町二丁目七番地

電話番號本局八百七十三番

江木法律事務所

静岡縣静岡市紺屋町百廿一番地

江木倉橋法律事務所

辯護士法學博士

江木 衷

辯護士

卜部喜太郎

事務所 東京市麴町區上六番町二番地

辯護士

倉橋 政直

事務所執務時間

每日 自午前九時 至午後五時 日曜。大祭日。休業

(刊發號一第卷一第月一年七十二治明)

司法判例彙報第十五卷第九號第七十二號

一本誌ハ毎月一回發刊ス
 一本誌定價ハ一冊金十五錢六冊前金八十
 四錢十二冊前金一圓六十二錢外ニ郵稅
 一冊ニ付一錢但シ郵券代用ハ一割増
 一本誌ハ前金ニアラサレハ一切送致セス
 一本誌廣告料ハ一行五號活字廿二字詰金
 十錢半頁金二圓五十錢一頁金五圓
 一本誌代金ハ總テ東京飯田町郵便電信支
 局宛ニテ御拂込被下度候
 一代金拂込ノ際代金ノ領收證ヲ求メラル
 、諸氏ハ送金ノ際端書一葉若クハ郵便
 切手一錢五厘ヲ送附セラルベシ
 一本誌前金盡キタルハ發送ノ際封皮ノ
 氏名ヲ朱書可致候間次號發兌迄ニ
 御送金可被下候
 一本誌代價拂込ハ東京麴町區飯田町五丁
 目卅八番地判例彙報社宛
 御差出被下度候

判例彙報大賣捌所

東京市神田區一ツ橋通町七番地
 有斐閣雜誌店
 東京市京橋區銀座四丁目
 東海堂 川合 晋
 東京市神田區表神保町
 東京 堂

明治三十七年九月十二日印刷
 明治三十七年九月十三日發行

編輯人 東京市神田區淡路町二丁目七番地 江木 衷
 發行人 東京市麴町區飯田町五丁目三十八番地 工藤 角三郎
 印刷人 東京市神田區美土代町貳丁目壹番地 島 連太郎
 印刷所 東京市神田區美土代町貳丁目壹番地 三 秀 舍
 發行所 東京市麴町區飯田町五丁目三十八番地 判例彙報社

(行印舍秀三地番一丁目二町代士美區田神市京東)

法學博士 江木 衷編輯

司法 行政

判例彙報

卷五第十第
 號十第
 號三拾七第第

判例彙報社

注意

- 一、本誌ハ毎月大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ言渡サレタル判決ノ全部ヲ審査熟讀シタル後法學研究者並ニ實務執行者ノ爲メ最モ參考ノ價值アルモノト認メタル判例ヲ擢載セルモノニシテ専ラ法律運用ノ資ニ供スルヲ以テ目的トス
- 一、弊社ハ購讀者ニ限り法律上ノ質問ニ應ス
- 一、質問ヲ爲サントスル者ハ其要領ヲ明カニシテ郵稅ヲ送附セラルヘシ
- 一、本誌ハ一箇年ヲ一期トシ毎年一月ヲ以テ第一號ヲ發刊シ毎月逐號發刊シテ十二月ニ至リ一卷ヲ完成ス
- 一、本誌ハ毎月一回發刊ス

判例彙報社編輯局

判例彙報合本廣告

江木法學博士編輯

司法判例彙報第十二卷合本

洋裝金文字入製本堅固
一冊定價郵稅共壹圓五十錢

本會ハ明治三十五年度判例彙報ヲ合編シタルモノニシテ收ムル處ノ判例民事壹百四十六件刑事壹百四十九件行政五十件三十五年度ニ於テ大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ起リタル事件ニシテ實務並ニ講學ノ參考タルモノハ舉テ本書ノ收ムル所タリ紙數全篇ヲ通シテ壹千九十餘頁

江木法學博士編輯

司法判例彙報第十四卷合本

洋裝金文字入製本堅固
一冊定價郵稅共壹圓五十錢

本會ハ明治三十六年度判例彙報ヲ合編シタルモノニシテ收ムル處ノ判例民事壹百五十件刑事壹百四十二件行政六十件三十六年度ニ於テ大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ起リタル事件ニシテ實務及ヒ講學ノ參考タルモノハ舉テ本書ノ收ムル所タリ紙數全篇ヲ通シテ壹千八十餘頁

發行所

東京市麹町區飯田町五丁目三十八番地

判例彙報社

大賣捌所

東京神田一ツ橋通 有斐閣 東京堂 東海堂 川合晋

東京市神田區表神保町 東京々橋區銀座四丁目

法學博士 江木 衷 編
民事判決例
 定價金六拾錢
 但郵稅共

法學博士 江木 衷 編
刑事判決例
 定價金六拾錢
 但郵稅共

法學博士 江木 衷 編
行政判決例
 定價金貳拾錢
 但郵稅共

法學博士 江木 衷 編
大賣捌所
 東京市神田區一ツ橋通
 東京市神田區表神保町
 東京市京橋區銀座四丁目
 東京有報社
 東京海堂閣

司法行政例彙報第十五卷第十號目次

民事判例

- 損害要償事件 三九九
- 貸金請求事件 三六〇
- 約束手形金請求事件 三六六
- 約束手形金請求事件 三七二
- 約束手形金請求事件 三七七
- 賣買品引渡請求事件 三七五
- 約束手形金請求事件 三六一

刑事判例

- 森林法違犯事件 三四一
- 私書變造行使事件 三四一

行政判例

- 約束手形金償還請求事件 三八五
- 土地贈與登記請求事件 三九一
- 親族會議無效確認請求事件 三九三
- 親族會議無効確認請求事件 三九七

司法判例彙報第十五卷第十號目次

民事判例

損害賠償事件

○就遺失之銀行手帳將シタル債權者ノ關係
○就遺失之銀行手帳將シタル債權者ノ關係
○就遺失之銀行手帳將シタル債權者ノ關係

貸金請求事件

○無能力者カ契約ヲ締結スルニ當リ無能力者タルコトヲ
○無能力者カ契約ヲ締結スルニ當リ無能力者タルコトヲ

約束手形金請求事件

○手形三割取付スルコトヲ要スル條件中真ノ事實ニ適合セ
○手形三割取付スルコトヲ要スル條件中真ノ事實ニ適合セ

約束手形金請求事件

○取付役カ履行ノ承諾ヲ得シテ會社ト取引ナシト
○取付役カ履行ノ承諾ヲ得シテ會社ト取引ナシト

賣買品引渡請求事件

○債權者カ債權者ノ代理人ニ債權履行ノ爲メ代理人名義
○債權者カ債權者ノ代理人ニ債權履行ノ爲メ代理人名義

約束手形金請求事件

○同一事件ニ對スル再度ノ支拂命令ノ效力
○同一事件ニ對スル再度ノ支拂命令ノ效力

約束手形金償還請求事件

○支拂人ノ住所不明ナル故ニテ手形呈示ノ手續ヲ
○支拂人ノ住所不明ナル故ニテ手形呈示ノ手續ヲ

船舶料乘組員給料及食料並損害金請求事件

○契約ニ依リ解除權ノ行使モ亦民法第五百四十一條ニ
○契約ニ依リ解除權ノ行使モ亦民法第五百四十一條ニ

土地贈與登記請求事件

○贈與ノ性質
○贈與ノ性質

親族會議無効確認請求事件

○親族會議決議ノ無効ハ當然ニ生スヘキヲ裁判所ノ宣
○親族會議決議ノ無効ハ當然ニ生スヘキヲ裁判所ノ宣

荷爲替殘金及附帶費用請求事件

○荷爲替ノ性質
○荷爲替ノ性質

刑事判例

○森林法違犯事件
○森林法違犯事件

私書發送行使事件

○私書ノ性質
○私書ノ性質

官文書偽造行使詐欺取財事件

官報ノ性質
官報ヲ印刷スル爲メ組上タル植字ヲ變換シタル者ノ
處分
三六八

窃盗事件

窃盗罪ノ構成
人ノ所持内ニ在ル物件ナルモノヲ如何ナル標準ニ依
リテ之ヲ區別スヘキヤ
三六九

隠行事件

隠行罪ノ構成
三七一

監守官印書偽造行使事件

監守官印書偽造行使罪ノ要件ナルモノ
三七二

公印盗用公文書偽造行使及監守官印書偽造行使事件

公印盗用公文書偽造行使罪ノ要件ナルモノ
三七三

詐欺取財事件

詐欺取財罪ノ構成
三七四

家畜分取ニ於ケル財産隠匿並附帶私訴事件

家畜分取ニ於ケル財産隠匿並附帶私訴罪ノ要件ナルモノ
三七五

酒造税法違反及官職執行抗拒事件

酒造税法違反及官職執行抗拒罪ノ要件ナルモノ
三七六

官文書偽造行使官印盗用詐欺取財官文書毀

官報ノ構成條件タルヲ得ルカ
三六八

封印破棄事件

封印破棄罪ノ構成
三六九

行政判例

郡會議員當選效力ニ關スル訴
三五七

水害地租免稅額不當處分取消及水害畑地

水害地租免稅額不當處分取消及水害畑地
三五八

違法決定取消ノ訴

違法決定取消ノ訴
三五九

漁業組合認可取消請求ノ訴ニ對スル妨害抗

漁業組合認可取消請求ノ訴ニ對スル妨害抗
三六〇

不當裁決取消ノ訴

不當裁決取消ノ訴
三六一

意又ハ過失ニ出テタルモノニアラスト抗辯スレトモ云々(中略)本件差押物品ヲ控訴人ノ所有ニ係
レルコトヲ熟知シ居リタル等ナルニ付被控訴人ハ其旨ヲ執達吏ニ告ケ控訴人ノ所有品ヲ差押フル
カ如キコト無カラシムヘキ筋合ナルニ事茲ニ出テサリシ結果執達吏カ本件ノ物品ヲ差押フルニ至
リタルモノト認メ得ヘク要スルニ其不當ナル差押ハ被控訴人ノ過失ニ原因スルモノナルカ故ニ之
カ爲メ生シタル損害ハ被控訴人ニ於テ賠償ノ責ニ任セサル可カラス。然レトモ執達吏ハ司法機關
ノ一ニシテ獨立セル職責ヲ有シ當事者カ委任スル事項ニ付テハ當事者トノ間ニ代理人トシテ民法
ノ法則ニ支配サレサルハ勿論其委任事項ノ實行ニ付當事者ノ意思ニ羈束サルヘキ性質ノモノニア
ラス本件ニ於テ原院認定ノ如ク上告人カ被上告人ノ所有ニ係ル物品ナルコトヲ熟知シナカラ執達
吏ニ於キテ之レカ差押ヲ爲スヲ防止セザリシ消極的ノ行爲ヲ以テ上告人ニ過失アリト判示スレト
モ是レ畢竟執達吏ノ性質ト過失ノ法理ヲ曲解シタルモノニシテ執達吏ハ委任者ノ意思ヲ省ミス其
責任ヲ以テ其認定ニ基キ正當ナル差押ヲ爲スヘキ筋合ナリ故ニ當事者ニ於キテ其差押ノ當、不當
ニ付認識スル所アルモノ之ヲ執達吏ニ知ラシムルノ責任ナキハ勿論假令當事者ニ於キテ其物件カ債
務者ニ屬セサルコトヲ主張シ其差押ヲ防止セントスルモ執達吏ニ於キテ其差押ノ正當ナルコトヲ
認定スルニ於キテ進ンテ之ヲ差押フルニ妨ナキナリ故ニ上告人カ本件差押物件カ被上告人ノ所有
ナルコトヲ知リナカラ之レヲ執達吏ニ告ケヌ又差押ヲ防止セサルコトハ法律上上告人ノ過失ナラ
サルハ明白ナリ原判決ハ此點ニ於キテ法則ヲ不當ニ適用シタル不法アリト云フニ在リ
因テ按スルニ執達吏ハ司法機關ノ一ニシテ獨立ノ職責ヲ有スルコト勿論ナルモ同時ニ當事者ノ代
民法實施以前ニ於ケル第三者ノ爲メニスル契約ノ效力
三五九

理人タル資格ヲ有スルカ故ニ執達吏カ差押ヲ爲スニ當リ債權者ニ於テ債務者ノ所有物ニアラサル
コトヲ告知スルトキハ執達吏ハ之カ差押ヲ爲サ、ルヲ以テ當然ノ條理トス然レハ原判決カ上告人
ニ於テ本件ノ差押物ハ被上告人ノ所有ニ屬スルコトヲ知リタル事實ヲ認メ而シテ其旨ヲ執達吏ニ
告ケテ差押ヲ防止セザリシコトヲ以テ上告人ノ過失ナリト爲シタルハ相當ニシテ原判決ハ法則ヲ
不當ニ適用シタル不法ナシ

貸金請求事件

明治三十七年(九)第百六十號
明治三十七年六月十六日判決

(破毀)

判決要旨

一 民法第二十條ノ規定ハ無能力者カ相手方ニ對シ能力者タル
コトヲ信セシムル爲メニ詐術ヲ用ヒタル場合ノミナラス無
能力者タルコトヲ表白シ其ノ法定代理人保佐人又ハ夫ノ同
意書若クハ許可書ヲ偽造シ相手方ヲ欺キタル場合ニモ亦及
之ヲ適用ス

說明

民法第二十條ノ規定ニ依ルトキハ無能力者カ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ
詐術ヲ用ヒタルトキハ其ノ行爲ヲ取消ス、コトヲ得、ストアリ今本條ヲ適用シテ無
能力者ノ爲メニ附與セラレタル取消權ヲ剝奪セシニハ其ノ有能者タルコトヲ
信セシムル爲メニ詐術ヲ用ヒタルトキノミニ限ルヘク無能力者カ明カニ無能力
者タルコトヲ表白シ其ノ法定代理人保佐人又ハ夫ノ同意書若クハ許可書ヲ偽造
シテ相手方ヲ欺キタル場合ノ如キハ自己ノ能力者タルコトヲ信セシメタルアラ
サルヲ以テ之レニ本條ヲ適用スルコト能ハサルカ如シ然レトモ此ノ觀念ハ本條
以テ本條ノ精神ヲ得タルモノト云フヲ得、抑モ本條ノ趣旨トスル處ハ無能力者
カ無能力ニ基ク法律行爲ノ取消原因ヲ隱匿シ相手方ヲ欺キテ不完全ナル法律行爲
ヲナサシムルヲ防止セントスルニ在リ果シテ然ラハ本條適用ノ範圍ハ何レ無能
力者カ其ノ無能力ヲ隱蔽シ相手方ヲ欺キテ有能者ナリト信セシメタル場合ノミ
ナラス無能力者カ法定代理人保佐人又ハ夫ノ同意書若クハ許可書ヲ偽造シテ
相手方ヲ欺キテ無能力ヨリ生ズル取消原因ヲ除去シタルカ如クニ信セシメタル
モ亦タ其ノ歸スル所ハ畢竟無能力ニ基ク取消原因ヲ隱蔽スルニ外ナラサルヲ以
テ是ヲ本條適用ノ範圍ニ置クヘシトノ議論ニ至當ノ解釋トナサ、ルヲ得、ス
更ラニ一步ヲ進メテ之ヲ論センニ今試ニ民法第二十條ノ規定ナシトセシカ無能
力者ハ論理上本條ノ場合ニ於テモ依然取消權ヲ有スルノ結果相手方ハ無能力者
ノ詐術ノ爲ニ已ニ締結シタル法律行爲ヲ取消サルハ不幸ニ陥ルヘシ如斯ナル

民法第二十條ノ適用ノ範圍

トキハ相手方ハ無能力者ノ詐欺即チ不法行為ヲ原因トシ爲ニ生シタル損害賠償ノ請求ヲ爲サルヲ得サルニ至ルヘシ按スルニ凡ソ損害賠償ナルモノハ權利侵害ノ回復方法トシテ最モ正確ナルモノナルカ故ニ他ニ正當ナル回復方法ノ存スルニ於テハ法律ハ之ニ依リテ其目的ヲ達スルノ道ヲ講スルモノニシテ足ラズ民法第二十條ノ如キハ正ニ其一タルヲ知ルヘキナリ即チ無能力者ノ取消ニ依リ相手方ノ被ルヘキ損害ハ損害賠償ノ方法ニ依リテ回復セシメシヨリ寧ロ無能力者ノ取消權ヲ剝奪シ其行為ヲシテ完全ニ成立セシムルニ如クサレハナリ由之觀是無能力者カ其ノ法定代理人保佐人又ハ夫ノ同意書若クハ許可書ヲ偽造シタル場合ト雖モ相手方ヲ保護スル爲メニハ損害賠償ノ方法ヲ採ランヨリ其ノ行為ヲシテ完全ニ成立セシムルノ勝レルニ如クサルコト尙ホ詐術ヲ以テ能力者タルコトヲ信セシメタル場合ト至モ異ナル所ナカルヘシ今此ノ推論ニ依リテ考フルトキハ兩者ノ間法律ノ適用ヲ異別ニシ相手方ノ保護ヲ二三ニスルノ理由アルヲサルナリ是レ本判決ノ生スル所以ナリ

(參照) 無能力者カ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用キタルトキハ其行為ヲ取消スコトヲ得ス(民法第二十條)

第一審 浦和地方法裁判所 熊谷支部
上告人 大島正三郎
被告 野村庫次郎

第二審 東京控訴院
訴訟代理人 牛田幸助
訴訟代理人 米原光太郎

右當事者間ノ貸金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十七年二月九日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被告上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告理由ノ第二點ハ原判決ハ其理由第三ニ於テ「控訴人カ被控訴人ニ對シ取消ノ意思表示ヲ爲シタルコトハ被控訴人ノ認ムル所ナリ此意思表示ハ其效ナキモノナルヤ否ヤヲ按スルニ民法第二十條ハ無能力者カ能力者タル資格即チ法律行為ヲ爲ス能力ニ付何等ノ制限ヲ受ケサル能力上ノ情體ニ在ルコトヲ相手方ニ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒタル場合ニノミ適用スヘク本件ノ如ク其法律行為ヲ爲スニ付法律ノ規定セル要件即チ保佐人ノ同意アリタル事ヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒテ相手方ヲ欺キタル場合ニ適用スヘキモノニアラス故ニ取消ハ有效ニシテ契約上ノ債權名義ニ基ク被控訴人ノ請求ハ失當ナリ」ト說示セリ然レトモ民法第二十條ノ所謂無能力者タルコトヲ信セシムルトハ原院ノ解釋ノ如ク狹隘ナルモノニアラス今之ヲ立法ノ順序ニ見ルニ民法第三條乃至第十八條ニ於テ一般無能力者(未成年者禁治產者準禁治產者妻)ノ法律行為ニ關スル事項ヲ規定シ同第十九條第二十條ニ於テ其相手方ノ地位ヲ規定セルモノナルカ故ニ準禁治產者ノ相手方即チ上告人モ亦民法第二十條ノ利益ヲ享受スルモノナルコト論ヲ俟タス然リ而シテ同條ノ所謂能力者タルコトヲ信セシムルトハ未成年者カ成年者ナリト信セシメ禁治產者カ非禁治產者ナリト信セシメ妻

民法第二十條ノ適用ノ範圍

カ獨身者ナリト信セシメ準禁治産者カ非準禁治産者ナリト信セシメタル場合ノミナリヤ將タ又未
成年者カ後見人ノ同意ヲ得タリト信セシメ妻カ夫ノ許可ヲ得タリト信セシメ準禁治産者カ保佐人
ノ同意ヲ得タリト信セシメタル場合ヲモ包含スルヤ否ヤヲ按スルニ法ノ文字ヲ簡單ニ讀過セハ後
者ノ場合ニ於テハ無能力者カ詐術ヲ用ヒテ能力者タルコトヲ信セシメタルニ非ス無能力者ハ依然
トシテ無能力者ナリト告白(殊ニ本件ニ於テハ)シタルモノニシテ相手方カ錯誤ニ因リテ能力者ナ
リト信シタル場合ニ非ス隨テ同條ノ適用ヲ受クヘキモノニ非ストノ解釋ヲ下スヲ得サルニアラサ
ルモ是徒ニ法文ノ字句ニ拘泥シテ法律解釋ノ當ヲ得タルモノニアラスシテ學問ノ弊ヨリ生スル一
種ノ偏見タルニ過キス抑モ同條ハ無能力者ノ不法行為ニ基ク相手方ノ損失ヲ寵護シタル規定ニシ
テ其損失ハ取消ニ依テ發生スルモノナルカ故ニ損失ノ發生スル根源タル取消權ヲ杜絶シタル法規
ナルコト明ナリ果シテ然ラハ無能力者ノ詐術ニ因リ無能力者ノ相手方カ能力者ナリト信シタル結
果取消サルヘキ法律行為ニアラスト確信シテ爲シタル場合ト無能力者ノ相手方カ無能力者ナルコ
トヲ知ルモ法律行為ヲ爲ス法律上ノ要件ヲ具備セルカ故ニ取消サルヘキ法律行為ニ非スト確信シ
テ爲シタル場合ト其間法ノ保護ヲ二三ニスヘキ理由アルコトナシ要スルニ民法第二十條ノ能力者
タルコトヲ信セシムルハ此法律行為ハ法律上完全ナルモノニシテ取消サルヘキモノニアラストノ
確信ヲ相手方ニ與フルコトヲ意味スルモノタルコト條理上將ニ然ラサルヘカラサルノミナラス立
法ノ精神並ニ類似解釋ヲ許ス私法ノ解釋トシテ當然ノコトナリト信ス今之ヲ吾國學者ノ著書ニ見
ルニ民法原論ハ總則上卷第五十七頁ニ於テ民法理由ハ其第一卷第四十九頁ニ於テ執レモ上告人

ノ所論ヲ認メタリ而シテ川名兼四郎氏講述改訂増補民法總論ハ其第一百十一頁ニ詳論シテ曰ク「本
條ハ無能力者カ能力者タルコトヲ信セシメタル場合ノミヲ規定スルヲ以テ無能力者カ無能力者ナ
リト陳述シタル場合ニハ其適用ナキカ如シ例ヘハ無能力者カ其法定代理人保佐人又ハ夫ノ同意書
若クハ許可書ヲ偽造シテ相手方ヲ欺キタル場合ニ於テハ無能力者ハ自己ノ能力者タルコトヲ信セ
シメタルニアラス本條ニ依ルコト能ハサルカ如シ隨テ其行為ハ依然トシテ取消スコトヲ得ヘキカ
如シト雖モ右二ツノ場合ハ之ヲ區別スルノ理由ナシ甲ノ場合ニ於テハ取消スヲ許サス乙ノ場合ニ
於テハ取消ヲ許シ其行為ノ取消アリタルカ爲メ相手方ニ損害ヲ生シタル場合ニ於テハ相手方ハ不
法行為ニ因ル損害賠償ヲ請求スルコトヲ得ルモノト爲スノ理由ヲ發見スルコトヲ得ス故ニ本條ニ
所謂能力者トハ唯箇々ノ行為ニ付キテノ能力者ナルコトヲ意味シ能力ノ點ニ於テ自己ノ行為ヲ取
消スヘカラサルモノト信セシムルモノ云々ノ事ヲ意味スルモノト解セサルヲ得ス隨テ又乙ノ場合ニ
於テモ無能力者ノ行為ハ取消シ得サルモノナルヘシト夫レ然リ如斯明白ナル法ノ解釋ヲ誤リテ
被上告人カ保佐人ノ同意ヲ得タリトノ詐術ヲ用ヒテ上告人ヨリ金員ヲ借入レタル法律行為ノ取消
ヲ有效ナリト論斷シタル原判決ハ民法ノ取消ニ關スル規定ヲ不當ニ適用シ且同法第二十條ヲ適用
セサル違法ノ裁判ニシテ破毀ヲ免レスト云フニ在リ
按スルニ民法第二十條ハ無能力者カ法律行為ヲ爲スニ當リ之ヲ爲スノ能力ヲ有スル者タルコトヲ
相手方ヲシテ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒタル場合ニ於テハ其法律行為ヲ取消スヲ得サルコトヲ規
定シタルモノナレハ準禁治産者ノ如キ無能力者カ或法律行為ヲ爲スニ付キ自ラ準禁治産者ニ非サ

民法第二十條ノ適用ノ範圍

ルコトヲ信セシムル爲メ相手方ニ對シ詐術ヲ施シ之ヲ信セシメタル場合ハ勿論其法律行為ニ付キ保佐人ノ同意ヲ得タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒ相手方ヲシテ之ヲ信セシメタル場合ニ於テモ其行為ヲ取消スコトヲ得サルモノト謂ハサル可カラズ何トナレハ此二箇ノ場合ヲ區別シ規定ヲ異ニスヘキ理由ナキヲ以テ民法第二十條ハ無能力者ノ爲シタル法律行為ニ關シ相手方ヲシテ能力者タルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒタル場合ヲ規定シタルモノト解釋スルヲ相當ト爲セハナリ然ルニ原判決ハ其理由ノ第三ニ於テ準禁治產者カ法律行為ニ付キ保佐人ノ同意アリタルコトヲ信セシムル爲メ詐術ヲ用ヒ相手方ヲ欺キタル場合ニハ同法條ヲ適用スヘキモノニ非スト爲シ其結果上告人ノ請求ヲ棄却シタルハ不法ナリトス此理由ハ原判決ノ全部ヲ破毀スルニ足ルヲ以テ他ノ上告理由ニ對シテハ特ニ辯明ヲ與フルノ要ナシ因テ本院ハ民事訴訟法第四百四十七條第一項及同第四百四十八條第一項ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

●約束手形金請求事件

明治三十七年(オ)第二百三十二號
明治三十七年七月五日判決 (棄却)

判決要旨

一 約束手形ニシテ商法第五百二十五條ニ列記シタル形式上ノ要件ヲ具備スル以上ハ縱令其ノ條項中事實ニ適合セサルモノアルモ之レカ爲メ手形ノ成立ニ影響ヲ及スコトナシ

然レトモ手形ノ記載事項カ虛偽ニシテ真正ナル事實ヲ立證スルトキハ之レカ爲メ手形當事者ノ權利義務ニ影響ヲ及スノ結果ヲ生スルトキハ其ノ無効ヲ主張スルコトヲ得
一 手形ニ記載シタル事項ハ其ノ文言ニ從ヒ之ヲ解釋スヘク他ノ證據方法ニ依リ又ハ當事者ノ意思ヲ推測シテ其意義ヲ定ムヘキモノニアラス然レトモ其ノ記載事項カ如何ナル意義ヲ有スルヤチ手形ノ文言ニ依リ解釋スルコトハ一ニ裁判所ノ職權ニ屬ス

(參照) 約束手形ニハ左ノ事項ヲ記載シ振出人之ニ署名スルコトヲ要ス「一、其約束手形タルコトヲ示スヘキ文字」「二、一定ノ金額」「三、受取人ノ氏名又ハ商號」「四、單純ナル支拂ノ約束」「五、振出ノ年月日」「六、一定ノ満期日」「七、振出地(商法第五百二十五條)

第一審 千葉地方裁判所

第二審

東京控訴院

上告人 土橋 又吉

訴訟代理人 中村 福太郎

被上告人 太田 周作

訴訟代理人 印 東 胤一

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十七年三月十一日言渡シタル判決ニ對

手形記載ノ條件カ事實ニ符合セサル場合ニ於ケル手形ノ效力

シ上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ
本件ハ審判上前判決例ト相反スル意見アルヲ以テ裁判所構成法第四十九條ニ據リ民事第一第二ノ
兩部聯合シテ判決ス

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔スヘシ

理由

上告論旨ノ第一點ハ上告人ノ甲第一號證ヲ振出シタルハ千葉縣安房郡館山町ナルニ甲第一號證ニ
記載ノ振出地ハ上州佐波郡境町トアリテ結局真正ナル振出地ノ記載ヲ缺キタルモノニシテ甲第一
號ノ約束手形ハ無効ナリトノ主張ニ對シ原院ハ約束手形ノ振出地トシテハ必スシモ實際ニ手形ヲ
作成交付セサル地ヲ記載スルコトヲ妨ケス手形面ニ現存スル行政區劃ノ獨立シタル最小區域ヲ振
出地トシテ記載アル時ハ適法ナリトスト判定セラレタリ如此ハ法律カ手形ノ要件トシテ振出地ノ
記載ヲ必要トシタル規定ヲ無意味ナラシムルモノニシテ商法第五百二十五條ニ違背セル不法ノ裁
判ナリト云フニ在リ

依テ按スルニ凡ソ手形ハ要式的證券ナルカ故ニ約束手形ノ成立ニ付キテハ商法第五百二十五條ニ
列記シタル事項ヲ手形ニ記載スルコトヲ要シ若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ手形トシテ其效力ヲ生
スルコトナシト雖モ苟クモ右要件ヲ具備スルニ於テハ其記載事項カ必スシモ事實ト適合スルコト
ヲ必要トセサルナリ蓋シ手形カ前記形式的要件ヲ具備スルヤ否ハ各自手形ヲ授受スルニ際シテ容

易ク之ヲ調査スルコトヲ得レトモ其記載事項カ果シテ事實ニ適合スルヤ否ハ之ヲ調査スルコト頗
ル難ク而シテ若シ形式的要件ニ於テ更ニ間然スル所ナキニ其記載事項カ事實ニ適合セザルノ故ヲ
以テ其手形ヲ無効ナラシムルカ如キコトアランニハ何人モ手形ノ記載事項ニ信頼シテ之ヲ授受ス
ルニ由テク爲メニ手形ノ流通ヲ阻害スル結果ヲ生スルニ至ルヘキハ極メテ明瞭ナリトス是レ手形
ノ形式的要件ヲ具備スルニ於テハ其記載事項ノ眞偽如何ニ拘ハラヌ之ヲシテ有效ナラシムル所以
ニシテ而シテ此法理ハ手形ヲ授受シタル直接當事者間ニ於ケルト將又手形ヲ取得シタル者ノ善意
又ハ惡意ナルトニヨリテ其適用ヲ異ニスヘキノ理由更ニ在ルコトナシ何トナレハ手形ノ成立要件
ナルモノハ孰レノ場合ニ於テモ一定スルモノニシテ手形取得者ノ善意惡意若クハ直接當事者ナル
ト否トニ因リテ其成立要件ヲ異ニスヘキ理由毫モ之ナキノミナラス此等當事者意思ノ善惡若クハ
手形授受ノ直接又ハ間接各事實ノ内容ニ從テ手形成立ノ要件ヲ異ニスルカ如キハ爲メニ流通證券
タル手形ノ信用ヲ薄弱ナラシメ延テ其流通ヲ阻害スルノ虞少カラサレハナリ斯ノ如ク手形ノ成立
ニ付キテハ一定ノ要件ヲ具備スルヲ以テ足ルヘク記載事項ノ眞實ナラサルコトハ形式上手形成立ノ
瑕疵ヲ爲スモノニ非スト雖モ若シ其記載事項虛偽ニシテ眞正ナル事實ヲ立證スルニ於テハ之カタ
メ實質上當事者ノ權利義務ニ影響ヲ及スヘキ場合ニ在リテハ手形上ノ請求ニ對スル實質上ノ抗辯
トシテ或ハ振出人ヨリ廣ク手形關係者ニ對シテ主張シ得ヘキモノアルヘク又ハ特ニ直接當事者ニ
對シテノミ主張シ得ヘキモノアルヘシ然レトモ是レ全ク手形上ノ請求ニ對スル實質上ノ抗辯ニ屬
スルモノニシテ夫ノ手形カ法律ノ要求スル要件ヲ具備スルヤ否ヤトハ全ク別箇ノ問題ニ屬スルモ

手形記載ノ條件カ事實ニ符合セサル場合ニ於ケル手形ノ效力

ハナリ而シテ翻テ本件上告人ノ原院ニ提出シタル抗辯ノ内容ヲ調査スルニ原判決ニ摘示シタルカ
 如ク本件手形ハ千葉縣安房郡館山町ニ於テ被告人ニ振出シタルモノナルニ該手形ニ振出地トシ
 テ上州佐波郡境町ト記載シタルハ約束手形トシテノ要件ヲ欠缺セル無効ノ手形ナリト云フニ止マ
 ルモノニシテ其振出地カ眞實安房郡館山町ナルカ爲メ實質上當事者ノ權利義務ニ消長ヲ及スヘキ
 コトヲ主張スルモノニ非サルカ故ニ原院カ約束手形ノ振出地トシテハ必スシモ實際ニ手形ヲ作成
 交付シタル地ヲ記載セルコトヲ要セス形式上ノ記載ヲ具備スルトキハ手形トシテ有效ナリトノ理
 由ヲ以テ右上告人ノ抗辯ヲ排斥シタルハ誠ニ相當ニシテ本論旨ハ其理由ヲキモノトス
 上告論旨第二點ハ約束手形ニ一定セル滿期日ヲ記載スルハ手形成立ノ方式ナルヲ以テ妄リニ推測
 ヲ以テ其欠缺ヲ補フヲ許サス原判決ニ「甲第一號證ニ振出ノ日トシテ明治三十六年四月五日ト記
 載シアリ支拂期日トシテ四月二十五日ト記載アル以上明治三十六年四月二十五日ヲ滿期日トシテ
 記載アルモノト認ムルコトヲ得ヘシトハ振出ノ年月日ヲ材料ニ供シテ同年タルコトヲ推定シ以
 テ滿期日ノ年ノ欠ケタルヲ補足シタルモノニ非スシテ何ソヤ是レ商法第四百五十條第一號第五百
 二十五條第六號第五百二十九條ニ違背シタル不法ノ裁判ナリト云ヒ」第三點ハ原判決ニ曰ク「手
 形ノ振出日ノ如キハ商法第四百四十五條第六號第五百二十五條第五號等ニ規定シアル如ク方式ト
 シテ年月日共ニ記載セサルヘカラスト雖モ滿期日ニ付テハ方式トシテ年月日共ニ記載セサルヘカ
 ラサルコトヲ規定セス只滿期日カ一定スル様記載スレハ足レリ」云々ト是レ蓋シ文字ニ拘泥スル
 モノニ非スンハ則チ牽強附會ノ解釋ナリトス滿期日ヲ示スヘキ文字ニ年月日ノ三字ナキヲ以テ年

ヲ欠クモ可ナリトノ主旨ナレトモ凡ソ諸般ノ期日ノ一定セルハ年月日共ニ具備シタル場合ニ限ル
 特ニ手形ノ方式トシテ滿期日ハ一定セサルヘカラサルモノタルヲ以テ少クトモ滿期日ノ記載ノミ
 獨立セシメテ尙其期日ノ一定セルコトヲ要ス振出日ノ年號ヲ持チ來リ其助力ニ依リ始メテ滿期日
 ノ年號ヲ知ルヲ得ルト云フカ如キハ假令推定ニ依リタルモノニ非ストスルモ尙方式トシテ滿期日
 トシテハ無効タルヲ免レス要スルニ原判決ハ假リニ四月二十五日ヲ明治三十六年ノ四月二十五日
 トセシハ類推解釋ニ非ストスルモ尙前點各法條ニ違背セシ不法アリト云フニ在リ
 按スルニ手形ハ形式的證券ナルカ故ニ手形上ニ記載セラレタル事項ハ手形面上ノ文言ニ依リテ之
 ヲ解釋スヘク他ノ證據方法ニヨリ當事者ノ意思ヲ推測シテ其意義ヲ定ムヘキモノニ非スト雖モ其
 記載事項カ如何ナル意義ヲ有スルヤラ手形面上ノ文言ニ據リテ解釋スルコトハ是レニ裁判所ノ
 職權ニ屬スルモノトス而シテ本件手形ノ滿期日ニ四月二十五日ト記載シアルハ明治三十六年四月
 二十五日ノ意義ナルコトハ原院カ甲第一號證約束手形面上ノ文詞ニ據リ之ヲ解釋シタルモノニシ
 テ而シテ此解釋タル毫モ法則ニ違背シタルモノニ非ス畢竟本論旨ハ右原院ノ專權ニ屬スル證書ノ
 解釋ヲ非難スルニ過キササルモノニシテ其理由ナシ

●約束手形金請求事件

明治三十七年(オ)第二百十二號

(破毀)

判決要旨

一、取締役カ自己又ハ第三者ノ爲メニ會社ト取引ヲ爲サンニハ

取締役カ會社ト取引ヲ爲スニ付テノ監査役ノ承認及ヒ此ノ承認ナキ取引ノ效力

商法第七十六條ニ依リ監査役ノ承認ヲ求ムルコトヲ要ス
此ノ承認ハ一切ノ取引ヲ爲スコトヲ豫メ包括的ニ爲スコト
ヲ得ス特定ノ取引ニ付キ格別ニ之ヲ爲スコトヲ要ス

一、取締役カ右法文ニ違背シ監査役ノ承認ヲ求メスシテ會社ト
取引ヲ爲スモ其ノ行爲ハ會社ニ於テ取消ノ意思ヲ表示スル
ニアラスンハ當然無効ナルモノニアラス故ニ若シ會社カ其
ノ行爲ヲ有效トシ因テ得タル權利ノ實行ヲ求ムルトキハ相
手方タリシ取締役又ハ第三者ハ之レニ應スルノ義務アリ

(參照) 取締役ハ監査役ノ承認ヲ得タルトキニ限り自己又ハ第三者ノ爲メニ會社ト取引ヲ爲スコトヲ得(商法第七十六條)

第一審 横濱地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 株式會社日本工商銀行

右法定代理人 川谷芳次郎

被上告人 江口貞吾

訴訟代理人 板東幸平

訴訟代理人 平岡萬次郎

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十七年三月五日言渡シタル判決ニ對シ
上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタル

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ東京控訴院ニ差戻ス

理由

上告論旨ノ第一ハ會社ノ取締役カ自己若クハ第三者ノ爲メニ其會社ト取引ヲ爲スニハ監査役ノ承
認ヲ得タル可ラアルハ吾商法ノ明規スル所タリ蓋シ本件手形裏書人タル岸田俟次郎カ上告人銀行
ノ取締役就職中上告人銀行ヘ手形ノ裏書讓渡ヲ爲スニ際シ概括的ニモセヨ監査役ノ承認アリタル
事ハ原院判決ノ認メタル事實トス抑モ取締役ナル者ハ内部ニ在テハ會社ノ業務ヲ執行シ外部ニ對
シテ會社ヲ代表スルノ權義ヲ有ス如斯會社ノ利害關係ヲ一身ニ負荷スル者カ自己若クハ第三者ノ
爲メ會社ト取引ヲ爲ス時ハ雙方ノ利益ヲ顧慮セサルヘカラサル結果事實上自己ノ利益ヲ計ルニ傾
クハ自然ノ情勢ナルカ故專ラ會社ノ利益保護ヲ目的トシ私曲ノ弊害ヲ避ケンカ爲メ監査役ヲシテ
之ニ承認權ヲ與ヘ監査役ニ於テ會社ニ不利益ヲ及ホスナキヲ認メタル時ハ其取引ヲ爲スコトヲ承
認スルヲ得ヘク若シ取締役カ會社ニ不利益危險ヲ與フルノ患アル時ハ監査役ハ何時ニテモ自由ニ
其承認ヲ取消スヲ得ヘシ因是觀之取締役カ其會社ト取引ヲ爲スニ付キ與フル監査役承認ノ範圍ハ
必スシモ簡々特定事項タラサルヘカラサルノ理ナシ苟モ監査役ノ認メテ以テ會社ニ不利益危險ナ
シトスルニ於テハ概括的ニ爲シタル監査役ノ承認モ亦商法第七十六條ノ所謂承認トナルヘキモ
ノナルヲ信ス若シ否ラスシテ特定事項ニ付キ一々監査役ノ承認ヲ經サル可ラサルモノトセンカ實
際其類ニ堪ヘサル而已ナラス爲メニ取引ノ敏活ヲ失スル等不便尠カラスシテ却テ商法規定ノ精神

取締役カ會社ト取引ヲ爲スニ付テノ監査役ノ承認及ヒ此ノ承認ナキ取引ノ效力

ニ反スレハナリ假リニ一步ヲ譲リ本件手形取引ニ關シ監査役ノ承認ナキモノトスルモ商法第七十六條ニハ取締役カ自己若クハ第三者ノ爲メ會社ト取引ヲ爲スニハ監査役ノ承認ヲ經ルヲ要スト規定セリ故ニ取締役カ監査役ノ承認ヲ俟タズシテ會社ト取引シタル場合ニハ之レカ制裁トシテ其取引ハ會社ニ對シテハ有效タラシメサルモ爲メニ本件ノ如キ會社ヨリ取締役其他ノ者ニ對シテ取引ノ效力ヲ主張スルハ毫モ妨ケサル所ニシテ該條法文ノ趣旨專ラ會社ノ利益保護ニノミ着眼セラレタルノ結果如斯論結ヲ生スル所以ナリ然ルニ原院判決ニ於テハ該條ハ監査役カ特定取引ニ付キ利益ヲ考量シテ承認ヲ與フルノ趣旨ニ出テタルヲ以テ其取引如何ニ拘ハラズ豫メ一般ニ承認ヲ與フルカ如キハ同條規定ノ精神ニ反ストノ理由ヲ以テ本件ニ對シ結局監査役ノ承認ナキモノニ歸セシメ其取引ハ絕對ニ無効ナルモノトシ被告上告人ノ控訴ヲ採用シ漫然上告人ノ請求ヲ棄却シタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリト云フニ在リ

依テ按スルニ商法第七十六條ノ規定ハ會社ノ利益ヲ保護セントノ目的ヲ以テ設ケラレタルモノナレハ同條ニ所謂監査役ノ承認トハ一切ノ取引ヲ爲スコトヲ豫メ承認スト云フ如キ概括的ノ承認ヲ指スモノニアラスシテ特定ノ取引ニ付特ニ與ヘラレタル承認ヲ指示スルモノト解セサルヘカラス何トナレハ或取引カ果シテ會社ノ爲メ利益ナルヤ否ハ現實其取引自體ニ就キ考量スルニアラザレハ之ヲ知得シ難ケレハナリ故ニ原院カ「商法第七十六條ノ規定ハ監査役カ特定ノ取引ニ付利益ヲ考量シテ承認ヲ與フルノ趣旨ニ出タルヲ以テ其取引ノ如何ニ拘ハラズ豫メ一般ニ承認ヲ與フル如キハ同條規定ノ趣旨ニ反スルモノト認ム」トノ理由ヲ以テ上告人提出ノ「岸田侯次郎ノ取締役

就職中會社ト取引ヲ爲シ得ヘキ旨監査役ノ概括的承認アルヲ以テ本件手形ノ裏書讓渡ハ有效ナリトノ主張ヲ排斥シタルハ正當ナリ然レトモ前段説明ノ如ク商法第七十六條ノ規定ハ會社ノ利益ノ爲メニ設ケラレタルモノナレハ該規定ニ背戾シタル行爲ト雖モ當然無効ニ屬スルモノニアラス會社ニ於テ之ヲ取消スノ意思ヲ表示シ始メテ其效力ヲ失フモノトス故ニ若シ會社カ其取引ヲ有效トシ之ニ因テ得タル權利ノ實行ヲ求メンカ其相手方タリシ取締役又ハ第三者ハ該取引ノ無効ヲ主張シ以テ會社ノ請求ヲ拒ミ得ルモノニアラス今本件ニ於テ上告會社ハ取引當時其取締役タリシ岸田侯次郎カ監査役ノ承認ヲ得スシテ上告會社ト爲シタル取引ニ因リ得タル權利ノ實行ヲ求ムルモノナレハ該取引ヲ有效トセルモノナルヲ以テ第三者タル被告上告人ハ其無効ヲ主張シ得ヘカザサルヤ明ナリ然ルニ原院カ云々「假令被告控訴人(上告人)主張ノ如キ概括的承認アリトスルモ之ヲ以テ商法規定ノ承認アリタリト云フヲ得ス然ラハ即チ本件手形ノ裏書讓渡ニ關シテハ監査役ノ承認ナキニ歸スルヲ以テ其取引ハ無効ナリト云ハサル可ラス」云々ト說示シ上告會社ト岸田侯次郎間ニ爲シタル係争取引ハ絕對的無効ノモノ、如ク認メ以テ上告會社ノ請求ヲ排斥シタルハ不法タルヲ免レス

●賣買品引渡請求事件

明治三十七年(オ)第四百五十四號 (棄却)
明治三十七年六月十四日判決

判決要旨

一、債務者カ債權者ノ代理人ニ對シ金錢ノ辨濟ニ代ヘ代理人名

代理人名義ノ手形

義ノ手形ヲ振出シ代理人ハ債權者本人ノ爲メニ之ヲ受取りタルキハ債權者自ラ直接ニ手形ヲ收得シタルト同一ノ效力ヲ生ス隨テ其ノ辨濟ハ有效ナリトス

說明

手形上ノ權利ハ手形ニ記載セラレタル者ニアラスハ之ヲ取得スルコト能ハサルハ手形法上ノ一般ノ原則ナリトス今此ノ原則ヨリ本件ノ場合ヲ推考スルトキハ債權者ノ振出シタル代理人名義ノ手形ハ獨リ券面ニ記載セラレタル代理人其ノ權利ヲ收得スルニ止マリ之レニ依リテ本人タル債權者ハ手形上ノ權利ヲ收得スルコト能ハサルモノト云ハサルヲ得ス已ニ債權者手形上ノ權利ヲ收得スルコトヲ得スト能ハサルモノト云ハサルヲ得サルニ似タリ然レトモ此ノ觀念ハ未タ管見ノ排ヲ免カレズ勿論手形ニ記載セサル者ハ手形上ノ權利ヲ直接ニ得ルコト能ハスト雖モ代理人カ已ニ本人ノ爲メニ其ノ權限内ニ於テ手形ヲ取得シタル以上ハ代理ノ原則ニ依リ其ノ權利ハ本人ノ取得シタルト同一ノ效力ヲ生スルニ妨クルコトナシ詳言セハ此ノ場合ニ於ケル手形債權ノ直接ノ主體ハ代理人ニシテ之レカ請求ハ代理人ノ名義ヲ以テスルニアラスンハ爲スコトヲ得スト雖モ而モ代理人ハ代理人トシテ其ノ權利ヲ主張スルニ止マリ自己獨立ノ名義ヲ以テシテハ一モ權利者タルノ實ヲ舉クルコト能ハス權利者タルノ實ハ本人ノ獲得スル所ニシテ形容シテ言ハハ代理人ハ名義上ノ權利者タリ本人ハ實質上ノ權利者ナリト云フヲ得ヘシ果シテ然ラハ本件ノ場合ニ於ケル手形ノ發行ハ代理ノ原則ニ依リ債權者ハ實質上ノ權利ヲ收得スルモノニシテ隨テ辨濟ノ效力ヲ生スヘキヤ當然ナリトス

第一審 横濱地方裁判所 第二審 東京控訴院

上告人 株式会社セール商會

右法定代理人 エフ、ゲー、セル

訴訟代理人 佐藤 博 愛

被上告人 田部井芳兵衛

訴訟代理人 (高) 木 豐 三 (小) 出 五 郎

右當事者間ノ賣買品引渡請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十七年一月二十三日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告論旨第一點ハ被上告人カ係争アラシメタル代金ノ一部ヲ二通ノ約束手形ニテ支拂ヒタリト稱スル甲二號證ノ一ハ被上告人ヨリ訴外人小野仙吉ニ宛テ振出シ小野仙吉ハ之ヲ株式會社東京商業銀

代理人名義ノ手形

行ニ讓渡シ同銀行ハ更ニ横濱正金銀行ニ讓渡シ同銀行ニ於テ被上告人ヨリ取立テタル者ニシテ甲
 二號證ノ二ハ被上告人ヨリ訴外人小野仙吉ナル一個人ニ宛テ振出シ同人カ之ヲ合名會社安田銀行
 ニ讓渡シ同銀行ハ之ヲ日本銀行ニ讓渡シ日本銀行ハ横濱正金銀行ニ依頼シ被上告人ヨリ取立テタ
 ルモノナルコトハ證書自身ニ明ナル所ナリ而シテ上告人タル被控訴人ハ原院ニ於テ該甲二號證ノ
 一及二ヲ援用シ該手形ハ小野仙吉自身ノ爲メニ受取リタル者ニシテ株式會社セル商會ニ關係ナ
 キ者タルコトヲ立證セリ抑モ手形上ノ權利義務ハ手形自身ニ依リテノミ定マルヘキ者ナレハ前記
 甲二號證ノ一及二ナル手形ノ振出ニ依テ其權利ヲ取得スル者ハ名宛人タル小野仙吉ノミニシテ同
 人ノ外此手形上ノ權利ヲ處分シ得ヘキ者アル可ラス而シテ同人ハ此争フ可ラサル自己ノ權利ニ基
 キ訴外某々銀行ニ裏書讓渡シタルコト該證ノ裏書ニ明ナル所ナリ代價ノ支拂ナル者ハ債務ノ辨濟
 ニシテ債務ノ辨濟トハ其債務ノ性質ニ從ヒ之ニ對スル債權ヲ満足セシムルノ謂ナリ上告人會社ヲ
 代表スヘキ何等ノ資格ヲモ附記セラレサル一己人タル小野仙吉ニ宛テ約束手形ヲ振出スモ其取引
 タルヤ毫モ上告會社ノ債權ヲ満足セシムヘキ性質ナキ者ナリ此ノ如キ取引ニシテ上告人會社ニ對
 スル債務ノ履行タルヲ得ヘカラシメンニハ必ス上告人會社カ其權利ヲ小野仙吉ニ讓與シタル事實
 若クハ本件當事者ハ小野仙吉トノ間ニ債務更改ヲ約シタル等ノ附加ノ事實ナカルヘカラス原院判
 決ハ何等斯クノ如キ附加ノ事實ノ存在スルコトヲ認メスシテ甲二號證ノ一、二ノ約束手形ノ振出
 ヲ以テ上告人會社ニ對スル債務ノ履行ナリト認メタルハ理由不備ノ裁判ナリトス而シテ前記ノ趣
 旨ヲ以テ甲第二號證ノ一、二ヲ援用シ該手形上ノ權利ハ小野仙吉自己ノ爲メニ取得シタル者ナリ

トノ被控訴人ノ抗辯ニ對シテハ原院判決ニ於テ何等ノ裁判ヲ與ヘス此論點タルヤ小野仙吉カ上告
 人會社ノ番頭タリヤ否ヤノ問題ト全ク別箇ノ者ニシテ假令番頭タリトスルモ若クハ支配人又ハ取
 締役タリトスルモ其一己人ニ宛テタル約束手形ヲ以テ會社ノ債權ヲ満足セシムルハ(他ニ附加ノ
 事實ナキ限り)法律上不能ノ事實タリ即チ此抗辯タル獨立セル必要ナル防禦方法タルニ係ハラ
 何等ノ裁判ヲ與ヘサルハ重要ナル論點ヲ遺脱シタル不法アルモノナリト云ヒ同第二點ハ會社ノ
 番頭ノ代表權ナル者ハ取締役又ハ支配人ニ依リテ附與セラルヘキハ當然ノ條理ナレハ其權限カ是
 等法定代理人ノ權限ヨリ大ナルヲ得サルハ論ヲ俟タサル所ナリトス而シテ是等法定代理人ト雖モ
 會社ノ債權ニ依リ自己ノ一身ニ宛テタル約束手形ヲ取得スルノ權限アルヘカラス何トナレハ自己
 ノ一己ニ宛テタル約束手形ノ手形的取引ノ對手ハ會社ノ法定代理人タル資格ヲ以テシテハ行ヒ得
 ヘカラサル事項ニシテ該手形上ノ權利ノ行使及其行使ニ伴フ義務ノ負擔ニ付テモ亦同一ナレハナ
 リ法定代理人カ會社ノ債權ニ對シ債務者ヨリ自己ノ一身ニ宛テタル約束手形ヲ取得スルノ法律行為
 ヲ有效ニ爲サント欲セハ必ス法定代理人タル資格ヲ離レ一己人トシテ他ノ法定代理人ヨリ會社債
 權ヲ讓受クルカ又ハ他ノ法定代理人及債務者ノ同意ヲ得テ債務更改ノ契約ヲ爲スノ外アルヘカ
 法定代理人尙且ツ此ノ如シ然ルニ一番頭タル小野仙吉カ會社ノ債權ニ依リ自己ニ宛テタル約束手
 形ヲ取得スルノ權限アリトスルハ條理ニ背反スル者ニシテ不法裁判ナリト云ヒ同第八點ハ法律
 行為ハ意思ノ表示ニ依リ構成セラル、者トス甲第二號證ノ一及二ナル約束手形ハ被上告人ヨリ一
 個人タル小野仙吉ニ宛テ一定ノ金額ヲ一定ノ期日ニ支拂フヘキコトヲ約束シタル意思表示タルコ

トヲ認ムヘキモ上告人タル株式會社セール商會ニ對シテハ何等ノ法律行為ヲモ爲サントスル意思ヲモ表示シタル者ニ非サレハ該證書面上ニ於テ分明ニシテ且該證書ハ其手形タル性質上其意思表示ハ獨リ證書上ノ文言ニ依リテ決定セラルヘキ者トス然ラハ原院カ上告人會社ニ對シテ何等法律行為ヲ爲サントスル意思ヲ表示シタルコトナキ甲第二號證ノ一及二ノ授受ヲ以テ上告人會社ニ對シテ被上告人ヨリ係争物件ノ代金支拂ヲ爲シタル者ナリト認定シタルハ法律行為及意思表示ニ關スル法則ニ違背シタル不法ノ裁判ナリト云ヒ」同第九點ハ甲第二號證ノ一、二ノ約束手形タルヤ訴外人小野仙吉ニ對シテ被上告人カ記載ノ金額ヲ其満期日ニ支拂フヘキコトノ意思ヲ表示シタル者ナルコト前項所論ノ如クニシテ被上告人ハ之ニ反對スル何等ノ證明ヲ爲シタルコトナク又手形ノ性質上之ニ反對スル證明ヲ許スヘキニアラスト雖モ假リニ被上告人カ甲第二號證ノ一及二ヲ振出シタル際ニ該振出行爲ヲ以テ上告人會社ニ對シテ代金支拂ナル法律行為ヲ爲サントスル意思ニ出テタリトシ且ツ其證明アリント爲サンカ是意思ト行爲ト間ニ一致ヲ缺クモノニシテ無効ノ法律行為タルヘキモノトス即チ被上告人ノ主張スル所ヲ眞實トセハ甲第二號證ノ一及二ナル手形取引ハ無効ノ行為ナリト云ハサルヘカラス（手形ノ性質上轉得者ニ對シ其無効ヲ主張シ得ルヤ否ハ勿論本件ニ關係ナキ問題トス）然ルニ原院ハ斯ル行爲ヲ以テ上告人會社ニ對シ有效ナル代金支拂ノ行為ナリト爲シタルハ不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

依テ按スルニ凡テ記名式手形上ノ權利ハ白地裏書ノ場合ヲ除クノ外手形面ニ記載セラレタル者ニ非レハ之ヲ取得スルコトヲ得ス手形面ニ表示セラレサル第三者ニ於テ此カ權利ヲ取得スルコト能

ハサルハ固ヨリ上告人所論ノ如シト雖モ抑代理人カ其權限内ニ於テ本人ノ爲メニ代理人自己ノ名義ヲ以テ手形上ノ權利ヲ取得シタルトキハ其效力タル相手方ニ對シテハ其債務ヲ消滅セシムルノ效果ヲ生スルノ點ニ於テ本人自ラ權利ヲ取得シタルト同一ナルヘキハ勿論ナリ是レ畢竟手形ニ表示セラレサル本人カ之ニヨリ直接手形上ノ權利ヲ取得スルニ因ルニ非スシテ全ク代理ノ法則ニヨリ本人カ自ラ權利ヲ取得シタルト同一ノ效力ヲ生スルヲ以テナリ本件ニ關シ原院ノ確定セル事實ニ依ルトキハ上告會社ノ番頭タル小野仙吉ハ本件取引ニ付キ上告會社ヲ代表スルノ權限ヲ有シ且右取引ニ關シ上告會社カ被上告人ヨリ受領スヘキ代金ヲ仙吉宛ノ約束手形ト爲シ之ヲ受取ルノ權限アリト云フニ在ルヲ以テ原院ハ小野仙吉カ右手形ニヨリ辨濟ヲ受ケタル上告會社カ直接被上告人ヨリ辨濟ヲ受ケタルト同一ノ效力ヲ生スルモノト判決シタルモノニシテ毫モ法則ニ違背シタル廉アルコトナシ畢竟上告人ノ論述スル前記四點ノ論旨ハ或ハ代理關係ト手形上ノ權利關係トヲ混同シ又ハ原判決ノ趣旨ヲ誤解シ若クハ原院ノ職權タル事實ノ認定ヲ非難スルニ過キサルモノニシテ共ニ探テ以テ上告ノ理由ト爲スニ足ラス

●約束手形金請求事件

明治三十七年(オ)第二百三十六號 (棄却)

判決要旨

一、支拂命令ノ效力ト之ヨリ生スル權利拘束ノ效力ト兩ナカラ
消滅シタル場合ニ於テ同一ノ請求ニ付キ再ヒ支拂命令ヲ發

同一事件ニ對スル再度ノ支拂命令○支拂命令ノ送達ニ依ル付違滯

スルコトヲ妨ケス而シテ其ノ新命令モ亦々舊命令ト同一ノ效力ヲ有ス

一、指圖債權又ハ無記名債權ノ債務者ニ對シ支拂命令ヲ發シタルトキハ債權者カ商法第二百七十九條ニ依リ證券ヲ呈示シテ履行ノ請求ヲ爲シタルト等シク命令送達ノ時ヨリ付遲滯ノ效ヲ生ス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 東 與 吉

訴訟代理人 内 藤 庄 吉

株式会社難波銀行破産管財人
被上告人 藤林 忠 良

外一名

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十七年三月二日言渡シタル判決ニ對シト告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理 由

上告趣旨ノ第二ハ原院判決理由中(控訴人ハ本件約束手形ハ孰レモ時効ニヨリ消滅シタルモノト

主張スルモ甲第一號證約束手形ノ満期日ハ明治三十三年五月五日甲第二號證約束手形ノ満期日ハ同年同月二日甲第三號證約束手形ノ満期日ハ同年同月三十一日ニシテ控訴人カ其成立ヲ認ムル所ノ甲第十號證約一乃至十二ニ依レハ被控訴人ハ本件約束手形ニ關シ明治三十五年五月一日ニ大阪區裁判所ニ支拂命令ヲ申請シ同年同月三日ニ控訴人ニ其支拂命令ヲ送達シ之ニ對シ控訴人ヨリ異議ノ申立ヲ爲シタルコト明ナレハ約束手形中満期日ノ最モ早キ分ニ對シテモ支拂命令送達ノ際滿三年ヲ經過シ居ラサルヲ以テ振出人ニ對スル手形債權ノ時効ハ中斷セラレタルモノナルコト論ヲ俟タス)ト判示セラレタルモ第二審明治三十七年二月二十四日辯論調書中ニ被上告人ハ裁判長ノ問ニ對スル答ニ(甲第十號支拂命令前ニ支拂命令ヲ發セルニ控訴人ハ異議ヲ申立テシカ被控訴人ハ之ニ付三十日間ニ起訴セス其後ニ至リ更ニ甲第十號支拂命令ヲ發セルナリ)トアリ之ニ依テ觀レハ被上告人ハ甲第十號證支拂命令發布ノ以前ニ於テ同一ノ請求ニ關シ同一ノ支拂命令ヲ發布シ之ニ對シ上告人ヨリ異議ノ申立ヲ爲シ三十日以内ニ起訴セスシテ再度甲第十號證ノ如ク同一請求ニ關シ同様ノ支拂命令ヲ發シタルコト爭ヒナクシテ此法律行為ハ無効ナルコト勿論ナリ何トナレハ民事訴訟法第三百八十二條以下ニ支拂命令ヲ再應發布シ得ヘキ法文ナシ必ス其一度發布シタルモノニ異議ノ申立アリタルトキハ其支拂命令ノ效力ヲ失フコトハ同法第三百八十九條第三百九十一條ニ依リ明ナリ本件甲第十號證支拂命令ハ無効ノモノナリ然ラハ則チ其無効ノ行為ニ依リ時効ノ進行ヲ妨ケラル、コトナキハ理ノ當ニ然ルヘキ所ナリ然ルニ原院ハ此視易キ道理ヲ無視シ時効ハ中斷セラレタルモノナリト判示セラレタルハ法則ヲ不當ニ適用シタル不法ノ判決ナリト云フニ

同一事件ニ對スル再度ノ支拂命令○支拂命令ノ送達ニ依ル付遲滯

在リ

按スルニ支拂命令ニ對シ適當ナル時期ニ異議ノ申立アルトキハ其效力ヲ失ヒ又其場合ニ於テ適當ナル時期ニ訴ヲ起サ、ルトキハ支拂命令ニ因リテ生シタル權利拘束ノ效力ヲ失フコトハ實ニ上告論旨ノ如シ然レトモ確定判決ノアリタル場合ト異ナリ支拂命令ノ效力ト之ヨリ生シタル權利拘束ノ效力ト兩ナカラ消滅シタル場合ニ於テ同一ノ請求ニ付テ再ヒ支拂命令ヲ發スルヲ得サル規定存セサルノミナラス如上ノ場合ニ於テ前督促手續ノ費用ハ債權者ノ負擔ニ歸スルコトハ民事訴訟法第三百九十二條ニ於テ明ニ規定スル所ナレハ債權者ハ之カ爲メニ其權利ト利益トヲ損傷セラル、恐アルコト無シ故ニ再ヒ發シタル支拂命令ト雖モ法令ニ定メタル效力ヲ有スルコト勿論ナレハ本論旨ハ上告ノ理由トナラス

上告趣旨ノ第五ハ原判決ハ手形債務付遲滞ノ法則ニ違背シタル裁判ナリ商法第二百七十九條ニヨレハ指圖債權ノ債務者ハ所持人カ其證券ヲ呈示シテ履行ノ請求ヲ爲シタル時ヨリ遲滞ノ責ニ任スルモノトス約束手形ハ指圖債權ナルコト勿論ナルヲ以テ本訴上告人ハ同條ニ所謂指圖債權ノ債務者タルコト明カナリ果シテ然ラハ苟モ被上告人カ本訴各手形ヲ上告人ニ呈示シ其支拂ヲ要求シタル事實ナキ以上ハ上告人ニ遲滞ノ責ヲ負ハシムヘカラサルヤ明カナリ原判決ヲ按スルニ原院ハ被上告人カ上告人ニ對シ本訴各手形ノ呈示ヲナサ、ル事實ヲ確認シナカラ支拂命令ノ送達ヲ以テ付遲滞ノ效力アルモノト認メラレタルハ手形債務付遲滞ニ關スル前記法條ノ原則ヲ無視シタル違法アルモノト信ス抑支拂命令ノ送達ハ債務者ニ對シ時效中斷ノ效力ヲ生スヘク指圖債權無記名債

權以外ノ債權ニ付テハ其債務者ヲ遲滞ニ付セシムル效力(勿論民法第四百十二條第三項ノ場合ナリ)アルヘキモ手形債權ハ前陳ノ理由ニヨリ如何ニ支拂命令ヲ送達スルモ現實手形ノ呈示ヲナサル以上ハ付遲滞ノ效力ヲ生セサルヤ明カナリ然ルニ原院カ單ニ支拂命令ノ送達ヲ以テ付遲滞ノ效力アルモノトシ上告人ニ對シ支拂命令送達ノ日以後ノ遲延利子ヲ負擔スヘキ旨ノ判決ヲセラレタルハ前記法條ノ規定ニ違背シタル不法ノ裁判タルヲ免カレスト云フニ在リ
按スルニ商法第二百七十九條ニ於テ指圖債權又ハ無記名債權ノ債務者ハ履行期限ノ定アルトキト雖モ期限ノ到來ニ因リテ直ニ遲滞ノ責ニ任スヘキモノニ非ス期限到來ノ後所持人カ其證券ヲ呈示シテ履行ノ請求ヲ爲シタル時ヨリ始メテ遲滞ノ責ニ任スヘキ旨ヲ規定シタル所以ハ他ナシ此等ノ債權ハ債務者カ常ニ必スシモ債權者ヲ確知スルヲ得ヘキ性質ナラサルヲ以テ唯期限ノ到來シタルノミニテハ債務者履行ヲ爲サント欲スルモ得ヘカラサル恐ナキニ非ス而シテ仍民法第四百十二條ノ規定ヲ適用セント欲スレハ債務者ヲ責ムルニ殆ト不能ノ事ヲ以テスル嫌アリ其不利實ニ甚タシキヲ以テ之ヲ調和スル必要アレハナリ然リ而シテ支拂命令ハ權利拘束ノ效力ヲ生スルモノニシテ當事者カ證券ヲ呈示シテ履行ノ請求ヲ爲スニ視レハ一層有力ノ請求方法ナリト云ハサルヲ得ス故ニ其少モ之ト同一ノ效力ヲ生スヘキコトハ毫モ疑ヲ容ルヘキニ非サルヲ以テ本論旨モ亦上告ノ理由トナラス

約束手形金償還請求事件

明治三十七年(オ)第百三十二號
明治三十七年六月二十五日判決 (棄却)

償還請求ノ要件○手形ノ呈示

判決要旨

一手形所持人カ前者ニ對シテ償還請求ヲ爲サンニハ支拂人ニ向テ手形ヲ呈示スルコトヲ要ス「約束手形」ノ所持人カ振出人ノ住所不明ナルノ故ヲ以テ呈示ノ手續ヲナスコトナク償還請求ヲナシタルハ違法ニアラストノ判決ハ失當タルヲ不免

說明

手形ノ呈示 手形ノ呈示ハ償還請求ノ要素ナリ苟モ之レナクシテ償還ノ請求ヲナサントスルモノハ常ニ違法タルヲ不免然リ而シテ手形ノ呈示ト云フトキハ常ニ支拂人ノ面前ニ手形ヲ開示シテ之ヲ爲シ若シ支拂人ノ住所知レサルトキハ遂ニ之ヲ爲スコト能ハサルカノ如クニ感スレトモ呈示ナル法語ノ意義ハ如斯狹隘ナルモノニアラス嘗テ判例彙報第十五卷第八號紙上ニ於テ手形ノ呈示ニ付キ說明シタル所アルヲ以テ左ニ之ヲ摘出シテ本判旨ノ說明ニ代ヘシ

手形ノ呈示ハ其ノ呈示ノ受クヘキ人現場ニ在ルトキハ其ノ面前ニ手形ヲ開示シテ爲スヘク手續明瞭ナリト雖モ若シ支拂人ニシテ支拂場所ニ在ラサルトキハ手形ノ呈示ハ如何ニシテ爲スヘキ乎之レ懸々手形所持人ノ手續ヲ誤マル所ニシテ手形ノ取引ヲ爲スモノ最モ注意ヲ要スル所ナリ

二八

手形ノ呈示ノ受クヘキ人其ノ場所ニ在ルトキハ手形ノ呈示ハ手形證券ノ面前ニ開示シテ爲スコト已ニ說明スルカ如シト雖モ若シ其ノ場所ニ在ラサルトキハ約束手形ノ呈示ハ左ノ方法ニ依テ之ヲ爲ス
(一) 所持人カ呈示ノ爲メニ手形ヲ携ヘ券面記載ノ支拂場所ニ至リタルコト
(二) 支拂人ニ面會スルコト能ハサルコト
以上二箇ノ事實ヲ具備シタルトキハ手形ノ呈示ハ之レニ依リテ爲シタルモノトス故ニ手形ノ償還請求ハ以上ノ事實ヲ以テ呈示及ヒ支拂拒絕ノ理由トナシ拒絕證書ヲ作成スルニ於テ始テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ云々

以テ本判決ノ基本ヲ了知スルヲ得ン乎

第一審 浦和地方裁判所熊谷支部 第二審 東京控訴院

上告人 竹内 知 興 被上告人 小宮山 福太郎

訴訟代理人 指田 義 雄

右當事者間ノ約束手形金償還請求事件ニ付東京控訴院カ明治三十七年三月十五日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告擴張趣意書ノ第三ハ原判決ハ「振出人ノ住所其他呈示ヲ爲シヘキ場所知レサル手形ニ關シテハ其呈示ナキヲ理由トシテ償還請求ヲ拒ムヲ得サル筋合ナリ」ト判示シタリト雖モ手形ノ呈示ハ

償還請求ノ要件○手形ノ呈示

償還請求權保全ノ要件タルハ勿論ニシテ假令住所其他ヲ所持人ニ於テ知ラザリシ場合ト雖モ苟モ現ニ有スル住所其他適法ノ場所ニ於テ呈示ヲ爲スコトヲ要スルヤ明カナリ若シ相當ノ理由アリテ所持人ニ於テ呈示スルコトノ不能トナリシ場合ニ於テハ其呈示ニ關スル手續ヲ盡シタルニ依リテ呈示アリタルモノト推定スルハ格別全ク呈示ノ手續ヲ要セサルモノ、如ク判定シタルハ商法第四百八十七條ヲ誤解シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ

按スルニ手形所持人カ其前者ニ對シテ償還請求ヲ爲サント欲スルトキハ必スヤ手形ヲ支拂人ニ呈示スルヲ要スルコトハ商法第四百八十七條ニ於テ明ニ規定スル所ニシテ本條ハ約束手形ニモ亦準用スヘキコトハ同法第五百二十九條ニ於テ規定スル所ナリ故ニ原判決ニ振出人ノ住所其他呈示ヲ爲スキ場所知レサル手形ニ關シテ其ノ呈示ナキ理由トシテ償還ノ請求ヲ拒ムコトヲ得サル筋合ナリ云々ト判示シタルハ失當タルコトヲ免レズ然レトモ原院カ適法ノ拒絕證書ナル旨判示シタル甲第二號證ニハ執達吏カ振出人ノ住所ニ到リタルニ何處ヘカ移轉シ所在不明ニ付キ所轄日本橋區役所ニ問合セタルトモ住所不明ナル旨記載アルヲ以テ呈示ノ事實アリタルコトヲ見ルニ足ル故ニ結局判決ハ相當ニシテ本論旨ハ破毀ノ理由トスルニ足ラス

●貸船料乗組員給料及食料並損害金請求事件

明治三十六年(オ)第六百三十一號
明治三十七年六月十八日判決 (棄却)

判決要旨

一、契約ニ依リ當事者ノ一方カ解除權ヲ取得シタル場合ニ於テ

ハ民法第五百四十一條ニ依リ催告期間ヲ遵守スルコトナク債務不履行ノ一事ヲ以テ直チニ契約ヲ解除スルヲ得ヘシ

第一審 函館地方裁判所

第二審 函館控訴院

上告人 梶原伊之介

訴訟代理人 廣岡宇一郎

被上告人 酒澤岸太郎

訴訟代理人 高橋織之助

外一名

右當事者間ノ貸船料乗組員給料及食料並ニ損害金請求事件ニ付函館控訴院カ明治三十六年十月二日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告論旨第二點ハ原判決第二段ニ甲第一號證第二十七條ニ「雇船主ニ於テ若シ賃金ノ支拂ヲ怠リタルトキ又ハ各條項ニ違背セントキハ違約トシテ船主ハ當然此契約ヲ解除シ本船ノ引揚ケヲナスヘシ」トアルニヨリ被上告人カ貫效丸ノ引揚ケヲ爲スニ先チ契約解除ノ意ヲ表示シアルハ其引揚行爲ハ民法第五百四十條ニヨリ正當ナルヲ以テ上告人ノ辯スル如ク民法第五百四十一條ニ從ヒ

契約ニ依リ解除權ノ行使

期間ヲ定メ履行ノ催告ヲ爲スカ如キ手續ヲ要セサルモノト判定セラレタルハ法律ノ解釋及適用ヲ誤リタルモノナリ抑モ民法第五百四十條ハ一般契約解除ノ方法ヲ規定シ其解除ノ手續ハ以下二條即チ民法第五百四十一條第五百四十二條ノ區別ニ從ハサル可カラズ故ニ一定ノ期間ヲ定メタル履行ノ催告ヲ要セスシテ單ニ期間ノ經過ニヨリ契約ノ解除ヲ爲シ得ヘキモノハ第五百四十二條ノ契約ノ性質又ハ當事者ノ意思表示ニ依リ一定ノ日時又ハ一定ノ期間内ニ履行ヲナスニ非ラザレハ契約ノ目的ヲ達スルコト能ハサル場合ニ限定セラレタルコトハ法文上實ニ明ラカナリトス然ルニ本件ハ契約ノ性質及當事者ノ意思表示ニ於テ第五百四十二條ノ場合ニ該當セス尙ホ履行ノ催告ヲ待スシテ契約ヲ解除スルノ合意ナシ然ラハ本件ハ民法第五百四十一條ノ規定ヲ履踐シテ解除ノ目的ヲ達スヘキ場合ニ屬ス故ニ上告人ハ原院ニ於テ被告上告人ハ民法第五百四十一條ノ手續ヲ履踐セサルニ付契約解除ノ效ナキコトヲ主張シタルニ原判決ハ民法第五百四十條ニヨリ單ニ意思表示ノミヲ以テ契約ヲ解除シ得ヘシト論斷シタルハ法律ノ解釋及適用ヲ誤リタル不當ノ判決ナリト云フニ在リ

按スルニ契約當事者ノ一方カ解除權ヲ有セサル場合ニ於テ其相手方カ債務ノ履行ヲ爲サルトキハ當事者ノ一方ハ民法第五百四十一條ニ則リ相當ノ期間ヲ定メテ履行ノ催告ヲ爲シ尙ホ其期間ニ履行ヲ爲サルトキ茲ニ始メテ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得レトモ若シ契約ニヨリ當事者ノ一方ニ解除權ヲ付與シアリタルトキハ相手方カ債務ヲ履行セサル場合ニ於テ敢テ此等ノ履行ノ催告ヲ爲スコトヲ要セス民法第五百四十條ニヨリ相手方ニ對スル意思表示ヲ以テ直チニ解除權ヲ行使スル

コトヲ得ルハ勿論ナリ何トナレハ民法第五百四十一條ノ規定ハ當事者ノ一方カ解除權ヲ有セサル場合ニ於テ單ニ債務不履行ノ一事ヲ以テ直ニ契約ヲ解除スルコトヲ許スカ如キハ相手方ニ對シ頗ル苛酷ニ失シ又其利益ヲ害スルコト鮮少ナラサルカ故ニ法律上此催告期間ノ猶豫ヲ與ヘタルモノナレトモ之ニ反シテ當事者ノ契約ヲ以テ任意上解除權ヲ付與シタル場合ニ在リテハ此レ固ヨリ當事者ノ豫期シ居ルヘキ所ニシテ特ニ催告期間ヲ設クルノ理由毫無モ之レナケレハナリ是故ニ原院カ甲一號證ニ據リ當事者ニ解除權ヲ付與シアリタルモノト認メタル本件ニ關シ民法第五百四十一條ヲ適用スヘキモノ非スト判示シタルハ固ヨリ相當ニシテ本論旨ハ全ク民法ノ法理ヲ誤解シタルモノトス

●土地贈與登記請求事件

明治三十七年(オ)第三百八號 (棄却) 明治三十七年七月一日判決

判決要旨

一、認諾ハ實體法上ニ於ケル相手方ノ權利ヲ確認スルモノナレハ一旦適法ニ裁判上ノ認諾ヲ爲シタルトキハ法律行為ノ取消原因タル錯誤詐欺強迫等ノ事實ヲ證明スルニアラサレハ之ヲ取消スコトヲ得ス

第一審 盛岡地方裁判所

第二審 宮城控訴院

認諾ノ取消

上告人 藤井 大
右法定代理人 藤井 シサ
被上告人 藤井 ツキ
外一名
訴訟代理人 志賀和多利

右當事者間ノ土地贈與登記請求事件ニ付宮城控訴院カ明治三十七年五月二十日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由第五點ハ判決ハ權利認定ノ效ヲ生スルノミニシテ權利ヲ創設スルモノニアサルハ疑ヒナキ法理ナリ認諾ハ一ノ訴訟行為ニ外ナラス隨テ認諾ニ基キ當事者ニ對シテ權利創設アルヘキ理由ナキハ亦タ疑ナキ所ニ屬ス唯認諾ハ假令原告カ實體法上權利ナキコト明カナル場合ニ於テモ裁判所ハ其敗訴ヲ言渡スコト能ハス却テ申立ニヨリ被告ヲ敗訴セシメサルヲ得サル效力アルノミ既ニ認諾カ權利創設ノ效ナシトセハ假令一旦認諾ノ申立ヲナセシトスルモ口頭辯論終結前ニハ實體法上原告ニ請求權ナキ場合ニ於テ其取消ヲ許サハルヘカス即チ認諾ノ取消ヲ得ヘキヤ否ヤハ一ニ實體法上原告ノ請求權有無ト伴ハサルヘカラサルナリ何トナレハ實體法上原告權利ナキコトヲ明カニシ其認諾ヲ取消シタルニ拘ハラヌ一旦申立アリタル理由トシテ被告敗訴ノ判決ヲ言渡サハ即チ權利創設ノ效力ヲ生セシムルモノナレハナリ要スルニ認諾ハ實體法上ノ效力ヲ生セス單ニ訴訟法上裁判所ヲ羈束スルモノナルヲ以テ口頭辯論終結以前之ヲ取消シ得ヘキコト必スシモ詐欺錯誤等實體法上ノ取消原因ヲ要セサルモノト云ハサルヘカラス然ルニ原判決ハ上告人ノ代理人カ一且適法ノ認諾ヲナシタリトノ理由ヲ以テ詐欺錯誤等實體法上ノ原因アル場合ノ外之ヲ取消シ得サルモノ、如ク誤解シ上告人ノ認諾取消ノ申立ヲ排斥シ被告上告人ニ權利ヲ創設セシムル判決ヲ言渡シタルハ訴訟法ニ於ケル認諾ノ法則ニ背キタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ然レトモ認諾ハ相手方ノ實體法上ノ主張ニ服從シテ其權利ヲ確認スルモノナレハ一旦適法ニ裁判上ノ認諾ヲ爲シタルモノハ故ナク之ヲ取消シ得ヘキモノニアラス乃チ認諾ハ上告人所論ノ如キ單純ナル訴訟行為ニ止マラス實體法上ノ請求權ヲ確定スルモノナルカ故ニ之ヲ取消サントスルモノハ亦實體法上ノ取消原因タル詐欺錯誤等ノ事實ヲ證明スルヲ要スルコト勿論ナリ然レハ原裁判所カ前ノ法定代理人タリシ藤井末吉ノ認諾ニ對スル上告人ノ取消ヲ採用セスシテ被告上告人ノ請求ヲ是認シタルハ適法ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

●親族會決議無效確認請求事件 明治三十七年(九)第四百九十九號 (破毀)
明治三十七年六月十八日判決

- 一、親族會ハ無能力者ノ爲ニ設ケタルモノヲ除ク外招集ノ目的タリシ事項ヲ議決シ終リタルトキハ自ラ開散スルモノトス
- 一、親族會ノ決議ハ爾後會員ノ意思ニ依リ其ノ效力ヲ左右シ得ヘキモノニアラス亦タ其ノ決議ハ裁判所ノ宣告ヲ待ツニア

ラスンハ法令ノ規定ニ違背シタル一事ヲ以テ當然無効タル
ヘキモノニアラス隨テ相手方ニ對シ決議無効ノ確認ヲ求ム
ル訴ハ不適法ナリ

第一審 函館地方裁判所 第二審 函館控訴院

上告人 田中 其 外一名

訴訟代理人 澤田 俊三

被上告人 田中政右衛門 外三名

訴訟代理人 高橋文五郎

右當事者間ノ親族會議決議無効確認請求事件ニ付函館控訴院カ明治三十七年一月二十一日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ
立會檢事小宮三保松ハ意見ヲ陳述シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辯論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ函館控訴院ニ差戻ス

理由

上告ノ趣旨ハ本件ハ亡田中時太郎相續人選定ノ爲メ函館區裁判所ニ於テ田中テイ田中其作田中政次郎三名ヲ親族會員ニ選任シ且召集ヲ爲シ明治三十五年十月二十八日該親族會ニ於テ田中政次郎ヲ亡田中時太郎ノ相續人ニ選定ノ決議ヲ爲シ明治三十五年十月二十八日戸籍簿ニ登錄ヲ受ケタリ而シテ訴訟ノ結果該決議ヲ取消スヘキ旨ノ判決アリタルモ未タ確定セサル間ニ田中政右衛門田中

カツ田中武右衛門三名ヲ補充員トシテ右親族會員ニ追加選任ヲ爲シ又前會員田中テイノ死亡ニヨリ其補欠トシテ杉浦允ヲ補充選任シ右前後ニ選任シタル親族會員ヲ召集シ明治三十六年八月八日親族會ヲ開キ田中武右衛門ノ二女タネヲ田中時太郎ノ相續人ニ選定ノ決議ヲ爲シタリ右明治三十六年八月八日ノ親族會ハ不法ノモノニシテ武右衛門ノ二女タネヲ相續人ニ選定シタル決議ハ無効ナルニ付之レカ確認ヲ請求シタルモノナリ以上ノ事實ハ被上告人等モ爭ハサル所ニシテ原院モ認メラレタル事實ナリ抑モ民法第九百四十九條ノ無能力者ノ爲メニ設ケタル親族會ハ其者ノ無能力ノ止ムマテ繼續ストノ規定アルモノヲ除外親族會ハ其召集セラレタル目的ノ事項ヲ議決シタル時ハ當然解散スルモノニシテ後ニ裁判上其決議ヲ取消サレ又ハ無効トナリタレハトテ繼續スヘキモノニ非ラス然ルニ原院ハ「本訴親族會議ノ以前ニ於テ爲シタル亡田中時太郎相續人選定ノ親族會議決議ニ對スル取消訴訟ノ判決確定ノ結果該決議ノ無効ニ歸シタルコト竝ニ其判決確定以前ニ於テ被控訴人ノ内田中政右衛門田中カツ田中武右衛門ノ三名ハ補充員トシテ親族會ニ選定セラレ云々杉浦允モ亦補充員ニ選定セラレタル事ハ共ニ當事者間ニ爭ノ存セサル所トス」ト云ヒ明治三十五年十月二十八日召集ノ親族會ニ於テ已ニ相續人選定ノ決議ヲ爲シタル事ヲ認メナカラ後段ニ於テ「其會議ヲ要スル事項カ仍ホ完結セサルニ於テハ未タ任務ヲ終リタリト云フヲ得サルニ付假令ヒ已ニ一回ノ召集ヲ爲シタルモ當然解散スヘキモノニアラサルコトハ民法第九百四十九條ノ法意ニ依リ明瞭ナレハ本訴ノ親族會議ノ以前ニ於テ爲シタリシ親族會ノ決議カ無効ナリト確定シタル以上ハ云々明治三十五年十月二十八日召集シタル其親族會ハ會議ヲ要スル事項ニ付キ未タ

親族會議ノ解散及ヒ其ノ決議ノ效力

其任務ヲ終リタルモノト云フヲ得サルヲ以テ當然解散シタルモノト認ム可ラス云々ト判示シ親族會ハ一旦議決スルモ其決議カ無効トナリタル時ハ尙繼續スルモノトシ明治三十六年八月八日ノ決議ヲ適法ト判決シタルハ法律ヲ誤解シ法則ヲ不當ニ適用シタル違法ノ判決ナリト云フニ在リ按スルニ親族會ハ無能力者ノ爲メニ設ケタル者ヲ除ク外其召集セラレタル目的ノ事項ヲ決議スルトキハ自ラ解散スヘキモノニシテ異日裁判ニ因リテ其決議ノ無効ヲ宣言セラル、場合ト雖モ亦然ラサルヲ得ス何トナレハ親族會ノ任務ハ召集ノ目的タル事項ヲ決議スルニ在ルヲ以テ苟モ一旦之ヲ決議スルトキハ其任務此ニ終了スルコトハ異日決議ノ無効ニ歸スルト否トニ因リテ異ナルヘキ理アラサレハナリ然レハ則チ原院カ本訴親族會ノ已ニ一タヒ相續人選定ノ決議ヲ爲シタル事實アルコトヲ確定シタルニ拘ハラヌ裁判ニ因リテ其決議ヲ取消サレタル理由トシテ親族會ノ任務ハ未タ終了セザリシモノト爲シ同一ノ親族會カ再ヒ相續人選定ノ決議ヲ爲シタルヲ適法ナルモノト判示シタルハ不法ノ判決ニシテ破毀ヲ免レサルモノトス

被上告人ハ本訴ハ親族會決議無効ノ判決ヲ求ムルニ非スシテ被上告人ニ對シテ其無効ヲ確認センコトヲ請求スルモノナレハ不法ノ訴ナル時旨限シタリ○依テ此點ニ付テ審按スルニ如上ノ主張ハ既ニ原審ニ提出セラレ原判決ハ此ニ關シテ判斷スル所アリ抑親族會ノ決議ハ事後ニ於ル親族會員ノ意思ニ因リテ其效力ヲ左右スルコトヲ得ヘキモノニ非ス又其決議假令法令ノ規定ニ違背スル所アルモ當然無効ナルモノニ非ス其無効ハ必ス裁判所ノ宣言アルコトヲ要ス故ニ若シ本訴請求ノ趣旨ニシテ無効ノ宣言ヲ求ムルニ在ラスシテ被上告人ヲシテ決議ノ無効ヲ確認セシメント欲スル

ニ在ラハ其訴ハ不適法タルコトヲ免カレス原院ハ其判決理由ノ第一段ニ於テ「前署控訴人（上告人）カ訴求ノ要旨ハ「中署之カ無効ヲ其親族會員タル被控訴人等（被上告人）ニ對シ確認ヲ求ムト云フニ在ルコトハ云々誠ニ明白ナリ」ト判示シ恰モ決議無効ノ確認ヲ求ムル訴旨ナリト認定シタルカ如クナリト雖モ其下文ニハ「本件控訴人カ前掲ノ申立中ニハ當然該親族會ノ決議ハ無効ナリトノ判決ヲ求ムル趣旨ヲ包含スルコト勿論云々」ト判示シアリ此說明ニ依レハ本訴ノ請求ニハ決議無効ノ宣言ヲ求ムル趣旨存スルモノニ似タリ之ヲ要スルニ原院カ上告人ノ訴旨ヲ解釋シタル說明前後透徹セサル所アリ即チ事實未タ確定セサル所アルヲ以テ本院ニ於テ其當否ヲ判斷スルニ由ナシ

右ノ理由ナルヲ以テ民事訴訟法第四百四十七條第一項及ヒ第四百四十八條第一項ノ規定ニ從ヒ主文ノ如ク判決ス

○荷爲替殘金及附帶費用請求事件 明治三十七年（オ）第四百四十五號
明治三十七年六月十四日第一民事部判決 (棄却)

判決要旨

一、荷爲替契約ハ荷送人ト銀行トノ間ニ於テ一種ノ消費貸借關係ヲ生スルモノニシテ商法施行以前ヨリ存在シタル行爲ナリトス隨テ荷爲替手形ハ必スシモ商法所定ノ爲替手形タル

荷爲替契約ノ性質

コトヲ要セス

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 住友銀行主 住友吉左衛門

右支配人 田邊貞吉

被上告人 長谷川種次郎 外一名

訴訟代理人 原嘉道

訴訟代理人 平岡萬次郎

右當事者間ノ荷爲替殘金及附帶費用請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十六年十二月二十六日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔ス可シ

理由

上告趣旨ノ第一ハ原判決ノ要旨ハ荷爲替手形ニ添附スル貨物證券及擔保證書ノ如キハ消費貸借ニ因ル銀行ノ債權ヲ確實ナラシメンカ爲ニシテ手形債權ヲ擔保スルノ趣旨ニアラス然ルニ甲第一號證券品差入證ニハ一モ荷爲替若クハ消費貸借ノ關係上該證券差入レタルモノト認ムヘキ文詞ナク凡テ「新邊羅白米三百袋上海精白米一百袋右ハ明治三十二年十一月二十五日濱田楠太郎ヨリ振出シタル第三號爲替手形金二千三百圓ノ支拂擔保トシテ差入レ申候」云々トアリ加之乙號證ニ依レハ上告人ハ當初手形債權者トシテ權利ヲ主張シ居タルコトヲ認メ得ヘキカ故ニ甲第一號證ハ手

私書變造行使事件

明治三十七年(九)第一二七號 (棄却)

判決要旨

一、第一審ニ於テ單純ナル私文書變造行使ノ公訴ニ付キ審理判決ヲナシ第二審ニ至リ右私文書ハ詐欺取財ヲ爲ス目的ノ爲メニ作爲セラレタルコトヲ發見シタルトキハ檢事ノ附帶控訴ヲ待タズ詐欺取財ノ爲ニ文書ヲ變造行使シタルモノトナシ之ニ刑法第三百九十條第二項ヲ適用スルヲ妨ケス

控訴裁判所ニ於ケル審判ノ範圍○控訴ノ性質

控訴ノ性質ニ關シテ一ニ學者ノ異論ナキニテ
對スル一ノ復審制度ナリト云フノ論ヲ抱持スル
目的ヲ達セシメテハ犯罪事實ヲ表明シテ正確ナル
テ一ノ復審制度ノ不完全ナル底得テ結果トシテ
項ニ對シテ審判スルハ審理判決ヲ爲ス可ラス何
此ノ制限アルノ外事物審査ノ範圍ニ至テハ敢テ
テ控訴ノ提起ニ依リ移審ノ效力ヲ生シタル範圍
リト認定スルモ或ハ單純竊盜ヲ以テ持兇器竊盜
所ノ自由ニ屬ス之レ覆審ノ覆審タル所ニシテ眞正
始メテ達スルコトヲ得レハナリ論者動モスレハ控
ノ裁判ヲ被告ノ利益ニ變更ス可ラサル刑事訴訟
定ヲ以テ獨リ刑罰ノ變更カ被告ノ利益ニ歸スル
被告ノ不利ニ歸スル場合モ亦タ此ノ内ニ包含スル

ト雖モ非也今法律ノ規定ヲ離レテ單ニ德義ノ觀念
如キ又ハ官吏侮辱若クハ毆打罪ノ如キハ是ヲ強
キハ其ノ間亦タ輕重ノ差ナキニテ從テ内亂罪ヲ
ト雖モ而モ刑法上ヨリ論スルトキハ内亂罪モ強
ヲ害スル所ニシテ單ニ兩者ノ罪質ヲ探テ一ヲ重
ヲ得ス刑法カ認メテ以テ重トナシ又タ輕シトナ
犯情狀ノ輕重如何刑法第百條ニ存スルモノニシ
更トハ此ノ點ニ關スル裁判ノ變更カ被告ノ不利
七サルノモト知ルヘキナリ而シテ方今判例ノ認
不利益變更ノ意義ヲ更ラニ狹隘ニ解釋シ原裁判
重キ刑ヲ言渡シタルトキ即チ刑罰ノ變更カ被告
ハ本條ニ該當セサルモノトセリ由是觀之ハ控訴裁
ト雖モ刑罰ヲ其ノ利益ニ變更セサル限リハ如何
罪ノ原判決ニ對シ數罪ヲ認定スルモ全ク控訴裁
第一審 岡山地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告 人 川上長三郎

右私書變造行使被告事件ニ付明治三十七年五月五日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ
上告趣意書ハ原院判決ハ第一審判決ニ於テ認メラレタル私書變造行使事件ノ外新ニ詐欺取財未遂ノ犯罪アリト認メ刑法第三百九十條第三百九十七條等ヲ更ニ適用處斷セラレタレトモ本件ハ判決書冒頭ニ記載アル如ク私書變造行使事件ノ起訴ニ依リ審判セラレタルモノナレハ原院判決ハ起訴ナキ事件ニ對シ判決ヲ爲シタル不法アルト同時ニ檢事ノ附帶控訴無クシテ判決ヲ被告ノ不利益ニ變更セラレタル不法ノ判決ナリト思料スト云フニ在リ○然レトモ詐欺取財ヲ爲スニ因リ私文書ヲ變造行使シタル所爲ハ實質上ノ一罪ナルヲ以テ既ニ私文書變造行使ノ所爲ニ付起訴アリタル上ハ假令第一審裁判所ニ於テ詐欺取財ヲ爲ス目的ニ出テタルモノナルコトヲ認メサルモ第二審裁判所ニ於テ之ヲ發見シタルトキハ檢事ノ附帶控訴アルト否トニ拘ラス詐欺取財ヲ爲スニ因ル私文書變造行使罪ナリトシテ處分スルコトヲ妨ケス故ニ斯ク處分シタリトテ科刑ノ程度ヲ重ク變更セザル限リハ起訴ナキ事件ニ對シ判決ヲ爲シタリト云フヲ得サルハ勿論尙ホ被告ノ爲メ原院判決ヲ不利益ニ變更シタルモノト云フヲ得ス本論旨ハ其理由ナシ

●官文書變造行使詐欺取財事件 明治三十七年(レ)第一二七七號 (破毀)
明治三十七年六月三十日判決

判決要旨

一、官報ハ印刷局カ内閣總理大臣ノ管理ノ下ニ行政事務ノ一部

トシテ編輯印刷スル官ノ文書ナリトス從テ官報原版中ニ植字セラレタル活字ヲ變換シテ虛偽ノ事項ヲ印刷シタル所爲ハ官文書偽造罪ヲ構成ス

一、印刷局カ一人ノ依頼ニ因リ或ル事項ヲ官報ニ掲載シテ發行スル場合ト雖モ爲ニ官文書タル性質ヲ變スルコトナシ

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 大塚 萬吉

辯護人 廣岡 守一郎

右官文書變造行使詐欺取財被告事件ニ付明治三十七年五月二十一日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告共ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

被告萬吉上告趣意第二ハ原院ハ官報偽造ナリトシテ刑法第二百三條ヲ適用セラレタルモ同法第二百三條ニハ官ノ文書偽造變造行使云々トノ明文アルモ官報ノ文字ナシ思フニ原院ハ官報ノ二字中官字ノ含ミアルヨリ官報ハ即チ官文書ナリト認メシモノナルヘキモ然レトモ官報ナルモノハ其性質新聞紙ト異ナル所ナク社會ノ出來事ヲ報導スル爲メ民間ニ於テ發行スルモノヲ新聞ト云ヒ官ニ於テ發行スルモノヲ官報ト云フニ過キスシテ其實質上決シテ官文書ト稱スヘキモノニアラス若シ原

官報ノ性質

院ニシテ官報ヲ官文書ナリト断定セシニハ官報其ノモノ、性質ヲ論シテ官文書タル所以ヲ明示セ
サル可ラス然ルニ漫ニ官報偽造行使ト云フカ如キハ理由ヲ付セサル裁判ナリト云ハサルヘカラス
ト云フニ在レトモ○官報ハ印刷局官制第一條ニ「印刷局ハ内閣總理大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ
掌ルニ、官報(中略)ノ編輯並ニ發賣ニ關スル事項ニ、官報其他ノ印刷ニ關スル事項トアルニ依
ルニ、官報ハ印刷局カ内閣總理大臣ノ管理ノ下ニ行政事務ノ一部トシテ編輯印刷スル官ノ報告書ナリ
ト云フヘキヲ以テ則チ官文書ノ性質ヲ有スルモノナルコト疑フ容ルヘキニアラス故ニ之ヲ偽造セ
ンカ則チ官文書偽造ノ罪ヲ組成スヘキコト當然ノ結果ナリト論定セサルヘカラス今本件ノ場合タ
ル官報原版ノ氣壓表中既ニ植字シアリシ活字ヲ變換シタル所爲ノ如キハ果シテ官報偽造ノ罪ヲ構
成スヘキヤ否ヤヲ按スルニ元來官報ノ既ニ整頓シテ頒布セラル、ノ程度ニ至ルノ順序ハ植字ノ外
猶ホ印刷ノ手續ヲモ要スルモノナルカ故ニ植字ノ如キハ唯々官報編輯ノ準備タルニ過キスト云フ
ヘシト雖モ其植字ニシテ一旦完了スルニ於テハ之ニ引續キ必ス印刷セラレ又必ス頒布セラル、ヲ
常トスルモノニシテ要スルニ前共同被告井坂數江ノ如キハ植字係ノ職工ナリシモノナレハ一タヒ
植字ヲ完了スルヤ印刷其モノハ右既ニ完成セル植字ノ儘他ノ者ノ手ニテ取扱ハルヘキモノナレハ
右被告ハ此點ニ於テ他人ヲ機械的ニ使用セル状態ニ在リ而シテ右被告カ變換シタル植字ニ依リ他
人ヲ機械的ニ使用シテ官報ノ印刷ヲ遂ケシメタル所爲ハ是レ則チ右被告自ラ官報ヲ偽造シタルト
敢テ撰テ所ナケレハ結局原院カ右數江等トノ共犯ト認メタル被告ニ官報即チ官文書偽造ノ罪アリ
ト認メ刑法第二百三條ヲ適用シタルハ相當ナリト云ハサルヘカラス猶ホ裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ

爲ス場合ニハ罪ト爲ルヘキ事實ト證據トニ依リテ犯罪認定ノ理由ヲ明示スレハ刑事訴訟法第二百
三條ノ要求ハ則チ茲ニ充タサレタルモノニシテ其他ニ涉リ理由ヲ示スヘキ義務アルコトナク從テ
所論ノ如キ點ニ迄説明ヲ與ヘサルヘカラサル理由ナシ故ニ本項論旨ハ總テ上告適法ノ理由トナラ
ス
被告水野民治上告趣意ハ本件事實ノ要領ハ内閣印刷局活版部職工カ同局發行ニ係ル官報中ノ氣壓
表ノ原版植字ヲ變更シ其儘發行頒布セシメ財物ヲ騙取シタルト云フニアリテ右ノ行爲カ果シテ刑
法上ノ制裁ヲ受クヘキヤ否ヤハ偽造シタルト云ヘル官報ナルモノカ法律上所謂官文書ヲ意味スル
ヤ否ニ依リテ解決スルヲ得ヘキモノト信ス而シテ官報及ヒ官吏ノ行動ニ二種アリ一ヲ官トシ一ヲ
私トス即チ一ハ公ナル資格ヲ固有スルモノト一ハ私ナル資格ノ固有ニ基クトテ以テ分ツモノニシ
テ印刷局ノ如キハ技術局ニシテ其活版部ノ如キ廣ク一私人ノ依頼ニ應シ印刷物ヲ印刷出版スル事
務ノ如キ市内ノ活版所ト差異ナシ要スルニ印刷局ハ官設ノ印刷所タルニ過キス故ニ官報ハ發行頒
布ヲ以テ直ニ印刷局ト云ヘル官報必然ノ作用ニ依リテ行動スルモノニアラス其發賣頒布スルニ於
テハ普通新聞紙ト撰ム所ナシ然ルニ例ヘハ官報ニ於テ物品競賣等ノ公告ヲ官報及ヒ普通新聞紙ナ
ル者ニ掲載スル場合ニ一ヲ官文書トシ一ヲ普通文書トスルカ如キ區別ヲ生スヘキ筈ナク官報ハ官
署タルノ名義即チ内閣印刷局ト云ヘル官署名刷出シアルニ依リテ官文書ナリトセンカ是レ出版條
例ノ規定ニ依ルノミ故ニ或ル一私人ヨリ依頼セラレ印刷發行シタル場合其發行カ印刷局ヨリシタ
ルノ故ヲ以テ官文書ト爲スカ如キハ誤リノ甚シキモノトス然ルニ原院ニ於テ本件ヲ官文書ト認メ

官報ノ性質

タルハ不當ナリ且又官報ハ印刷物ナルヲ以テ夫レ自身ニ於テ直ニ文書タルノ效力ヲ有スルモノニ
アラシテ法律上文書タルニハ必ス更ニ官吏又ハ私人カ文書トシテノ效果ヲ生セシメントスル
ノ意思ヲ表示セサルヘカラス例ヘハ判決謄本ヲ謄寫版ニテ印刷シタル如キ場合ニ裁判所書記タル
者ニ於テ署名捺印スルカ如キ是レナリ右ノ筋合ニ付キ本件ハ刑法上ノ制裁ヲ受クヘキモノニアラ
スト云フニ在レトモ○前顯説示スル如ク官報ノ官文書タル事已ニ明カナル以上ハ事項ノ公事ニ係
ルト私事ニ係ルトニ論ナク苟モ官報ニ掲載セラレタル上ハ總テ官文書ノ性質ヲ有スヘキ事敢テ辯
ヲ俟タサルヲ以テ所論ノ如ク一私人ヨリ依頼ヲ受ケテ或事項ヲ掲載發行スル場合ト雖モ官文書タ
ル性質ヲ有スルモノト論決スヘキハ當然ナリトス況ンヤ本件ノ印刷事項ノ如キハ官廳タル中央氣
象臺ノ報告ニ係ル事項ナルニ於テオヤ右ノ筋合ナルヲ以テ原院カ被告等ノ所爲ヲ官文書偽造ニ問
擬セシハ相當ナリト云フヘシ本項上告論旨ニシテ右説明ニ關スル以外ノ點ニ對シテハ前記被告萬
吉上告趣意第二點ニ對シテ爲シタル説明ニ就テ其理由ヲキコトヲ了解スヘシ

●竊盜事件 明治三十七年(レ)第一〇八一號 (棄却)
明治三十七年六月二十八日宣告

判決要旨

一、巡查カ準現行犯ト思料シ被告人ヲ引致告發シ之ヲ受取りタ
ル司法警察官ニ於テ引致告發調書ヲ作成シタル以上ハ縱令

後日ニ至リ非現行犯ナリシコト判明スルモ之カ爲メ既ニ適

法ニ成立シタル調書ハ無効ト爲ルヘキモノニ非ス

一、竊盜罪ノ目的物ハ他人ノ所持ニ係ルモノナルコトヲ要ス而

シテ所持ノ有無ハ物ニ對シ事實上支配力ヲ及ホスコトヲ得

ルヤ否ヤニ依リテ之ヲ決スヘキモノトス

第一審 大阪地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 石丸 忠衛
外一名

右竊盜被告事件ニ付明治三十七年四月二十六日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告

兩名ハ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

被告兩名上告趣意書ノ第一點ハ原院カ其判決ニ於テ引致告發調書ヲ援用シタルハ不法ナリ抑モ逮

捕及ヒ告發ニ付テノ調書ナルモノハ現行犯ノ場合ニアラサレハ作成セラルヘキモノニアラス今本

件事實ヲ考フルニ本件竊盜ナル犯行ハ既ニ明治三十六年七月十七日頃ノ夜間ニ於テ遂行セラレ

タルコトハ原判決ニモ明認スル所ナリ又本件カ摘發セラルヘキモノニアラス同日二十三該盜品ヲ

倉部與太郎ナルモノニ賣却シ同人カ之ヲ運搬シ去リタル後ニ於テ偶然巡查ニ覺知セラレ檢舉セラ

レタルハ原判決ニモ明認スル所ナリ又本件カ摘發セラルヘキモノニアラス同日二十三該盜品ヲ

倉部與太郎ナルモノニ賣却シ同人カ之ヲ運搬シ去リタル後ニ於テ偶然巡查ニ覺知セラレ檢舉セラ

レタルハ原判決ニモ明認スル所ナリ又本件カ摘發セラルヘキモノニアラス同日二十三該盜品ヲ

倉部與太郎ナルモノニ賣却シ同人カ之ヲ運搬シ去リタル後ニ於テ偶然巡查ニ覺知セラレ檢舉セラ

逮捕告發調書ノ效力○物所持ノ有無ヲ定ムル標準

ル、ニ至リタルコトハ本件第一審共同被告人タリシ小池龜次郎外七名ニ對スル引致告發調書ノ記
載ニヨリテ明カナリ果シテ然ラハ本件ハ結局刑事訴訟法第五十六條五十七條ノ場合ニ該當セサル
ニ拘ハラヌ巡査ハ強ヒテ之ヲ現行犯ナリト唱へ遂ニ司法警察官ノ面前ニ引致シ告發調書ヲ作成セ
シメタルモノニシテ該調書ハ當然無効ナリト思考ス然ルニ原院カ之レヲ採用シ證據ニ供シタルハ
違法ノ判決ナリト信スト云フニ在リ○因テ所論ノ引致告發調書ヲ閱スルニ「巡査岡野徳太郎ハ本
職ノ面前へ竊盜事件ノ被告人石丸忠衛上村邦太郎ノ兩名ヲ引致シ左ノ告發ヲ爲セリ(中略)右被告
ノ所爲ハ竊盜ノ現行ニ准シ處分スヘキモノト思料セルヲ以テ此旨告發ス」云々ト錄取シアリテ當
時警察官ハ本件ヲ準現行犯ト思料シ被告人ヲ引致告發シタルコト明白ナレハ此手續ニ基キ作成セ
ラレタル引致告發調書ハ其成立適法ニシテ有效ナリト去レハ後日ニ至リ本件ノ準現行犯ニアラ
サルコト明白ト爲リシトスルモ既ニ有效ニ成立シタル調書ノ爲メニ無効トナルヘキ謂ハレナケレ
ハ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタル原判決ハ相當ニシテ本論旨ハ其理由ナシ

第二點原院ハ本件ヲ竊盜犯ナリト斷定シタルハ擬律ノ錯誤アリト信ス被告ハ物品運送ヲ業トスル
海商ニシテ(被告ハ船舶ノ所有者ナリ)即チ荷送人ニ委託ヲ受ケ運送品ヲ受取リ之ヲ荷受人ニ交
付シ一定ノ運送賃ヲ取得スルモノタリ故ニ運送品ノ受取リヨリ其引渡ニ至ル迄ノ期間ニ於テハ被
告ハ運送品ヲ占有シ而カモ善良ナル管理者ノ注意ヲ以テ之ヲ保管シ或ル一定ノ場合ニ於テハ運送
品ヲ處分スルコトヲモ爲シ得ヘキ權能ヲ有スルモノナリ故ニ所謂運送賃ナルモノハ甲所ヨリ乙所
ニ物品ヲ運搬スルノ勞力ニ對スル報酬ト其物品ノ保管引渡等委託ニ基ク勞務ノ報酬トヲ包含スル

モノト解セサルヘカラス然ラハ被告ト荷送人トノ間ニ於ケル運送品ノ關係ハ該運送品ヲ荷受人ニ
引渡ス期間内ニ於テハ一種ノ委託關係ノ存在スルコト疑ヲ容ルヘカラス并レハ運送品ヲ荷受人ニ
引渡ス前ニ於テ之ヲ費消シタル被告ノ行爲ハ刑法第三百九十五條ノ犯罪ヲ構成スルハ格別決シテ
竊盜罪ヲ以テ論スヘカラスナルナリト云フニ在リ○按スルニ竊盜罪ハ他人ノ所有物ヲ竊取スルニ因
リ成立スルモノニシテ竊取トハ人ノ所持ヲ侵シ自己ノ所持ニ移ス行爲ニ外ナラサルヲ以テ竊盜罪
ノ目的物ハ他人ノ所持ニ係ルモノナルコトヲ要スルヤ言フ俟タス蓋シ所持トハ物ニ對スル事實上
ノ支配力關係ヲ謂ヒ物ノ所持アリヤ否ハ主トシテ所持物ノ性質及ヒ其經濟的事情ニ從ヒ斷定セ
サルヘカラス現ニ物ヲ把持スルト否ハ必スシモ所持ノ有無ヲ決スル標準ト爲スニ足ラス何トナレ
ハ物ヲ把持スル者ニシテ其支配力關係ナキコトアルハ驛夫カ旅客ノ手荷物ヲ運搬スル如キ事例乏
シカラサルニ徴シ明ナレハナリ要ハ物ニ對シ事實上支配力ヲ及ホスコトヲ得ル者ノ如何ニ鑑ミ所
持者ヲ決スルニ在ルノミ本件ニ付キ原院ノ認定セル事實ニ依レハ被告等ハ廻漕業木元喜八ヨリ俵
入緋粕ノ運送ヲ委託セラレタルモノナルヲ以テ緋粕俵其モノ、運送保管ニ必要ナル限度ニ於テハ
俵上支配力ヲ有シ之ヲ實行スルコトヲ得ヘシト雖モ其内部ニ存スル緋粕ニハ何等支配力ヲ有セサ
ルハ一般運送業者ノ營業慣例ニ徴シ明ナル如ク被告ハ緋粕ヲ所持セル者ニ非サルヤ一點ノ疑ヲ存
セス是ニ由リテ之ヲ觀レハ原院判示ノ如ク被告カ右俵中ニ在ル緋粕ヲ拔取リタル事實ハ他人ノ所
有物ヲ竊取セルモノニ外ナラス故ニ原院カ被告ノ所爲ヲ以テ竊盜罪ヲ構成スルモノト認メ刑法第
三百六十六條ニ間擬シタルハ相當ナリトス

運送品發調書ノ效力○物所持ノ有無ヲ定ムル標準

●毆打拷責事件 明治三十七年(七)第一三三六號 (棄却)

判決要旨

一、刑法第二百八十二條ノ所謂警察官吏トハ司法警察事務ニ從事スル官吏ノ總稱ニシテ巡查憲兵卒ト雖モ該事務ノ取扱ヲ爲ス者ハ悉ク之ニ包含ス

(參照) 裁判官檢察官及ヒ警察官吏被告人ニ對シ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘ又ハ陵虐ノ所爲アル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス(刑法第二百八十二條第一項)

第一審 鳥取地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 大田 金藏 辯護人 林 清

右毆打拷責事件ニ付明治三十七年五月十四日大阪控訴院カ言渡シタル判決ヲ不法トシ被告人ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ
被告三名ノ上告趣意書第二點刑法第二百八十二條ノ法意ハ巡查ヲ包含スルモノニアラス故ニ原審ニ於テ同條ヲ適用シタルハ擬律ノ誤錯アリ刑法第二百八十二條ノ所謂警察官吏トハ法律上被告人ニ對シ訊問ヲ爲スノ資格アル者ヲ指稱スルノ法意ニシテ巡查ハ之ニ包含セザルコト明カナリ刑法第二百八十二條ハ罪狀ヲ陳述セシムル爲メナルコトヲ要件トナス即チ同條ハ罪狀ヲ陳述セシメン

カタメ訊問ヲ爲スニ際シテノ暴行ニ關スル制裁ナリ而シテ訊問資格ナキ巡查カ訊問ヲ爲スハ固ヨリ無効ノ行爲ナリ其無効ノ行爲ヲ爲スニ當リ犯人ニ暴行ヲ加フルコトアルモ本條ノ犯罪ヲ構成セサルコト明ナリ然ルニ原審ニ於テ第二百八十二條ヲ適用處斷シタルハ擬律ノ誤錯アルモノト信スト云フニ在リ○然レトモ刑法ニ所謂警察官吏トハ司法警察事務ニ從事スル官吏ノ總稱ニシテ唯ニ司法警察官ノミナラス巡查憲兵卒ニ至ル迄司法警察事務ノ取扱ヲ爲ス者ヲ包含スルモノナルコトハ本院判例ノ認ムルコトコトナリ而シテ巡查タリシ上告申立人ハ司法警察官ノ命令ニ從ヒ之レカ補助機關トシテ漁業法施行規則違犯ノ嫌疑者ヲ搜索シ居タルコトハ記録ニ徴シ明カナルヲ以テ刑法第二百八十二條ノ所謂警察官吏ニ該當スヘキモノトス然ラハ嫌疑者ヲ訊問スル職權ナシトスルモ之レカ罪狀ヲ陳述セシムル爲メ暴行ヲ加ヘタルコトハ原判決ノ認ムルコトコトナレハ同條ヲ適用處斷シタルハ相當ナリトス本論旨ハ理由ナシ

●監守盜官印盜用官文書偽造行使事件 明治三十七年(七)第一〇一一號 (破毀)

判決要旨

一、告發ヲ受ケタル官吏ノ作成スル告發調書ハ刑事訴訟法ノ規定ニ從ヒ作成スヘキモノナルヲ以テ之ヲ作成スル官吏ハ每葉ニ契印スルコトヲ要ス

○公判ニ於ケル檢察官ノ陳述
○公判ニ於ケル檢察官ノ陳述
○告發調書ノ作成○三等郵便局ノ職員ノ資格

一、三等郵便局ノ通信事務員ハ同局ノ雇員ニシテ三等郵便局長ノ個人トシテノ雇人ニアラス從テ同局長ノ被告事件ニ付キ證人トシテ訊問スルモ違法ニアラス

一、檢事カ公判ニ於テ被告事件ヲ陳述シタル事跡ナキトキハ其公判ニ於ケル審理手續ハ口頭辯論ノ法式ニ違犯スルモノニシテ無効タルコトヲ不免從テ此ノ場合ニ於ケル被告ノ供述モ亦々無効タルモノトス

說明

公判ニ於ケル檢事ノ供述ニ於ケル檢事ノ供述ハ其ノ審理ノ有效條件ナリ若シ裁判所ニ於テ檢事ノ供述ヲ聞カスシテモ其ノ審理ハ其ノ審理ノ有效條件ナリ

審理判決ヲ爲スコトアラシカレバ口頭審理ノ定則ニ違反セルモノニシテ無効タルルヲ不免按スルニ訴訟主義ノ本ニ成レル我刑事訴訟法ヨリ論スルトキハ公判ニ於ケル檢事ノ地位ハ即チ原告者ナリ而シテ凡ソ裁判ナルモノハ原告被告兩者ノ供述ヲ聞キ是ヲ以テ判斷ノ基本ト爲サハル可ラサルヲ以テ公判廷ニ於ケル原告被告兩者ノ陳述ハ審理ノ有效條件タルヲ知ルヘキナリ然レトモ茲ニ注意スヘキハ裁

判所カ檢事ニ向テハ被告事件ノ供述ヲ爲スヘキ機會ヲ與ヘ被告ニ對シテハ一定ノ事項ヲ訊問シタルニモ不拘何等ノ供述ヲ爲サハルトキハ裁判所ハ遂ニ有效ナル裁判ヲ爲スヲ得サルカ曰ク然ラス凡ソ訴訟ニ於テ當事者ノ供述ヲ徵スヘク規定スル所以ノモハ畢竟當事者ノ利益ヲ保護スルニ出テタルモノニシテ裁判所カ進ンテ其ノ供述ヲ求メタルニ當事者之ニ應セサルカ如キハ自ラ其利益ヲ放棄スルモノニシテ此場合ニ於テハ最早當事者ノ供述ヲ願ミルニ暇ナク裁判所ハ自由ノ推斷ヲ以テ有效ニ之ヲ審判スルヲ得ヘシ今之ヲ民事訴訟法ニ照スニ同法ノ規定ハ出頭シタル原告若クハ被告カ辯論ヲ爲スコトヲ肯セサルトキハ出頭セザルモノト看做シ欠席判決ヲ爲スコトヲ得トアリ現ニ出頭シタル者ニ對シ出頭セザルモノト看做スハ是レ法制ノ結果ニシテ斯ル規定ノ存セサル刑事訴訟法ノ本ニ在テハ想像シ得サル處ナリ加之刑事訴訟法ニ於テハ被告ノ欠席判決ヲ認ムルモ原告タル檢事ノ欠席判決ヲ認メス蓋シ檢事ノ出廷ハ裁判所構成ノ要素ニシテ苟モ之ナクハ審判ヲ開始スルコトヲ得サレハナリ要之ニ公判ニ於ケル檢事ノ供述ハ審理ノ有效條件ナリ之ヲ聞カス若クハ特ニ供述ヲ爲スヘキ機會ヲ檢事ニ與ヘスシテ公判ヲ終了スルハ違法タルヲ不免サルナリ

(參照) 數個ノ裁判所ノ管轄ナル場合ニ於テハ其中ニテ最初審審又ハ公判ニ着手シタル裁判所ヲ以テ其管轄ナリトス(刑事訴訟法第二十七條)

刑法第二八二條ノ警察官吏ノ憲職○告發調書ノ作成○三等郵便局ノ雇員ノ資格○公判ニ於ケル檢事ノ陳述

第一審 函館地方裁判所

第二審 函館控訴院

被告人 和田英太郎

辯護人

高木益太郎
江木文實
毛利美代吉
小久江

右監守盜官印盜用官文書偽造行使私印盜用被告事件ニ付明治三十七年四月六日函館控訴院カ言
渡シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判
決スルコト左ノ如シ

辯護人高木益太郎辯明書第一ハ司法警察官ノ告發調書ハ刑事訴訟法第五十三條第五十一條ニヨリ
作成スルモノナリ從テ刑事訴訟法第二十條ノ法式ヲ履踐セサルトキハ其書類ノ効ナキモノトス翻
テ警部渡邊喜惣治ノ作成セル小野寺佐助告發調書ヲ見ルニ記錄第十丁ト第十一丁ト接續セル部分
ニ該警部ノ爲シタル契印ナキヲ以テ(口述告發者タル小野寺佐助ノ契印アルモ文書ノ每葉ニ契印
スヘキ法則ハ其文書ヲ作成スル官吏ノ契印ヲ要ストノ意義ニシテ口述告發ヲ爲シタル者ノ契印ハ
刑事訴訟法第二十條ニ所謂契印タルノ効ナキヤ勿論ナリ)刑事訴訟法第二十條ニヨリ該調書ハ無
効ナルニモ拘ハラズ原院判決ハ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルノ不法アリ(二十九年四六號同年二月
十日判決參照)ト云ヒ辯護人江木文實毛利文實上告趣意擴張書第八ハ刑事訴訟法第五十三條ニ依
リ司法警察官ノ作成スヘキ告發調書ハ同法第二十條ノ法式ヲ履ムニアラサレハ其書類ノ効ナキコ
ト論ヲ俟タス而シテ警部渡邊喜惣治ノ作成セル小野寺佐助ノ告發調書ヲ閱スルニ刑事訴訟法第二
十條ニ背キ作成者タル司法警察官ノ契印ヲ欠ク(記錄十丁ト十一丁トノ間)無効ノ書類ナルニ拘

ハラズ斷罪ノ資料ニ供シタルハ不法ナリト云フニ在リ○因テ按スルニ刑事訴訟法第五十三條第一
項ニハ「何人ニ限ラズ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一
條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ檢事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得」トアリ而
シテ同法第五十一條ニハ「告訴ハ告訴人ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ又告訴ハ口述
ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得其告訴ヲ受ケタル官吏ハ調書ヲ作り告訴人ニ之ヲ讀聞カセ共ニ署名捺印
ス可シ」トアルヲ以テ告發ハ書面ヲ以テ之ヲ爲シ又ハ口述ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ルハ勿論口述
ヲ以テ告發ヲ爲シタルトキハ之ヲ受ケタル官吏ハ告發調書ヲ作成スルコトヲ要シ且該調書ハ刑
事訴訟法ノ規定ニ從ヒ作成スヘキ書類ナルヲ以テ同法第二十條第一項ノ規定ニ依リ作成スル官吏
ニ於テ其每葉ニ契印スルコトヲ要スルモノト云ハサルヘカラス然ルニ警部渡邊喜惣治ノ作成シタ
ル小野寺佐助ノ告發調書ニハ記錄第十枚ト第十一枚トノ間ニ同警部ノ契印ナク右ハ無効ノ書類ナ
ルニ拘ハラズ原院カ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ即チ不法ニシテ上告ハ其理由アリ
辯護人高木益太郎辯明書第二ハ三等郵便局ニ在勤セル通信事務員ナルモノハ官吏ニアラサルハ勿
論國家機關トシテ履ハル、モノニアラスシテ個人トシテ三等郵便局長其人ニ雇備セラル、モノナ
リ換言セハ通信事務員ハ國家ト雇備契約ノ下ニ立ツモノニアラスシテ三等郵便局長某ノ雇人ナル
コトハ恰カモ執達吏代理カ個人タル執達吏ノ雇人タルト軒輊ナシ翻テ證人阿部庄五郎ノ豫審調書
ヲ見ルニ其六問ノ答ニ「明治三十三年通信事務員トナリ目下モ在勤シ居ルナリ」トノ記載アリ由
之觀之證人阿部庄五郎ハ被告和田英太郎ノ雇人ナルコト明白ナリ從テ證人資格ヲ欠缺セルモノト

○刑法第二八二條ノ警察官吏ノ意義○告發調書ノ作成○三等郵便局ノ雇員ノ資格
○公判ニ於ケル檢事ノ陳述

云ハサルヘカラサルニモ拘ハラヌ豫審判事ハ宣誓ノ上證言セシメタリ而シテ原判決ハ此違法ノ證人訊問調書ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルノ不法アル以上ハ破毀サルヘキモノナリト信スト云フニ在レトモ三等郵便局ノ通信事務員ハ明治二十九年十月二日遞信省公達郵便及電信局雇採用規則ノ規定ニ從ヒ三等郵便局長ニ於テ命スヘキ同局ノ雇員ニシテ一個人タル局長其者ノ雇人ニハアラス故ニ豫審判事カ通信事務員タル阿部庄五郎ヲ三等郵便局長タル被告ノ犯罪事件ニ付證人トシテ訊問シタルハ違法ニアラサルヲ以テ原院カ其訊問調書ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ不法ニアラス辯護人高木益太郎小久江美代吉辯明書第三ハ我刑事訴訟法ニ於テハ口頭審理主義ヲ採用セルヲ以テ公訴ヲ提起スルニハ起訴狀ヲ提出スルノミヲ以テ足レリトセス檢事ハ公判ニ於テ被告事件ヲ陳述スルコトヲ必要トシ且ツ公判ノ起頭ニ於テ之ヲ陳述スルヲ以テ普通ノ順序トスルカ故ニ第一審公判ノ際檢事ヨリ被告事件ニ付キ何等ノ陳述ナキニ拘ハラヌ事件ノ審理ニ着手シタルハ口頭審理ノ原則ニ反シタルモノナルコトハ御院第一刑事部明治三十六年(レ)第二千二百八十九號明治三十七年二月五日言渡ノ判決ニ徴シ明瞭ナリ而シテ原判決證據說明ノ部ニ明治三十五年四月十六日第一審廷ニ於ケル被告小野寺佐助ノ供述ヲ掲ケアレトモ同日公判ノ際ニハ檢事ヨリ被告事件ノ陳述アリタル事跡ナク又前回公判開廷ヲ證明スヘキ書類即チ同年四月十一日開廷ノ公判始末書(即日整頓)ニハ契印ヲ欠キタル事跡アリ(記録七百八十枚ト七百八十一枚トノ間)テ同始末書ハ無効ノ書類タルヲ免カレス故ニ此書類ニヨリ檢事カ被告事件ノ陳述ヲ爲シタルコトヲ確認スルヲ得ス左スレハ第一審裁判所ハ檢事ヨリ適法ニ被告事件ノ陳述ヲ聽カサルニ拘ハラヌ事件ノ審理ニ着手

五八

シタルハ口頭審理ノ定則ニ違反シ從テ佐助ノ供述ハ無効タルヘキモノナレハ其供述ヲ證據ニ採用シタル原裁判ハ探證ノ法則ニ違反セリト云フニ在リ○依テ按スルニ我刑事訴訟法ニ於テハ口頭審理主義ヲ採用スルヲ以テ檢事カ公訴ヲ提起スルニハ起訴狀ヲ提出スルヲ以テ足レリトセス檢事カ公判ニ於テ被告事件ヲ陳述スルヲ必要トスルコトハ本院判例ノ已ニ認ムル所タリ然ルニ本件被告事件ニ付檢事カ爲シタル陳述ヲ錄取セル明治三十五年四月十一日附ノ第一審公判始末書ニハ記録第七百八十枚ト第七百八十一枚トノ間ニ之ヲ作成シタル裁判所書記ノ契印ヲ欠キ無効ニ屬スルヲ以テ右檢事ノ陳述ハ其效ナク又同月十六日ノ公判ニ於テモ檢事カ被告事件ヲ陳述シタル事跡ハ更ニ之ナキヲ以テ同月十六日ノ第一審公判ハ口頭審理ノ定則ニ違反シタル不法アルモノニシテ其公判ニ於テ爲シタル被告佐助ノ供述ハ無効タルヲ免レサルモノトス然ルニ原院カ之ヲ斷罪ノ資料ニ供シタルハ則チ不法ニシテ上告ハ此點ニ於テモ亦其理由アルモノトス

●公印盜用公文書偽造行使及監守盜事件 明治三十七年(レ)第一二七二號(破毀) 明治三十七年六月三十日判決

判決要旨

一、土地ヲ抵當トナシ村金ヲ借受ケタル者村長ニ就任シタルヲ奇貨トシ其ノ抵當ノ登記ヲ抹消センカ爲メ借金ヲ辨濟シタルガ如クニ裝ヒ助役ヲシテ虛偽ノ債權辨濟ノ受取書ヲ作成

公印盜用公文書偽造行使罪ノ成立

交附セシメ村長代理トシテ同助役ヲ區裁判所ニ出頭セシムル旨ノ命令書ヲ作成シ之レニ村長ノ公印ヲ押捺シ借用證書ト供ニ之ヲ區裁判所ニ提出セシメタル所爲ハ公印盜用公文書偽造罪ヲ構成ス

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

被告人 平尾 一郎

右公印盜用公文書偽造行使監守盜被告事件ニ付明治三十七年五月十一日名古屋控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ同院檢察長手塚太郎ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意ハ本件公訴事實ハ全部原判決ノ認ムル所ニシテ即チ被告平尾一郎ハ村長在職中助役岡田安藏ニ依頼シ債務ノ辨濟ナキニ係ハラス虚偽ノ受取書ヲ作成セシメ之ニ基キ債務ノ辨濟アリタルニ因リ登記抹消ノ申請ヲ命スル旨虚偽ノ命令書ヲ作成シ(記録二五枚)安藏ヲシテ豊橋區裁判所ニ提出セシメタル事實ナリ故ニ安藏ハ共犯ノ訴追ヲ受ケサルモ共謀ナルカ又ハ少クモ被告平尾一郎ニ於テ受取證書ノ虚偽ナル情ヲ知り之ニ基キ更ニ虚偽ノ命令書ヲ作成シタル事實ナルコトモ亦原判決ノ認ムル所ナルハ勿論ナリ然ルニ後段ニ至リ他人カ作成シタル虚偽ノ文書ニ基キ命令書ヲ作成シタルヲ以テ事實ヲ虚構シタリト云フヲ得スト説明シタルハ文意明亮ナラサルモ文書ノ内容虚偽

ニアラスト解スルトキハ明ニ前段虚偽ノ命令書ヲ作成シタル事實ハ明白ナリトノ説明ニ矛盾シ理由ニ齟齬アル裁判ナリ若シ被告ハ他人カ作成シタル虚偽ノ文書ニ基キ新ニ虚偽ノ文書ヲ作成シタルニ外ナラサルヲ以テ公ノ信用ヲ害スル責任ハ第一ノ虚偽ノ文書作成者ヘ歸シ被告ノ作成シタル文書ハ内容虚偽ナルモ偽造ニアラストノ意ナリトセハ官文書偽造罪ノ性質ヲ誤解セル擬律錯誤ノ判決ナリ虚偽ノ命令書ヲ作成シテ豊橋區裁判所ニ提出シ登記抹消ヲ受ケタルハ明カニ公ノ信用ヲ害セルノミナラス(明治三十七年三月一日貴院判例参照)官文書偽造罪ニ於テ虚偽ノ文書ヲ作成シタル方法ハ他人ノ意思表示ヲ採用シテ文書ノ内容ト爲シタルト自己ノ意思表示ヨリ抽出シタルトハ何レモ犯罪ノ情狀ニ過キスシテ犯罪構成要件ニ何等ノ關係ナシ獨逸刑法第二百七十一條虚偽ノ申請ニ因リ官公文書ニ虚偽ノ記録ヲ爲サシメタル場合及第三百四十八條官吏虚偽ノ事實ヲ官文書ニ記録シタル場合ノ關係ハ本件爭點ノ關係ニ類似ス普通ノ解釋ニ據レハ第二百七十一條ハ官吏情ヲ知ラサル場合ヲ規定シタルモノナルヲ以テ登錄スヘキ官吏情ヲ知ルトキハ第三百四十八條ノ犯罪成立ス(ラルスハツゼン六版同條註三號ベルネル十八版六〇四六頁リスト三版五〇九頁)而シテ第三百四十八條公文書ノ記録ハ官吏記録ノ内容ヲ他人ノ意思表示ニ基カシムルト自己ノ意思ヨリ抽出セシメタルト問ハス(フランク同條註一號ラルスハツゼン同條註二號)ト論シ他ニ格段ノ反對論ナキカ如シ故ニ上官ノ命令其他法令ノ規定ニ據リ官吏虚偽ナルコトヲ知ルモ之ヲ記録スヘキ義務アル場合ノ外ハ虚偽ナルコトヲ知テ之ヲ記録シタルトキハ自己ノ意思ヨリ抽出シタルト他人ノ意思表示ニ基クト問ハス獨乙刑法第三百四十八條ノ犯罪ヲ構成スルヤ明カナリ又我刑法

公印盜用公文書偽造行使罪ノ成立

草案第三百三十八條ハ第一項第二項ニ於テ官吏官文書ヲ無形的ニ偽造變造シタル場合ヲ規定シ其偽造變造ハ一人ノ陳述ヲ記録シタル場合ヲ包含スルヲ以テ(草案註釋五一五號)文書ノ内容ハ自己ノ意思ヨリ抽出シタル場合ニ限ラス同條第二項ハ官吏偽造變造ノ文書ヲ行使シタル場合ヲ規定シ其偽造變造ノ文書ハ官吏ヨリ出ルト人民ヨリ出ルトヲ問ハサルヲ以テ(同五五一九號)他人カ偽造變造シタル文書ニ基キ新ニ虛偽ノ文書ヲ作成シタル場合モ無形ノ偽造罪成立スル精神ナルヤ明カナリ而シテ確定法文ハ之等ノ規定ヲ削除シタルモ官文書ニ於テハ無形ノ偽造變造ヲ罰スルハ貴院判例ノ一致スル所ナルヲ以テ草案ト同ク官吏ハ一人ノ作成シタル虛偽ノ文書ニ基キ故意ヲ以テ新ニ虛偽ノ文書ヲ作成スルモ官文書偽造ヲ以テ論ス可キヲ至當トス若シ原判決説明ノ如ク他人カ作成シタル虛偽ノ文書ニ基キタルトキハ虛偽ノ文書ヲ作成スルモ官文書偽造罪成立セザルモノト假定セハ判決正本下付ノ申請アリタルニ際シ或書記ハ判決原本ヲ變造シ他ノ書記ハ共謀シ又ハ情ヲ知テ變造セル判決原本ニ基キ虛偽ノ判決正本ヲ作成シテ之ヲ下付シタル場合公證人カ其ノ依頼ニ於テ他人ノ委任狀ヲ偽造シ公正證書ノ作成ヲ依頼シタル際共謀シ又ハ情ヲ知テ偽造委任狀ニ基キ正當ノ權限ヲ有スル代理人ナル旨虛偽ノ公正證書ヲ作成シタル場合登記官吏カ偽造證書ヲ以テ登記申請アリタルニ際シ共謀シ又ハ情ヲ知テ右偽造證書ニ基キ虛偽ノ登記ヲ爲シタル場合(明治二十九年七月六日貴院判例參照)支拂命令官カ虛偽ノ文書ヲ以テ支拂請求ヲ受クル際共謀シ又ハ情ヲ知テ之ニ基キ虛偽ノ支拂命令書ヲ作成シタル場合ノ如キモ亦他人カ作成シタル虛偽ノ文書ニ基キ作成シタルモノナレハ官公文書偽造罪ヲ成立セザルモノト云ハサルヘカラス豈斯ノ如キ理アラシヤ依テ前述スルカ如ク原判決ハ理由ノ齟齬若クハ擬律ノ錯誤アル不法ノ判決ト思料スト云フニ在リ○依テ按スルニ原判決ノ前段ニハ「原判決(第一審判決ヲ指ス)中被告ノ控訴ニ係ル公印盜用公文書偽造行使ノ公訴事實ハ被告平尾閑一郎ハ明治二十九年一月二十五日附證書ヲ以テ自己所有ノ地所七筆ヲ抵當トシ金二百九十九圓ヲ居村基本財産中ヨリ借受ケ居リ其證書ハ同村長ノ責任ヲ以テ助役ニ寄託シアリタル處被告ハ明治三十三年十二月廿五中右牛川村ノ村長ニ就任セシヲ幸ヒ右抵當ヲ抹消シ其地所ヲ他ニ使用セント企テ借用金ヲ辨濟セサルニ拘ハラス同月二十五日附牛川村役場ニ於テ金二百九十九圓ノ元利返濟アリシニ付キ抵當權抹消登記申請ノ爲メ同村助役岡田安藏ヲ豊橋區裁判所ニ村長代理トシテ出頭セシムル旨ノ命令書一通ヲ偽造シ村長タル被告ノ名下其他ノ要部ニハ擅ニ村長ノ公印ヲ押捺シ其翌二十六日安藏ヲシテ借用證書ト共ニ右命令書ヲ豊橋區裁判所ヘ差出サシメ抵當登記ノ抹消ヲ受ケタリト云フニ在リテ其事實ハ借用金ノ辨濟ナカリシ點ヲ除ク外總テ被告ノ當廷ニ於ケル其旨ノ自供ニ依リ明白ナレトモ云々」ト判示シアリテ要スルニ原院ハ被告ニ本件公訴ニ係ル公印盜用公文書偽造行使ノ所爲アルコトヲ被告ノ原院公廷ニ於テ爲シタル供述ニ據リテ認定シタルモノナルコト明カナリトス然ルニ原院ハ其判決ノ後段ニ於テ原院公廷ニ於テ爲シタル被告ノ陳述並ニ岡田安藏ノ豫審廷及原院公廷ニ於テ爲シタル陳述等ヲ援用シテ「被告ノ意思ハ單ニ抵當登記ヲ抹消スルニ在リテ之レカ爲メ安藏ヲシテ借用金受取證書ヲ作成セシメ村長タル被告自身カ借主タル場合被告ノ代理トシテ村有財産保管ノ責ニ在ル安藏ニ於テハ後日被告ヨリ他ノ證書ヲ差入ル、コトヲ約シ登記抹消ヲ承諾シ貸金受取書ヲ作リタル事實

公印盜用公文書偽造行使罪ノ成立

ナレハ其結果トシテ登記申請代理ノ命令書ヲ作ルモ事實ヲ虚構シ公文書ヲ偽造シタルモノト云フ
ヘカラス云々ト説明セリ依テ按スルニ村有基本財産タル貸付金額ノ抵當ハ一ノ村有財産タルコ
ト固ヨリ論ヲ俟タサル所ナレハ其抵當權ヲ抛棄シ其登記ヲ取消ス等即チ之ヲ處分ヲ爲サントセハ
須ラク村會ノ議決ヲ經サルヘカラサルモノナルコトハ町村制第三十三條ノ規定ニ照シ明カナルヲ
以テ該規定ノ裏面ニ依リ村長ハ村會ノ議決ヲ經スシテ村有貸付金ノ擔保ヲ取消スノ承諾ヲ與フル
等即チ基本財産ノ處分ニ關スル事項ヲ行フノ權ナキコト勿論ナレハ町村制上村長ノ故障アル場合
ニ之ヲ代理スルニ過キサル助役ニ於テ唯ニ貸金ノ完済ナキニ拘ハラヌ借主ニ對シ貸金ノ受取書ヲ
交付シ抵當權ヲ抛棄スルカ如キハ決シテ許サレサル行爲ナリトス今本件ヲ按スルニ所論ノ抵當登
記抹消ノ處分ニ付テハ村會ノ議決ヲ經タル事實ハ原判文中毫モ見ルヘキ廉ナキヲ以テ結局右等處
分ハ法律上到底爲シ得ラレザリシ場合ナルコトヲ知ルニ足ルヘシ然ルニ本件ニ於テ被告カ牛川村
基本財産中ヨリ借受ケタル金員ハ未タ完済シ居ラサルモノナルニ拘ラス助役岡田安藏ニ於テ被告
ヘ右貸金ノ受取書ヲ交付セシ事實ナルコトハ原判文中趣旨ニ徴シ定ニ明瞭ナレハ其所謂受取書ナ
ルモノハ虚偽ノ事實ヲ記載セルモノナルコト論ヲ俟タヌ而シテ被告カ斯ク虚偽ノ事實ヲ記載シタ
ル受取書タルコトヲ知リテ(前略)金二百九十九圓ノ元利返済アリシニ付抵當權抹消登記申請ノ爲
メ同村助役岡田安藏ヲ豊橋區裁判所ニ村長代理トシテ出頭セシムル旨ノ命令書ヲ作リタル上ハ是
レ即チ虚偽ノ事實ヲ公文書ニ掲記シタルモノナルヲ以テ公文書偽造ノ所爲ニ該リ而シテ右偽造ノ
公文書ニ村長ノ公印ヲ押用セシハ公印盗用ノ所爲ニ該ルモノナルコト辯ヲ要セサル所ニシテ則チ

原判決後段ノ説明ノ如キハ未タ以テ被告ニ無罪ヲ言渡スヘキ理由ト爲スニ足ラス從テ其前段ナル
犯罪事實ノ認定ヲ動カスノ效力ナキモノトス然ルニ原院ニ於テ本件ノ所爲ヲ罪ト爲ラサルモノト
シ刑事訴訟法第二百二十四條ニ依リ無罪ヲ言渡シタルハ結局擬律錯誤ノ裁判ニシテ破毀ノ原由ア
ルモノトス

詐欺取財事件

明治三十七年(九)第一二四五號 (棄却)
明治三十七年七月一日判決

判決要旨

一、辯論ノ最終ニ爲サシムル被告人ノ供述ハ 刑事訴訟法 第二百二十條 裁判所ノ
訊問ニ對スル被告人ノ供述ヲ規定シタル 刑事訴訟法 第二百八條 中ニ包含ス
一、訊問ニ對スル被告人ノ供述ハ公判始末書ニ其ノ内容ヲ記載セ
サル可ラサルハ其ノ所定法文ノ解釋ニ依リ明ナリト雖トモ
辯論ノ最終ニ爲ス被告ノ供述ハ其ノ内容ヲ明カニスヘキ規
定ナキヲ以テ書記ハ唯其ノ供述ヲナサシメタルコトノミヲ
記シ内容ヲ記スルヲ要セス

(参照) 二、裁判所書記ハ公判始末書ヲ作リ左ノ事項其他一切ノ訴訟手續ヲ記載ス可シ第二、被告人ノ訊問及ヒ其供述」第六、
訊問ニ答フル被告ノ供述○最終ノ辯論ノ爲メニスル被告ノ供述

辯論ノ順序及ヒ被告人ナシテ最終ニ供述セシメタルコト(刑事訴訟法第二百八條第二號、第六號)
檢事、被告人及ヒ辯護人ハ逃ヒニ辯論ヲ爲スコトヲ得但辯論ノ最終ニハ被告人又ハ辯護人ナシテ供述セシム可シ(刑事訴訟
法第二百二十條第三項)

第一審 鳥取地方裁判所米子支部 第二審 大阪控訴院
被告人 和田源三六 辯護人 中島松次郎

右詐欺取財被告事件ニ付明治三十七年五月十六日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ヲ不法トシ被
告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ
上告趣意ハ原判決ハ上告人ノ行爲ヲ以テ松坂兼三郎ト共謀ナリトシ「源三六ハ其場ニ於テ百七八
十圓ノ紙幣ヲ取出シ自分ハ之ヲ賭シテ勝負ヲ爲サント思フモ金錢ヲ所持セサルモノハ相手ニ爲シ
難シトテ既ニ其金錢ヲ懷中セントスルカ如キ體ヲ爲シタルヨリ」云々ト判示セラレタレトモ(判
決後段證據ノ説明中)如斯行爲アリタルヲ證スヘキ證據物件毫モ之アルコト無シ抑モ證據ノ取捨
事實ノ認定ハ裁判官ノ權内ニアルコト勿論ナレトモ此ノ如キ毫末ノ證據ナキ事實ヲ架空ニ構造シ
其事實ヲ基本トシテ共謀犯罪アリタルコトヲ認定シタルハ越權不法ノ判決ニシテ結局事實理由ノ
説明ニ不備アル不法ノ判決ナリト思料スト云フニ在レトモ○原判文ヲ查スルニ原院ハ松坂兼三郎
ノ豫審調書ニ源三六カ前記趣旨ノ陳述及舉動ヲ爲シタル旨ノ供述記載アルヲ證據ト爲シ其事實ヲ
認定シタルコト判明ナレハ本論旨ハ其謂ハレナシ

辯護人中島松次郎上告趣意辯明書第二點ハ刑事訴訟法第二百二十條第三項ニ依レハ辯論ノ最終ニ
ハ被告人又ハ辯護人ヲシテ供述セシメサルヘカラサルコト明白ナリ此點ニ付キ原審公判始末書ヲ

判決要旨

查閱スルニ裁判長ハ被告人ニ最終ノ供述ヲ爲サシメ云々トノミ記載シ被告人カ辯論ノ最終ニ如何
ナル供述ヲ爲シタルヤ之ヲ記載セス然ルニ同法第二百八條ニ依レハ公判始末書ニハ被告人ノ供述
ヲ記載スヘキモノナルカ故ニ被告人カ最終ニ爲シタル供述ノ内容ヲ記載セサル公判始末書ハ即チ
違法ナリト云ハサルヘカラス既ニ原審公判始末書ニ此違法アル以上ハ原判決ハ如何ナル最終ノ供
述ニ基キ爲サレタルヤ知ルニ由ナキヲ以テ到底破毀ヲ免カレサルモノトスト云フニ在レトモ○刑
事訴訟法第二百八條第二號ニ所謂被告人ノ供述トハ裁判長ノ訊問ニ對シテ爲シタル被告ノ供述ヲ
指示シタルモノニシテ同法第二百二十條第三項ニ於ケル辯論ニ關スル最終ノ供述ヲ包含セサルコ
トハ同條號ニ「被告人ノ訊問及其供述」トアルニ依テ明カナリ而シテ右最終ノ供述ニ付テハ同法
第二百八條第六號ニ「被告人ヲシテ最終ニ供述セシメタルコト」トアルノミニシテ其供述ノ内容
ヲ記載スヘキコトヲ命シタル文旨ナケレハ原院公判始末書ニ被告カ爲シタル最終ノ供述ノ内容ヲ
記載セサルモ違法ニアラサルヲ以テ本論旨ハ上告ノ理由ナシ

●家資分散ノ際ニ於ケル財産藏匿竝附帶私訴事件 明治三十七年(レ)第一二八四號(棄却)
明治三十七年七月四日判決(棄却)

一家資分散ノ狀況ニ在ル者トハ被告カ強制執行ヲ受ケ債權ノ
辨濟ヲ爲スコト能ハサル事實アル者ヲ云フ

家資分散ノ狀態

一、差押フヘキ財産ナキカ爲メ執行處分ヲ遂行スルコト能ハサ
リシ場合ト雖モ尙ホ強制執行ニ依リ債權ノ辨濟ヲ爲スコト
能ハサリシモノニ該當ス

三六〇

(參照) 民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ債務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者ニ對シテハ管轄裁判所ハ職權ニ因リ又ハ申立ニ因
リ決定ヲ以テ家資分散者タルノ宣告ヲ爲スヘシ(家資分散法第一條第一項)

第一審 名古屋地方裁判所

第二審 名古屋控訴院

公訴私訴上告人 石田 智太郎
外一名

私訴被上告人 丸頭市左衛門

右家資分散ノ際財産ヲ藏匿シタル被告事件並ニ附帶私訴ニ付明治三十七年五月十三日名古屋控訴
院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ依テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ
履行シ判決スルコト左ノ如シ

上告趣意書第一ハ凡ソ貸借ノ對照上資産ハ債務ノ全部ヲ完済スルニ足ラサルモ債權者ニシテ終局
ニ至ル間或ハ債權ヲ拋棄シ或ハ辨濟期日ヲ猶豫スルモノアルカ如キハ普通アリ得ヘキ事態ニシテ
其貸借對照上ノ無資力ハ決シテ強制執行ノ處分ニ據レル無資力ニアラス故ニ被告智太郎ハ借方カ
貸方ニ超過シ爲メニ債務ヲ辨濟スル能ハサルニ至ル事數理上明確ナルモ被告智太郎ヲ目シテ無資

力者ナリトスルハ格別未タ以テ家資分散ノ状態ニアルモノト云フ事ヲ得ス詳言スレハ被告智太郎
ニ對スル執行處分ヲナシ其財産ヲ擧ケ之ヲ換價シ債權ニ分配シ結果被告智太郎カ其債務ヲ辨濟ス
ルコト能ハサル事カ事實上ニ於テ確的ニ成立シタル場合ニ於テ茲ニ初メテ家資分散ノ状態ニアル
モノト謂フコトヲ得ヘキナリ本件事實ノ如キハ被告智太郎債務ヲ償却スルニ足ラサル資産ナル事
ハ數理上明確ナルニモセヨ其結果カ果シテ實現スルヤ否ヤ未必ニ屬スルヲ以テ無資力ナル被告智
太郎カ財産ヲ藏匿ノ如キ形狀アルモ未タ債權者ニ確定的ニ損害ヲ被ラシメタルモノト謂フコトヲ
得ス單ニ此形狀ヲ爲スモノ、如キ取消シ得ヘキ法律行為ヲナシタルニ過キサルモノナラント云
ヒ(第二ハ被告智太郎ハ強制執行ノ結果債務ヲ辨濟スルコト能ハサルニ至リタル事蹟毫モナキヲ
以テ從テ被告甚右衛門ノ動作ハ刑法上犯罪ハ成立セサルモノトス要スルニ本案被告事件ハ數理的
被告智太郎カ無資力ノ状態ニ陥リタル事實ノ發顯シタル當時ニ於テ有體動産ヲ賣渡シタルモノニ
シテ未タ刑法三百八十八條ノ處分條件ヲ具備セサルニ原判決ハ被告カ無資力ニ陥リタルモノトシ
適用處分シタルハ擬律ノ錯誤アル失當ナランカト思料スト云フニ在リ○依テ審按スルニ家資分散
法第一條ニ「民事訴訟法ノ強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スル資力ナキ債務者云々」トアリテ刑
法第三百八十八條ノ犯罪構成ノ要件タル家資分散ノ狀況ニ在ル者トスルニハ被告人カ強制執行處
分ヲ受ケタルノ事實アルヲ要シ單ニ貸借ノ對照上無資力ナルヲ以テ足レリトセサルコトハ所論ノ
如シ然レトモ差押ハ強制執行處分ナルヲ以テ既ニ差押ニ着手シタルモ差押フヘキ財産ナク從テ差
押ヲ遂行スル能ハサルトキハ前記法條ノ所謂強制執行處分ニ因リ義務ヲ辨濟スルノ資力ナキモノ

家資分散ノ状態

三六一

トス而シテ原判決ニハ一市左衛門ハ強制執行ノ爲メ執達吏ヲシテ智太郎ノ動産物ヲ差押ヘシメン
トシタリ又一市左衛門ハ差押ノ目的ヲ達スルヲ得ザリシモノナリトアリテ債權者市左衛門ハ
執達吏ヲシテ差押ニ着手セシメタルモ被告カ甚右衛門ト虚偽ノ賣買ヲ爲メ差押ヲ遂行ス
ル能ハサリシ事實明白ニシテ無資力ノ狀況在ルコト勿論強制執行ナシト謂フヲ得ス然ラハ本件ニ
付テハ強制執行處分及無資力ノ二要件ヲ具備スルヲ以テ被告ハ家資分散ノ狀況ニ在ル者ニシテ原
院カ刑法第三百八十八條ニ依リ處斷シタルハ相當ナリトス

三三

●酒造税法違反及官職執行抗拒事件 明治三十七年(レ)第一三〇二號 (棄却)
明治三十七年七月五日宣告

判決要旨

一、刑法第三百二十九條ニ所謂暴行ナル意義ハ必スシモ官吏ノ身
體ニ對シ直接ニ之ヲ加フルコトヲ要セス苟クモ官吏カ職務
ヲ執行スルニ當リ暴行ヲ以テ之ニ抗拒シタル時ハ直接タル
ト間接タルトニ論ナク同條ノ犯罪ヲ構成ス

(參照) 官吏其職務ヲ以テ法律規則ヲ執行シ又ハ行政司法官署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行脅迫ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタル
者ハ四月以上四年以下ノ重懲罰ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス暴行脅迫ヲ以テ其官吏ノ爲ス可カラサル事件ヲ

行ハシメタル者亦同シ(刑第三百二十九條)

第一審 山口地方裁判所

第二審 廣島控訴院

被告人 杉山甚右衛門
外一名

右甚右衛門ノ酒造税法違反及兩名ノ官職執行抗拒事件ニ付明治三十七年五月二十一日廣島控訴院
カ言渡シタル判決ヲ不法トシ各被告ハ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行
シ判決スル左ノ如シ

被告甚右衛門上告趣意書第一點ハ官吏ノ官職執行抗拒罪ノ成立ニハ暴行若クハ脅迫ノ行爲アルコ
トヲ要スルハ刑法第三百二十九條ノ明示スル所ナリ第二審判決書ヲ閱スルニ(徳利ノ内容物ニ付訊
問スル際同稅務屬ノ職務執行ヲ妨害センコトヲ通謀シ被告甚右衛門ハ其内容物ノ氣ヲ嗅クカ如キ
體ニ裝ヒ寺岡稅務屬ニ近接シ卒然雙手ヲ以テ同稅務屬ノ所持セル徳利ヲ緊握シテ之ヲ奪取ラント
スルヤ被告甚藏ハ其機ニ乘シ傍ヨリ突進シ遂ニ該徳利ヲ奪取リ直チニ之ヲ其近傍ニ在リシ石ニ擲
チテ破碎シ以テ右稅務屬ノ職務執行ヲ抗拒シタルモノナリ)トアリテ其職務執行ニ抗拒シタルコ
トハ明記シアルモ暴行若クハ脅迫アリシコトノ明記ナシ故ニ第二審裁判官ハ上告人等ノ行爲ヲ暴
行ト認メシモノナルヤ脅迫ト認メシモノナルヤ又暴行ニモ脅迫ニモアラサルモ妨害ノ行爲ト認メ
シモノナルヤ之ヲ知ルコト能ハス之レ犯罪ニ必要ノ事實ノ判定ヲ明示セサルモノナリ如斯法律適
用ノ基礎タルヘキ必要ノ事實認定ヲ示サ、ル爲メ第二審裁判官ノ適用シタル法律ノ適否ヲ知ル事
能ハス之レ全ク裁判ニ理由ヲ付セサルニ坐セサルヘカラス或ハ云ハン暴行若シハ脅迫アリシコ

家資分散ノ狀態

三六三

トノ明文ナキモ德利ヲ奪取り之ヲ破碎シタル事實ヲ揭擧シアレハ之ヲ以テ足レリト然レトモ同一ノ言語動作ト雖モ其場所其位置其境遇其時ノ模様等ニ依リ暴行脅迫トナル場合ト否ラサル場合アルモノニシテ一定ノ言語動作ハ必ス毎ニ暴行若シクハ脅迫トナルモノニアラサレハ或ル言語動作ノミヲ列記スルモ其暴行脅迫タルト否トヲ知ルコト能ハス故ニ暴行脅迫カ必要ノ事實ナルトキハ或ル言語動作ニ對シ其暴行若シクハ脅迫タルト否トヲ判定明示セサルヘカラサルナリ況ンヤ判文ニ示ス事實ノ如キハ第二點ニ於テ論スルカ如ク暴行トモ脅迫トモ言フヘカラサルニ於テオヤ要スルニ第二審判決ハ刑事訴訟法第二百六十九條第九ニ該當スル違法ノ裁判ト思料スト云ヒ」其二點ハ第二審裁判所ハ上告人ノ行為ヲ暴行若クハ脅迫ト認メタルモノナルヤ否ヤ其明示ナキヲ以テ之ヲ知ルコト能ハズト雖モ之ヲ暴行脅迫ト認メサルモノトセハ刑法第三百二十九條ヲ適用シタルハ擬律ノ錯誤ナルコト喋々ノ論ヲ要セス又暴行脅迫ト認メシモノトセハ是レ不當ニ法則ヲ適用シタルモノナリ抑モ官吏ノ職務執行抗拒ニ要スル暴行トハ官吏ヲ毆打制縛其他ノ方法ニ依リ其身體ニ苦痛ヲ與ヘ自由ヲ奪フノ行為ニシテ脅迫トハ直接身體ニ苦痛ヲ與ヘス又自由ヲ奪ハスト雖モ言語舉動ニ依リ官吏ニ恐怖心ヲ起サシメ其恐怖心ヲ索縛トシテ身體ノ自由ヲ奪フヲ云フモノナルコト論ヲ駁テサル所ナリ第二審判決書ニ示ス事實ハ稅務屬カ酒造稅法違犯事件取調ノ際濁酒入德利ヲ證據品トシテ差押ノ必要ヲ感シ訊問スル際上告人等カ其職務執行ヲ妨害センコトヲ共謀シ稅務屬ノ所持スル德利ヲ奪取り之レヲ破碎シタルト云フニアリテ官吏ニ苦痛ヲ與ヘ若クハ身體ノ自由ヲ奪ヒ又ハ恐怖心ヲ起サシメタル事實アルコトナシ其德利ヲ奪ヒ取りテ之ヲ破碎セシハ證據差押ヲ妨

害シタリトハ云ヒ得ヘキモ官吏ノ身體ニ對スル暴行心神ニ對スル脅迫ニハアラサルナリ妨害ノ行為ハアリトスルモ之ヲ以テ直チニ暴行脅迫トハ云フコト能ハス見ヨ官吏ノ職務執行ニ際シ侮辱スルモ妨害ナラスヤ官吏職務執行ノ爲メ通行スヘキ道路橋梁ヲ破壊スルモ妨害ニ非スヤ犯人カ官吏ニ捕ヘラレ振放シテ逃走スルモ妨害ナラスヤ然レトモ之等ハ他ノ犯罪ヲ組成スルコトハアリトスルモ暴行脅迫ヲ以テ官吏ノ職務執行ヲ抗拒シタルモノト云フコト能ハサルハ何ソヤ是レ官吏ノ身體ニ暴行ヲ加ヘ又心神ニ脅迫ヲ加ヘタルモノニ非サレハナリ若シ證據品トシテ差押ヘン爲メ官吏ノ所持セシ物品ヲ單純ニ奪取り破碎セシヲ暴行脅迫ト云ヒ得ヘシトセハ他人ノ所持セシ物品ヲ單純ニ奪取りテ逃走セシモノモ暴行若クハ脅迫アリタルモノトシテ強盜罪ニ處セサルヘカラサルニ至ルヘシ豈夫レ如斯理アラシヤ即チ知ル官吏ノ身體ニ苦痛ヲ與ヘス自由ヲ失ハシメス若クハ恐怖心ヲ起サシメサル行為ハ之ヲ暴行脅迫ト云フコト能ハサルコトヲ故ニ第二審判決ハ擬律ノ錯誤ニ非サレハ不當ニ法則ヲ適用シタル違法ノ裁判ト思料スト云フニ在リ○因テ案スルニ刑法第百二十九條ニ所謂暴行ハ必シモ官吏ノ身體ニ對シ直接ニ之ヲ加フルコトヲ要セス官吏其職務ヲ執行スルニ當リ苟モ暴行ヲ以テ其官吏ニ抗拒シタルトキハ直接タルト間接タルトヲ問ハス官吏ノ職務執行妨害罪ヲ構成ス故ニ原判決ニ認ムル如ク被告兩名共謀ノ上寺岡稅務屬ノ職務執行ヲ妨害スル爲メ同人カ其職務上被告方ノ德利ヲ取上ケ其内容物ニ付訊問スル際腕力ヲ以テ之ヲ奪取り剩ヘ之ヲ破碎シテ其職務執行ヲ妨害シタル以上ハ暴行ヲ以テ其職務執行ヲ妨害シタルモノナルヲ以テ其罪ヲ構成スルコト論ヲ俟タヌ本論旨ハ何レモ其理由ナシ

●官文書偽造行使 官文書毀棄事件 明治三十七年(れ)第一二四四號 官印盜用詐欺取財 明治三十七年七月一日判決 (棄却)

判決要旨

一均シク輕懲役ニ該ル重罪ト雖モ之レニ當行スヘキ刑期ニ長短ノ別アルヲ以テ數個ノ官文書偽造行使罪ノ俱發シタル場合ニ其ノ一罪ヲ以テ最モ長キ刑ヲ當行スヘキ最モ重キ罪トシテ處斷スルハ違法ニアラス

第一審 金澤地方裁判所 第二審 大阪控訴院

被告人 唐木建太郎 辯護人 高野金重

右官文書偽造行使官印盜用詐欺取財及官文書毀棄被告事件ニ付明治三十七年五月十七日大阪控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ式ヲ履行シ判決スル左ノ如シ

被告ノ上告擴張辯明書第一項ハ要スルニ本件ニ關シ原院ハ三個ノ官文書偽造罪ヲ認メ之ヲ處罰スルニ當リ單ニ「重キ拂渡證書偽造行使ノ所爲ニ依リ云々」ト判決セシハ誤リナリトス刑法第百條第一項ニハ未判決ノ重罪ニ併發シタル時ハ重キ一罪ニ依リ處斷スト規定シ其第二項ニ於テ重罪俱發シタルトキハ其刑期ノ長キモノヲ以テ重シトシ同刑期ナルトキハ定役アルモノヲ以テ

七

重シトナスト規定シ同第三項ニ於テ輕罪ノ俱發シタル時ハ所犯情狀最モ重キモノニ從テ處斷スト規定セリ而シテ右三箇ノ文書偽造罪ノ刑ハ共ニ輕懲役ニシテ其間輕重ナキニ拘ラス原院カ拂渡證書偽造罪ヲ以テ重シト爲シタルハ不當ナリ或ハ之ヲ所犯情狀最モ重シトシテ罰シタルモノトセンカ法文ニ依ラサル斷定ト云ハサルヘカラス何トナレハ同條第二項ニハ右ノ如キ法文ナケレハナリ若シ同條第三項ヲ援用シタルモノトセハ益々不當ノ裁判ト云ハサルヘカラス何トナレハ刑法ノ解釋ハ比附援引ヲ許サ、ルヲ以テナリ又假リニ一步ヲ讓リ同條第三項ハ第二項ノ場合ニモ適用シ得ヘシトスルモ之ヲ適用スルニ付テハ其旨ヲ明示セサルヘカラス然ルニ原判決ハ何等ノ事由ヲ示サ、ルヲ以テ何レノ點ヨリ觀ルモ原判決ハ失當タルヲ免レスト云フニ在リ○然レトモ均シク輕懲役ノ刑ニ該ルヘキ重罪ト雖モ其間輕重ノ差アリ從テ之ニ當行スヘキ刑期ニ長短ノ別アルハ當然ナルヲ以テ原院カ拂渡證書偽造行使ノ所爲ヲ以テ最モ長キ刑ヲ當行スヘキ最モ重キ罪トシテ之ニ從ヒ處斷シタルハ適法ニシテ上告論旨ハ理由ナシ

●封印破棄事件 明治三十七年(れ)第一二三四號 (棄却) 明治三十七年六月三十日宣告

判決要旨

一刑法第百七十四條ノ封印破棄罪ハ封印ヲ施ス職務權限ヲ有スル人カ官署ノ命令ニ基キテ施シタル封印ヲ破棄スルニ因

封印破棄罪ノ成立○執達吏代理ノ封印

リテ成立ス而シテ其封印ヲ施シタル者ノ官吏タルト否トハ
犯罪ノ構成ニ何等ノ影響ナシ

一、執達吏代理ハ官吏ニ非スト雖モ執達吏ニ代リ正當ノ權限ヲ
以テ執行力アル判決正本ニ基キ債務者ノ動産ヲ差押ヘテ之
ニ施シタル封印ハ刑法第百七十四條第一項ニ所謂官署ノ處
分ニ因リテ施シタルモノニ該當ス

(參照) 官署ノ處分ニ因リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破毀シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處ス
(刑法第百七十四條第一項)

第一審 東京地方裁判所 第二審 東京控訴院

被告人 松坂 ッ子

辯護人 高木益太郎

右封印破毀被告事件ニ付明治三十七年五月三十一日東京控訴院ニ於テ言渡シタル判決ニ對シ被告
ヨリ上告ヲ爲シタリ因テ刑事訴訟法第二百八十三條ノ定式ヲ履行シ判決スルコト左ノ如シ
辯護人高木益太郎辯明書ノ一ハ原院判決ハ被告カ執達吏萩原節愛代理坂梨豐光カ施シタル封印ヲ
破毀シタル所爲ニ對シ刑法第百七十四條ニ問擬セリ依テ刑法第百七十四條第一項ヲ按スルニ「官
署ノ處分ニ依リ特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破毀シタル者ハ云々トアリ」テ本罪

成立ノ前提要件トシテ官署ノ處分即チ法律命令ヲ執行スル官署ヲ組成スル所ノ官吏タル身分ヲ有
スルモノカ法律命令ニ基キ施シタル封印ナルコトヲ要ス換言スレハ封印ヲ施シタル主體ハ官吏ク
ルコトヲ要スルヤ言フ俟ダス翻テ執達吏代理ハ官吏タルヤ否此問題ニ付キ御院ノ判例ニ徵スルニ
明治三十七年(レ)第四〇二號執達吏代理財產差押抗拒ニ關スル件ニ付キ同刑事部ハ判決シテ曰ク
執達吏ハ云々執達吏規則中ニ官吏ニ準スル旨ノ特別規定アルヲ以テ執達吏カ現行法規上官吏タル
ノ資格ヲ有スルハ毫モ疑ナシト雖モ執達吏代理ナル者ハ執達吏カ自己ノ責任ヲ以テ之ヲ選任シ之
ニ代リテ其職務ノ執行ヲ爲サシムルコトヲ得ルニアリ我官制上高等官判任官ノ資格ナキハ勿論執
達吏ノ如ク特ニ官吏ニ準スルモノニ非サルヲ以テ其司掌スル所ノ事務ハ官吏タル執達吏ノ管掌ス
ヘキ事務ナルモ其身分ニ於テハ官吏トシテ取扱フヘキモノニアラサルヤ明ナリ何トナレハ或人ノ
官吏タルカ否ヤハ一ニ現行法規上ニ於テ官吏タルノ身分ヲ享有スルヤ否ヤニ依リテ定マルヘキモ
ノニシテ其人ノ管掌スル事務其モノ、性質ニ依リテ定マルヘキモノニアラス云々」ト執達吏代理
カ官吏ニアラサルコトヲ宣言セリ果シテ然リトセハ本件公訴事實ハ前述ノ如ク執達吏代理ノ施シ
タル封印ヲ破毀シタリト云フニアリテ其封印ヲ施シタル主體ハ官吏ニアラスシカ執達吏ト雇備關
係ニ依リテ職務ヲ行フ一私人ニ過キサレハ其者ノ爲シタル封印ハ執行力アル判決正本ニ基キテ施
シタリトスルモ之ヲ以テ刑法第百七十四條第一項ノ所謂官署ノ處分ニ依リ施シタル封印ト云フヲ
得ス要スルニ原院ニ於テ認メタル事實ハ罪トナルヘキ事實ニアラサレハ原院判決ハ擬律ノ錯誤ア
ルコトヲ免カレスト云フニアリ○依テ審按スルニ刑法第百七十四條第一項ニ「官署ノ處分ニ依リ

封印破毀罪ノ成立○執達吏代理ノ封印

特別ニ家屋倉庫其他ノ物件ニ施シタル封印ヲ破棄シタル者ハ云々トアルヲ以テ同條ニ規定スル封印破棄罪ノ構成要件トシテハ破棄ノ目的タル封印カ官署ノ命令ニ基ツキテ施サレタルモノナルコト及ヒ其封印ハ之ヲ施スノ職務權限ヲ有スル人カ之ヲ施シタルコトヲ必要トシ其封印カ官署ノ命令ニ基ツカサルトキ又ハ之ヲ施スノ職務權限ヲ有セサル者カ之ヲ施シタルモノナルトキハ假令之ヲ破棄スルモ爲メニ封印破棄罪ヲ構成スルコトナカルヘキハ勿論ナリト雖モ尙モ此二个ノ要件カ具備スル以上ハ封印破棄罪ハ完全ニ成立スヘク其封印ヲ施シタル者ノ官吏タルト否トハ毫モ本罪ノ成立ニ影響ヲ及ホスコトナシ何トナレハ刑法第七十四條ハ犯罪成立ノ要件トシテ封印ヲ施シタル人ニ官吏ノ資格アルコトヲ明カニ要求セサルヲミナラス官吏ノ資格ナキ者カ封印ヲ施シタル場合ト雖モ其封印ニシテ苟クモ官署ノ命令ニ基ツキ適法ニ施シタルモノナルニ於テハ刑法第七十四條ニ所謂ル官署ノ處分ニ依リテ施シタル封印タルコトヲ失ハサルハ法文上明確ニシテ一點ノ疑ヲ容レサル所ニシテ法律ニ謂フ所ノ「官署ノ處分ニ依リテ施シタル封印」テウ觀念ハ必然的ニ「官吏ノ施シタル封印」ナル觀念ヲ其中ニ含蓄スルモノニアラス從テ上告論旨ニ云フ所ノ如ク法律命令ヲ執行スル者ニ官吏ノ資格アルコトヲ明カニ要求スル所ノ官吏抗拒罪ニ關スル刑法第三百二十九條ノ場合ト日ヲ同フシテ論スルコトヲ得サルハ敢テ辯ヲ俟タサル所ナルヲ以テナリ而シテ原院ノ認メタル事實ニ依レハ本件ノ封印ハ執達吏代理坂梨豐光ナル者カ東京地方裁判所ノ執行カアル判決正本ニ基キ動産ヲ差押ヘテ之ニ施シタルモノニシテ之ヲ施シタル執達吏代理ニ官吏ノ資格ナキハ所論ノ如クナルモ執達吏代理カ執達吏ニ代リテ差押其他執達吏ノ取扱ヲヘキ一切ノ手

郡會議員當選效力ニ關スル訴 明治三十六年第六百十八號 明治三十七年七月八日判決 (請求不立)

判決要旨

一、菊池逢吉チ「キクチナホーキチ」菊池逢吉「キクイホーキチ」きくちほーきち「キクチナホーキチ」ト記シタル諸種ノ投票ト雖モ他ニ類似ノ氏名ナク全ク菊池逢吉チ指スモノナルコトヲ認ムルニ足ルトキハ此等ノ投票ヲ以テ有效トナスニ妨クルコトナシ

原告 佐月 元 殿 外二名

福岡縣參事會 福岡縣知事

被告 河 島 醇

右當事者間ニ於ケル郡會議員當選效力ニ關スル訴審理ヲ遂クル處

原告陳述ノ要旨ハ明治三十六年十二月二日福岡縣參事會ニ於テ菊池逢吉ノ得票ニ加算シタル投票中其ノ一「キクチナホーキチ」ハ「ナ」ノ餘字アルヲ認メタルニ拘ハラス之レヲ有效投票トセシハ郡制第十六條第五號ヲ無視シタルモノト謂ハサルヲ得ス何トナレハ「ナ」ノ字ハ被選舉人氏名

氏名ノ記入ヲ假名ヲ以テシタル投票ノ效力

ニ何等ノ關係ナキ贅字ニシテ所謂他事ヲ記入シタルモノナルコト明カナリ若シ之ヲシモ他事記入ト謂フコトヲ得ストセハ殆ト同號ヲ設ケタル必要ナキカ如シ其ノ二「キクイホーキチ」ハ「チ」ノ字ヲ「イ」ト誤記シタルモノニシテ菊池逢吉ノ得票タルコトヲ認知スルニ足ルト謂フモ「チ」ト「イ」トハ其字形ノ異ナルノミナラス其ノ意義ヨリスルモ類似セサルコト太ダシキニアラスヤ元來認知スルニ足ルトハ其理由甚タ薄弱ナリ單ニ投票面ヲ讀下スルノミニテ何人タルヲ認ムルノ力ナク讀下スル者カ此ハ何人ニ當テタルモノナリトノ見當ヲ附ケ讀下シ自己ノ判斷力ヲ加ヘ以テ辛ク其人ヲ認知スルカ如キ投票ハ無効ノ投票ト謂ハサルヘカラス郡制第十六條第三號ニハ被選舉人ノ何人タルヲ認知シ難キモノトアラスシテ被選舉人ノ何人タルヲ認知シ難キモノトアリ確認ト認知トハ其意義ノ點ニ於テ著シキ差違アリ確認トハ此投票ハ誰ヲ記シタルニ相違ナシト一讀シテ直ニ認メ得ルヲ謂フナリ其ノ三ハ被選舉人氏名ノ下ニ「ハ」ノ汚點アルニ過キス以テ他事ヲ記入シタルモノト謂フヲ得スト謂フモ其ノ外ニ「冢」ノ誤字モアリ元來汚點トハ過失ニ出テタル所爲ニシテ墨汁等ノ落下シ附着シタルヲ謂フナリ然ルニ文字ヲ書キ了リテ墨汁等ノ落下シ殊ニ「ハ」ノ字ノ形ヲ偶然ナスヘキ理ナシ又一步ヲ讓リ過失ヨリ起因シタリトスルモ選舉用紙ノ欄内而カモ氏名ノ下ニ字配リモ適當ノ場所ニ於テ「ハ」ノ字畫ヲ完備シタル上ハ郡制第十六條第五號ニ該當スルモノニシテ決シテ有怨スヘキモノニアラサルナリ其ノ四「さくちほーさち」ハ唯被選舉人氏名ノ欄外ニ記載シタルニ止ルト謂フモ決シテ如此モノニアラス果シテ右ノ如ク明記シタル投票トセハ何ソ竹海村選舉會ニ於テ何人タルヲ確認シ難キ無効ノ投票トナスノ理アラシヤ該投票ハ字畫不明

ニシテ殆ント文字トシテ認メ難キ不明ノ投票ナリ其五「キクチオーキチ」ノ「オ」ハ「ホ」ノ誤記ニシテ他ニ類似ノ投票ナキヲ以テ多數ノ得票者タル菊池逢吉ヲ指シタルモノト認ムルヲ得ト云フハ原告ノ解スル能ハサル所ナリ何トナレハ此論法ヨリスレハ若シ菊池逢吉カ少數得票者ナリトセハ同人ヲ指シタルモノト認ムルヲ得スト謂ハサルヘカラス果シテ然ラハ誤記アル投票ニシテ多數ノ得票者ヲ指シタルモノハ有效ト成リ少數ノ得票者ヲ指シタルモノハ無効ト成ルノ結果ヲ生スヘク其ノ誤記アル投票ハ他ノ投票ノ多少ニヨリテ效力ノ有無ヲ判決セラレ投票其物ニ就キ之ヲ判定スルノ要ナシト云ハサルヘカラス豈ニ如此奇怪ナル道理アラシヤ一字ノ誤記ナリト雖(假名文字ハ殊ニ注意セサルヲ得ス)法律ノ明文ニ牴觸スルモノハ無効ナリ何ソ其ノ誤字ノ多少ト他ノ投票ノ多少トニ依リ其效力ヲ判定スヘキノ理由アラシヤ以上陳述ノ次第ナレハ被告カ菊池逢吉ヲ以テ有效投票ノ最多數ヲ得タル者ト認メ江崎宗信ノ當選ヲ無効ト裁決セシハ其ノ當ヲ得タルモノニアラサルニ依リ之ヲ取消サレタシト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ本件福岡縣山門郡竹海村郡會議員選舉會ニ於テ無効ト決定シタル投票ノ内係争ニ屬スル投票ハ五票ニシテ其ノ一ハ「キクチナホーキチ」ト記載シ「ナ」ノ愆字アリ且終尾ノ「チ」ノ字カ被選舉人氏名ノ欄外ニ及ヒタルモノ其ノ二ハ「キクイホーキチ」トアリ「チ」ノ字ヲ「イ」ト誤記シタルモノニシテ共ニ菊池逢吉ノ得票ナルコトヲ確認スルニ足ル其ノ三ハ被選舉人氏名ノ下ニ汚點アルニ過キス以テ他事ヲ記入シタルモノト謂フヲ得ス其ノ四ハ「さくちほーさち」トアリ唯被選舉人氏名ノ欄外ニ記載シタルニ止マリ菊池逢吉ヲ指シタルハ疑ヲ容ル、ノ餘地ナシ其ノ

氏名ノ記入ヲ假名ヲ以テシタル投票ノ效力

五ハ「キクチオキチ」トアリ他ニ類似ノ得票者ナキヲ以テ見レハ「オ」ハ「ホ」ノ誤字ニシテ
本件選舉ニ於テ多數ノ得票者タル菊池逢吉ヲ指シタルモノト確認スルヲ得況ンヤ逢ハ逢ハ音稱ヲ
有スルニ於テハ毫モ疑ノ存スル所ナシ故ニ此五票ヲ菊池逢吉ノ得票數ニ加ヘ計算スルトキハ菊池
逢吉ノ得票五十六票江崎宗信ノ得票五十四票河野世亮ノ得票一票トナルニヨリ有效投票ノ多數數
ヲ得タル菊池逢吉ヲ以テ當選者トナスヘキモノナルヲ以テ江崎宗信ノ當選ヲ無効ト裁決シタルモ
ノナレハ被告ノ裁決ハ正當ナリト云フニ在リ

依テ本件裁判ノ理由ヲ説明スルコト左ノ如シ
本件ハ「キクチオキチ」ナル投票及「菊池逢吉」ナル投票ハ郡制第十六條第五號ニ該當ス
ルモノナルヤ否及「キクイホキチ」ニ「きくちほーきち」キクチオキチナル投票ハ郡制第十六
條三號ニ該當スルモノナルヤ否ニ在リ依テ該投票ヲ檢シ按スルニ前二票ノ缺點ハ全ク過誤ニ出テ
タルモノニシテ故ラニ爲シタルモノト認ムルヲ得サルニ依リ他事配入ト爲シ難ク又他ノ三票ハ完
全ノモノニアラサルモ被選舉人中菊池逢吉ナル者アリテ他ニ類似ノ氏名ヲ稱スル者之ナキ事實ヨ
リ觀レハ菊池逢吉ヲ指シタルモノト認ムルニ足レリ然レハ該投票ハ有效ノモノニシテ隨テ菊池逢
吉ハ多數數ノ得票者ナレハ被告ニ於テ之ヲ當選者ト決定セシハ正當ナリ
右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ

原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

●郡會議員當選效力ニ關スル裁決取消請求ノ訴 明治三十七年第七百二十二號
明治卅七年七月八日第一號部宣告 (請求不立)

判決要旨

一 町村書記ハ町村長ノ指揮ニ從ヒ何時ニテモ選舉事務ニ關與
スヘキモノナルヲ以テ假令選舉ノ當時役場事務分擔及服務
規定ノ本ニ全ク選舉ニ關係ナキ事務ヲ分掌シ居タリトスル
モ職務ノ性質上郡制第六條第八項ノ所謂選舉事務ニ關係ス
ル吏員ニ該當ス

秋田縣上郷村書
記 金子 藤 平

秋田縣選舉會
秋田縣知事 藤 一 郎

右當事者間ニ於ケル郡會議員當選效力ニ關スル裁決取消請求ノ訴訟其申請ニ由リ書面ニ就キ審理
ヲ遂クル處

原告請求ノ要旨ハ原告ハ明治三十六年十月十日由利郡上郷村執行ノ郡會議員選舉會ニ於テ當選セ
シニ由利郡參事會ハ他人ノ異議ニ因リ原告ハ上郷村書記ナレハ村長ニ屬シ其指揮ニ依リ何時モ選
舉事務ニ關係セサル可ラサルモノナルヲ以テ職務ノ性質上選舉ノ際他ノ事務ヲ分掌スルモ選舉事
務ニ關係ナキ吏員ト云フヲ得ストノ理由ヲ以テ當選ヲ無効ナリト決定アリシニ由リ被告縣參事會

ニ其取消ヲ訴願セシニ被告モ亦同様ノ理由ヲ以テ該決定ハ取消スヘキ限ニアラスト裁決シタレトモ町村制第七十二條ニ依リ規定セル所ノ上郷村役場處務規定及同村役場事務分擔及服務規定ニ依リ原告ハ稅務掛ニ屬シ出納及戶籍事務ヲ分掌シ選舉事務ニハ毫モ關係ナキモノナリ然ルニ被告ハ右ノ理由ヲ以テ裁決シタレトモ郡制第六條第八項ノ選舉事務ニ關係アル吏員トハ現ニ關係スヘキ者而已ヲ指シ他日指揮ニ依リテ關係セサルヲ得サル者ヲモ包含スト云フヲ得ス且郡制ノ選舉事務ニ關係アル吏員ハ其選舉區ニ於テ被選舉權ヲ有セシメサルハ選舉ノ公本ヲ保ツノ外何等ノ理由アルニ非ス然ラハ何ヲ苦ンテ現實選舉事務ニ關係ナキ吏員ヲモ他日指揮ニ依テハ關係セサルヘカラストノ一點ヲ以テ被選舉權ヲ羈束スルノ必要アランヤ依テ被告ノ裁決ハ當ヲ得スト信スルニ因リ由利郡參事會ノ決定及明治三十七年一月十五日附被告ノ裁決ヲ取消シ原告ノ當選ハ有效ナリト判決アリタシト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ本訴ニ關スル事實ハ原告ノ記述ニ異ナルコトナシ而シテ郡制第六條第八項ノ規定ハ獨リ選舉當時ニ於テ現實ニ選舉ヲ擔任掌理スルモノノミニ止ラス苟モ職務ノ性質上選舉事務ニ關係スヘキモノナル以上ハ總テ被選舉權ヲ有セシメス以テ選舉ノ嚴正公平ヲ保持セントスルノ法意ナルハ法文上將タ其立法上明瞭ナリトス而シテ町村書記ハ町村長ノ命令ニ依リ町村ノ如何ナル事務ヲモ掌理セサルヲ得サル職務ナルヲ以テ原告ハ事實選舉以外ノ事務ヲ分擔シタリトスルモ己ニ上郷村書記タル以上ハ之ヲ以テ選舉事務ニ關係ナキ吏員ト云フヲ得サルモノナレハ被告ノ裁決ハ適當ニシテ明治三十三年十二月七日第百八十九號行政裁判所判決ニ徴シ一層確實ナルヲ信ス

ルヲ以テ原告ノ申立相立タスト判決アリタシト云フニ在リ
依テ判決ノ理由ヲ説明スルコト左ノ如シ

原告ハ上郷村書記ニシテ役場處務規定及事務分擔等ノ規定ニ依リ稅務掛ニ屬シ出納及戶籍事務ヲ分擔シ選舉事務ニハ毫モ關係ナキ者ナルニ由利郡參事會及被告カ職務ノ性質上選舉ニ關係ナキ吏員ト謂フヲ得サルモノナレハ郡會議員ノ被選舉權ヲ有セスト爲スハ失當ナリト云フト雖町村長ハ當然選舉事務ヲ處辨スヘキ職務ヲ有スルモノニシテ町村書記ハ之ニ附屬スルモノナレハ縱令平常事務ヲ分掌スルモ町村長ノ指揮ニ從ヒ何時モ選舉事務ニ關係セサルヲ得サルヲ以テ其職務ノ性質上既ニ郡制第六條第八項ニ該當シ選舉事務ニ關係ナキ吏員ト謂フヲ得ス隨テ原告ハ郡會議員ノ被選舉權ヲ有セサルモノナルニ由リ由利郡參事會ノ決定及明治三十七年一月十五日被告ノ爲シタル裁決ハ取消スヘキモノニアラス
右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ
原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

●水害地地租免除不當地地租免除ノ訴明治三十六年第五百二十四號
明治三十七年六月二十二日宣告 (請求不立)

判決要旨

一、水害ノ爲メ田畑ノ免稅ヲ請求セシニハ明治三十四年法中ノ收穫

免稅ノ請求

皆無ナルカ又ハ皆無ト看做スヘキ程度ノ損害ヲ被リタル場
合ニ於テ始メテ其ノ年分ノ租税ニ付キ免稅ノ請求ヲ爲シ得
ルモノニシテ一ケ年數作アル畑地ニシテ其一作ノ皆無ニ歸
シタル場合ノ如キハ此ノ請求ヲ許スヘキモノニアラス

原告兼訴訟
代理人 吉田千賀三

被告 德久並男

右當事者間ニ於ケル水害地租免除願不當處分取消及水害畑地租免除ノ訴審理ヲ遂クル處
原告陳述ノ要旨ハ原告地主等ハ明治三十五年八月十日同九月六七日二回ノ水害ニヨリ收穫皆無ニ
歸シタル畑地ノ租免除處分ヲ撫養稅務署ニ出願セシニ同十一月中同署吏員實地調査ニ出張セラ
レ村長並ニ各村總代立會ヒ一筆毎ニ検査ヲ遂ケ出張地ノ多クハ收穫皆無ナルコトヲ承認セラレタ
リ然ルニ三十六年三月十日該出願地中田若干筆ヲ免除シ畑ハ一筆モ免除セラレザル旨指令アリタ
ルニ依リ原告ハ此意想外ノ處分ヲ怪ミ直チニ其理由ヲ質シタルニ法律第二十七號ハ全年間ノ收穫
皆無ニ對シ免除スヘキ法意ニシテ畑地ノ如キ春秋二毛作ノ地所ハ其一期收穫皆無ナルモ免除スヘ

キモノニアラスト言ハレタリ依テ上級行政廳タル丸龜稅務監督局ニ訴願セシニ被告ハ前ノ説明ニ
反シ畑ノ區別作付ノ種類ニ由テ免否ヲ決セス事實調査ノ結果收穫皆無ト認メサルカ故ニ免租セ
スト前後不揃ノ辯明ヲナシ又監督局ハ此辯明ヲ採リ收穫皆無ノ確證ナキヲ以テ被告ノ處分ハ相當
ナリト裁決シタリ是レ本訴提起ノ止ムヲ得サル事實ナリ而シテ被告處分ノ不當ナル次第ハ第一本
法ハ田畑ニ論ナク地租ヲ生スヘキ重要作物ノ被害ニシテ收穫皆無ニ歸シタルモノハ其年分ノ地租
ヲ免除スルノ趣旨ニシテ年分ノ作物悉ク收穫皆無ナラサレハ免除セサル如キ苛酷ノモノニアラサ
ルハ前例ニヨルモ明カナリ原告出願ノ畑地ノ情況タル水田ト同シク春作ノミニテハ肥料勞費費ヲ
償フニ止リ農家一年ノ經濟ハ全ク秋作ノ豐熟ニ由テ立チ地租ノ負擔モ亦之ニ依ル然ルニ此秋作ニ
シテ收穫皆無ニ歸センカ農民衣食ノ資ナク地租ヲ收ムル代物ナシ本法ハ被害地ノ負擔ヲ減免スル
ノ趣旨ニシテ百年ニ一回起ルヤ否知ルヘカラサル全年ノ收穫皆無ノ時ヲ期シテ規定セシモノニア
ラサルコト勿論ナリ第二前年時々發布セラレシ特別免租法ト本法ト立法ノ精神同一ナルコトハ本
法制定ノ當時ニ於ケル衆議院速記録ヲ見ルモ明カナリ而シテ本村畑地ハ此特別免租ヨリ免租セラ
レシ實例アリ且本法ニヨリ三十三年秋ノ水害地ニ對シ三十四年六月二千八百餘圓ノ免租ヲ受ケタ
リ然レハ本法ハ既ニ本村畑地ニ適用シタル實例アルニ今回ハ何故ニ適用ス可ラサルヤ原告ノ了解
シ能ハサル所ナリ第三收穫ノ皆無ニ就テハ原告ハ訴願ニ際シ充分ニ之ヲ示スヘキ證據即被害物件
ヲ有セシモ被告ハ實地臨檢ノ際其事實ヲ承認シ畑地ハ二毛作ナレハ法律第二十七號ニ適合セスト
明言セシヲ以テ原告ハ舉證ノ要ナシト認メ之ヲ備ヘサリシナリ原告ハ今ヤ口筆ニ述フルノ外手段

免稅ノ請求

ナケレトモ此事實タル縣下一般ニ知悉スル所ニシテ決シテ一官吏ノ能ク隱蔽スヘキニアラス當時
官公吏ノ認メタル證據多々アリテ之ヲ示スニ難カラス以上陳述ノ次第ナレハ被告カ原告ノ明治三
十五年度水害地々租免除願ニ對シ與ヘタル處分ハ不法ナルニ付之ヲ取消サレタシト云フニ在リ
被告答辯ノ要旨ハ第一原告ハ收穫ノ皆無ハ土地ノ收穫物ニ對スル收支計算上農家一個年ノ經濟如
何ヲ考量シテ其收穫ノ有無ニ依リ定ムヘキモノナリト云フモ法律第二十七號ニ依ル免租ハ其土地
ノ收穫如何ニ依ルヘキモノナリ而シテ被告カ免租處分上土地作物ノ種類ニ依リ免租ノ程度ヲ異ニ
シタルハ必竟被害ノ厚薄ニ應シ偶其結果ヲ見ハシタルモノニシテ法律適用上豫メ其種類ニ依リテ
免否ノ區分ヲ爲サ、リシハ勿論ナリ第二原告ハ一筆ノ土地ノ内幾分ノ被害地ヲ縱ニ分割シ其租額
ヲ算出シテ免租ノ申請及ヒ訴願ヲ爲シ亦今回ノ請求ヲ爲セリ然ルニ地價地租ハ一筆ノ土地ニ對シ
公定セラレタル不可分率ナレハ若シ其幾部分ニ收穫皆無ノモノアリトスルモ之ヲ以テ一箇ノ被害
地ト爲スヘカラサルハ當然ニシテ是亦不當ノ見解ト云ハサルヘカラス又原告ハ一個年中數作アル
土地ニシテ其ノ一作ノ皆無ト雖モ齊シク免租セラルヘキハ法律第二十七號ノ精神ナリト主張スル
モ凡ソ地租ハ一個年ノ收穫ニ依リ算出セラレタル地價ヲ以テ標準トシ徵收スルモノナレハ其幾部
分ノ皆無ヲ以テ直チニ一個年分ノ免租ヲ爲スヘシトハ本法ノ明文ヨリ見ルモ又其ノ精神ヲ窺フモ
斯ル解釋ヲ下ヌヲ得サルナリ縱シ一步ヲ讓リ此法律ニシテ果シテ原告解釋ノ如シトスルモ被告ノ
調査ノ結果原告ノ主張セル收穫皆無ナル事實ヲ認ムルコト能ハサルニヨリ之レカ免租ヲ爲サ、リ
シ所以ナレハ此等ノ事實ヲ以テ被告ノ處分ヲ不當トナスハ毫モ其理由ナキモノトス第三法律第二

十七號ニ依リ免租處分ヲ得ントセハ其ノ事實ヲ證明シ之レカ申請ヲナスヘキコトハ大藏省令ノ規
定スル所ナリ而シテ又申請者ノ利益上此手續ヲ爲スハ當然ナルヘキニ原告等ハ最初ヨリ之レカ確
證ヲ舉ケス只其ノ皆無ナルコトヲ口筆ニ著ハスニ過キス而シテ其ノ事實ハ當該官吏ノ承認セル所
ナレハ今日之レカ舉證ノ要ナキ旨陳述スルモ是亦不當ノ供述ニシテ被告カ調査ノ當時ニ之レヲ認
メタルモノナリト云フハ只原告ノ推斷臆測ニ過キス又其舉證ノ一トシテ提供シタル當該村長ノ被
害報告寫ハ當時ノ狀況ヲ推測シタル豫報ニシテ事實皆無ノ現況ハ爾後其ノ作物ノ生育如何ニ依テ
判別セラルヘキモノナレハ之ヲ以テ本訴求地ノ收穫皆無ヲ證スルニ足ラス又第三者トノ往復文書
ヲ以テ證據トナシタルモノアルモ是亦直控本訴ト何等ノ關係ヲ有スヘキモノニアラサレハ證據ト
ナスニ足ラス要スルニ被告ハ實地調査ノ事實ニヨリテ正當ノ處分ヲ爲シタルモノナレハ毫モ違法
背令ニアラサルコト明カナリ第四原告ハ三十四年ニ於ケル免租處分ノ前例ヲ引證スレトモ當時ト
ハ其ノ處分官廳ヲモ異ニスレハ前例ノ如何ニモ敢テ辯明ノ要ヲ認メス以上第一ヨリ第四ニ至ル理
由ニヨリ本件處分ノ失當ニアラサルコトハ明カナル所ナレハ原告ノ請求ハ全部之ヲ排斥セラレン
コトヲ乞フト云フニ在リ
依テ本件裁判ノ理由ヲ説明スルコト左ノ如シ
明治三十四年法律第二十七號ニハ水害ニ因リ收穫皆無ニ歸シタル田畑ノ地租ハ其年分ニ限リ免除
ストアリ然レハ同法ハ水害ノ爲メ收穫皆無ナルカ又ハ皆無ト見做スヘキ程度ノ損害ヲ被ムリタル
場合ニ於テ免租スルノ法意ト解釋セサルヲ得ス然ルニ本件免租請求地ノ被害ヲ假ニ原告主張ノ如

クナリトスルモ一个年數作アル畑地ニシテ其一作カ皆無ニ歸シタルニ過キサレハ同法ヲ適用スルモノニアラス

右ノ理由ナルニ依リ判決スルコト左ノ如シ
原告ノ請求相立タス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

●違法決定取消ノ訴 明治三十六年第四百九十五號
明治三十七年七月六日判決 (請求不立)

判決要旨

一、甲銀行カ府縣金庫事務ノ取扱ニ付キ知事ト契約ヲ締結シタル後現金ノ出納ヲ乙銀行ニ委託シタル場合ニ於テハ乙銀行ノ取締役ハ府縣制第六條ノ所謂府縣ノ爲メ請負ヲ爲ス法人ノ役員ニアラス

原告 告 立 神 音 吉

福井縣選舉會
福井縣知事

被告 告 阪 本 彰 之 助

右當事者間ニ於ケル違法決定取消ノ訴訟其申請ニ由リ書面ニ就キ審理ヲ遂クル處
原告請求ノ要旨ハ明治三十六年九月二十四日福井縣會議員選舉ノ際三方郡選舉區ニ於テ選舉ノ結

果訴外人小堀善七ハ投票最多數ニ依リ當選セシモ同人ハ株式會社三方銀行ノ取締役ニシテ三方銀行ハ縣支金庫事務ヲ取扱居ルヲ以テ府縣制第六條第九項ニ依リ被選舉權ナキ者ト認メ福井縣知事ニ對シ異議申立ヲ爲シタルニ被告ハ小堀善七ノ縣會議員當選ハ有效ニシテ取消スヘキモノニアラスト決定シタリ其理由ニ曰ク本縣々金庫ノ事務ハ福井縣農工銀行ニ取扱ヲ爲サシムル契約ニシテ同銀行ハ明治三十三年內務省令第七號第二十條第二項ニ依リ三方銀行ニ縣支金庫ノ事務ノ一部ナル現金出納ヲ取扱ハシムルト雖是レ全ク農工銀行自己ノ行爲ニシテ三方銀行ハ本縣ニ對シ何等ノ關係ヲ有セス依テ同銀行取締役小堀善七ハ府縣制第六條ニ所謂府縣ノ爲メ請負ヲ爲ス法人ノ役員ニアラスト然レトモ該內務省令第七號第十九條ニハ府縣支金庫ハ府縣知事ニ於テ必要ト認ムル地方ニ之ヲ置クトアリ則チ縣知事ハ該規定ニヨリ縣支金庫ヲ設置シ之ヲ縣下ニ公布シ嚴重ナル規定ヲ許ケ監督シツ、アルニアラスヤ從テ縣ニ對シ何等ノ關係ヲ有セスト云フヘカラス若シ被告ノ論法ヲ以テセハ納稅ハ縣金庫ニ納入スルニアラサレハ義務ヲ了セサルノ結果ヲ見ルニ至ラントス或ハ云ハン支金庫ハ開接ノ關係(即又請負)ナリ府縣制第六條ニ該當セスト然レトモ該規定ヲ設ケタル法意ハ公平ヲ保持センカ爲メ利害關係者ヲ之ニ參與セシメサルニアリ已ニ關係者タル以上ハ何ソ直接間接ノ關係區別ヲ問フノ要アラシヤ被告ノ決定ハ違法ナルニ因リ之ヲ取消シ訴外人小堀善七ノ縣會議員當選ノ取消ヲ請フト云フニ在リ

被告答辯ノ要旨ハ原告內務省令第七號第十九條ニ依リ論スルモ本縣々金庫ノ事務ハ同令第二十條第一項ニ供リ株式會社福井縣農工銀行ヲシテ取扱ハシムル契約ヲ締結シ同銀行ハ同令第二十條第

府縣金庫ノ出納事務

二項ニ依リ自己ノ責任ヲ以テ三方縣支金庫ノ事務ノ一部ナル現金出納ヲ株式會社三方銀行ニ取扱
ハシメ居ルモノナリ故ニ福井農工銀行ハ本縣ノ請負ヲ爲ス法人タルノ關係ヲ有スルモ三方銀行ハ
福井農工銀行ニ對シ現金出納ニ關スル責任ヲ有スルノミニシテ本縣ニ對シテハ何等ノ關係ヲ有セ
サルナリ然ラハ則チ株式會社三方銀行取締役小堀善七ハ府縣制第六條第九項ニ所謂府縣ノ爲メ請
負ヲ爲ス法人ノ役員ニアラサルコト明ナルヲ以テ同人ノ當選ハ有效ニシテ被告ノ爲シタル決定ハ
違法ニアラサルニ由リ原告ノ請求ヲ排斥アリタシト云フニ在リ
依テ判決ノ理由ヲ說明スルコト左シ如シ

原告ハ福井縣會議員選舉ノ投票多數ヲ得タル小堀善七ハ三方銀行ノ取締役ニシテ縣支金庫ノ事務
ヲ取扱フ者ナルニ被告縣參事會ニ於テハ縣ニ關係ナキニ依リ同人ハ府縣制第六條ニ所謂府縣ノ爲
請負ヲ爲ス法人ノ役員ニアラスト決定シタルトモ明治三十三年內務省令第七號第十九條ニハ府縣
支金庫ハ府縣知事ニ於テ必要ト認ムル地方ニ之ヲ置クトアル規定ニ依リ設置シテ監督シツ、アル
モノナレハ縣ト關係ナキニアラスト云フト雖福井縣知事カ縣金庫事務取扱ヲ爲サシムルニ付株式
會社農工銀行ト契約シタル事實ハ明治三十六年三月二十三日相互ノ契約書ニ明カナリ而シテ三方
銀行カ農工銀行ヨリ縣支金庫ノ現金出納ヲ依託セラレタルニ止マルモノナルハ同年三月一日附相
互ノ契約書ニ依リ明カニシテ縣廳ニ對シ受負契約ヲ爲シタルモノニアラスト隨テ三方銀行ノ取締役
ナル小堀善七ハ府縣ノ爲メ受負ヲ爲ス法人ノ役員ニアラサルニ因リ府縣制第六條ノ規定ニ觸ル、
者ニアラズ

右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ
原告ノ請求相立タズ訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

●漁業組合認可取消請求ノ訴ニ對スル妨訴抗辯 明治三十六年第三百二十一號 明治三十七年七月八日宣告(抗辯相立)

判決要旨

一、漁業組合設置ノ認可ハ當然漁業ノ認可ヲ包含セス隨テ該組
合ニシテ實際ニ漁業ヲ營マント欲セハ更ラニ漁業ノ免許ヲ
受ケサル可ラス

原告 布施野勘五郎 外百八十一名
訴訟代理人 江木喜太郎
被告 千葉縣知事 石原健三
訴訟代理人 千葉縣參事官 永井金次郎
千葉縣技手 古田正知

右當事者間ノ漁業組合認可取消請求ノ訴ニ付被告ハ妨訴ノ抗辯ヲ爲シタリ因テ審理ヲ遂クル處
被告妨訴抗辯ノ要旨ハ明治三十五年十二月二十日附ヲ以テ縣下千葉郡生實濱野村鹿野桑吉外九名
ヨリ同村北生實濱野村田ヲ組合地區トセル漁業組合設置認可ヲ申請セシヲ以テ被告ハ明治三十六
年六月三十日該組合設置ヲ認可セリ縣下千葉郡生實濱野村内山久之助外四名ヨリ明治三十六年一

漁業組合設置ノ認可ト漁業權

月二十六日附ヲ以テ同村北生實ヲ組合地區トセル漁業組合設置認可申請書ヲ提出セシニ漁業組合規則第三條ニ抵觸スルヲ以テ該申請書ヲ却下セリ原告ハ被告ノ處分ヲ以テ漁業權ヲ傷害セラレタリト云フト雖モ本件ハ漁業組合設置ノ認可ヲ爲シタルニ止マリ漁業權ヲ許否シタルモノニアラス隨テ漁業法第二十四條ニ該當スルモノニアラサルハ勿論其他法律勅令中行政訴訟ヲ許シタル明文ナシ即チ本件ニ對シテハ行政訴訟ヲ提起シ得ヘカラサルモノトス因テ本訴棄却ノ判決ヲ求ムト謂フニ在リ

原告辯駁ノ要旨ハ原告共北生實第一區ノ漁業者ハ北生實第二區ノ漁業者ト合同シテ漁業ヲ爲スノ慣行アリ故ニ慣行ニ從ヒ漁業免許ヲ受クルニハ漁業法施行規則第七十一條「獨立シテ區ヲ爲サ、ル濱、浦、漁村又ハ漁業者ノ部落ニシテ從來ノ慣行ニ因リ漁業免許ヲ受ケムトスルトキハ漁業組合ヲ組織シ本則施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ出願スヘシ」トノ明文ニ則リ北生實第二區ノ漁業者ト共ニ漁業組合ノ認可ヲ請ハサルヘカラス然ラサレハ原告共ハ從來慣行ニ依レル漁業免許ヲ受クルニ由ナキハ法文ノ明示スル所ナリ然ルニ被告カ從來ノ慣行ヲ無視シ北生實第二區ノ漁業者ト濱野村田ノ漁業者トノ合同申請ニ係ル生實濱野漁業組合ノ組織ヲ許可シ原告共ノ組合認可ノ申請ヲ却下シタルハ即チ漁業免許ノ違法許可ニ依リ原告共ヲシテ從來ノ慣行ニ因レル漁業免許ヲ得ルニ道ナカラシメタルモノニシテ原告共カ漁業法第二十四條ノ規定ニ基キ本訴ヲ提起シタルハ法律ノ明文ニ則リタル適法ノ行政訴訟ナリ漁業法第十八條第十九條第四條第五條第三十四條及漁業組合規則等ノ規定ニ依レハ從來ノ慣行ニ基ケル漁業組合設置ノ出願ハ即チ漁業免許ノ申請ト異ルコトナ

タ組合設置ノ認可ヲ得レハ漁業ノ免許ハ當然之ニ伴フヘキ各條文ノ明示スル所ナリ然レハ本件漁業組合認可ハ即チ漁業免許ノ許可ニ該當シ組合ノ認可ト漁業免許ノ許可ト其間ニ差別アルコトナシ本訴カ漁業法第二十四條ニ適中スル訴訟ナルコトハ言ヲ待タサルナリ因テ被告ノ妨訴抗辯棄却ノ判決ヲ求ムト謂フニ在リ

因テ判決ノ理由ヲ説明スルコト左ノ如シ
漁業ヲ爲スノ權利ヲ得ムトスル者ハ行政官廳ノ免許ヲ受ケサルヘカラスルコトハ漁業法第三條第四條ノ明示スル所ナリ又漁業組合設置ノ認可ハ單ニ其設置ノ認可ニ止マリ漁業免許ニアラサルコトハ同法第十八條及ヒ漁業組合規則第六條並ニ前記第三條第四條ニ參照シテ疑ヲ容レヌ故ニ未タ漁業免許ヲ受ケサル者ニシテ漁業組合設置ノ認可ヲ受ケタル場合ニ於テハ更ニ漁業法第三條第四條ノ區別ニ從ヒ漁業免許ヲ受ケサルヘカラス尚ホ此解釋ノ正當ナルコトハ漁業法第五條第二十條及ヒ漁業法施行規則第七十一條ニ於テ漁業組合カ漁業免許ヲ出願シタルトキノコト及ヒ其免許ヲ受ケタルトキノコト等ヲ規定セルニ依リ明白ナリトス而シテ本件被告ノ漁業組合設置ノ認可カ單ニ其設置ニ止リ漁業免許ニアラサルコトハ甲第一號證認可書ニ依リ明白ナレハ原告ハ未タ漁業免許ノ違法許可ニ依リ權利ヲ傷害セラレタリト云フヘカラスルヲ以テ本訴ヲ提起スルコトヲ得サルモノトス

右ノ理由ナルヲ以テ判決スルコト左ノ如シ

本訴ハ之ヲ棄却ス訴訟費用ハ原告ノ負擔トス

漁業組合設置ノ認可ト漁業權

●不當裁決取消ノ訴 明治三十六年第四百八十二號
明治三十七年七月八日第一號宣告

判決要旨

一 市制第一百五條ハ市税ノ賦課ニ關シ市參事會ニ訴願ヲ爲シタル者カ其裁決ニ不服ナルトキ逐次訴願訴訟ヲ爲スコトヲ許スノ規定ニシテ訴訟ヲ受ケタル市參事會自ラ訴訟當事者トシテ訴願ヲ爲スコトヲ得ヘキ規定ニアラス
一 市參事會ニ市税ノ賦課ニ關シ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ許シタル規定ナシ

福岡縣門司市參事會
門司市長
原告 田代郁彦

福岡縣參事會
福岡縣知事
被告 河島 醇

右當事者間ノ不當裁決取消ノ訴訟審理ヲ遂クル處
原告請求ノ要旨ハ

雜報

●辯護士試験及ヒ判事檢事並ニ高等文官試験。本年ノ舉行ニ係ル同試験ハ何レモ過日終了ヲ告ケタルカ其ノ及第者發表期日ハ本月下旬ナリト云フ今同試験ノ問題ヲ得タレハ左ニ之ヲ掲クヘシ

憲法

一 司法裁判ト行政裁判トノ區別ヲ説明スヘシ
二 特赦ト刑ノ執行停止トノ關係ヲ説明スヘシ

行政法

一 徵稅ト租稅トノ異同ヲ説明スヘシ
二 公ノ組合團體ノ性質ヲ説明シ民法上ノ公益社團ト異ナル所以ヲ示セ

民法

一 代理ノ原因ヲ論セ
二 所有權ニ期限ヲ附スルコトヲ得ルヤ併セテ買戻買買ハ所有權ニ期限ヲ附シタルモノナリヤ否ヤヲ説明ス可シ

民事訴訟法

一 訴ノ變更ヲ許サストノ禁止ハ如何ナル意義範圍及ヒ效力ヲ有スルヤ
二 書證ト檢證トノ異同ヲ説明スヘシ

商法

一 株式トハ何ソヤ 株券トハ何ソヤ

二 手形ノ裏書ノ種類及ヒ效力ヲ説明スヘシ

刑法

一 直接正犯タルコトヲ得サル者ハ亦間接正犯タルコトヲ得ルヤ
二 委託者以外ノ者カ受託者ニ對シ擅ニ委託物ヲ自己ニ奪却セシメタル場合其處分如何

刑事訴訟法

一 一事不再理ノ條件ハ如何
二 控訴審ニ於ケル審理ノ性質ヲ説明スヘシ

國際公法

一 治外法權ノ意義及效力ヲ説明スヘシ
二 國際條約ノ成立ニ要スル實體上及形式上ノ條件如何

國際私法

一 外國ニ於テ日本人ニ對シテ爲シタル失踪宣告ハ日本ニ於テ如何ナル效力ヲ有スルヤ
二 權利能力ハ何國ノ法律ニ依ルヘキモノナルヤ

憲法

一 皇位繼承ノ範圍及順位ヲ説明スヘシ
二 司法權ノ範圍及其行動ノ形式ヲ説明スヘシ
三 租稅ノ賦課ニ關スル憲法ノ原則ヲ述ヘ併セテ地方自治體ハ其條例ヲ以テ稅ヲ賦課スルコトヲ得ルヤ否ヤヲ説明セ

刑法

一 罪ト數罪トノ區別ノ標準如何
二 違警罪ノ性質ヲ論ス

行政法

一 公用徵收ノ手續ノ要點ヲ擧ケテ之ヲ説明スヘシ

- 一 警察官職ノ命令ヲ違由セサルモノアル場合ニ於テ之ヲ強制スルノ手續如何ヲ論スヘシ
- 民 法
- 一 根據當ノ性質ヲ說明セヨ
- 一 危險問題ノ意識我カ民法ノ採用セシ主義及ヒ其理由ヲ說明セヨ
- 經 濟
- 一 生産的消費ノ生産的消費トノ區別ヲ明ニスヘシ
- 二 勞動者ノ利益ノ保護所及以外ノ餘剩ヲ生産スルモノナリヤ
- 三 芝居ニ込入セル露地ノシテリモノノ競争事件ヲ詳論セヨ
- 際 法
- 一 職務的件與裁判トノ如何
- 二 食料ノ戰時強制品ナリヤ
- 三 芝居ニ込入セル露地ノシテリモノノ競争事件ヲ詳論セヨ

●徴兵令ノ改正

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問官ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ徴兵令中改正ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治三十七年九月二十八日 各大臣副署

勅令第二百十二號徴兵令中左ノ通改正す

第四條中「後備兵役は」の下に「陸軍は十箇年海軍は」を加ふ

第五條 補充兵役は陸軍に在りては十二箇年四个

月海軍に在りては一箇年にして其の年所要の現役兵員に超過する者の中所要の人員之に服す

第六條第二項中「後備兵役及び第一補充兵役を終りたる者」と「陸軍に在りては後備兵役又は召集せられたる補充兵にして其役を終りたる者」海軍に在りては後備兵役を終りたる者」に改む

第十七條第一項第二項中「第一補充兵」を「陸軍補充兵」に改め第三項を削る

第二十四條中「第一補充兵」を「陸軍補充兵」に改む

附 則

本令は發布の日より之を施行す

本令施行の際に於ける第一補充兵第二補充兵は前後の服役を通計して十二箇年四箇月に滿つる迄補充兵に服せしむ

本令施行の際第一國民兵役に在る陸軍出身者にして服役尙五箇年に滿たざる者は五箇年に滿つる迄後備役を終りたる者に在りては後備兵役に第一補充兵役を終りたる者に在りては補充役に服せしむ

廣 告

東京市神田區淡路町二百廿七番地
電話番號本局八百七十三番
江木法律事務所

江木 倉橋 法律事務所

辯護士法學博士 江 木 衷

辯護士 卜部喜太郎

辯護士 倉橋政直

事務所執務時間
自午前九時 至午後五時
日曜。大祭日。休業

警察官職ノ命令ヲ遵由セサルモノアル場合ニ於テ之ヲ強制スルノ手續如何ヲ論スヘシ

民法

一 根拠當ノ性質ヲ説明セヨ
二 危險問題ノ意義我カ民法ノ採用セシ主義及ヒ其理由ヲ説明セヨ

經濟

一 生産的消費ノ生産的消費トノ區別ヲ明ニスヘシ
二 労働者ハ何ノ目的ヲ要以外ノ餘剩ヲ生産スルモノナリヤ
三 義務的尙裁裁判トハ如何
四 食料ノ戰時禁制品ナリヤ
五 芝罘ニ逃入セル露艦レムテリヌイ號事件ヲ評論セヨ

徵兵令ノ改正

朕茲ニ緊急ノ必要アリト認メ樞密顧問官ノ諮詢ヲ經テ帝國憲法第八條ニ依リ徵兵令中改正ノ件ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

御名御璽

明治三十七年九月二十八日 各大臣副署

勅令第二百十二號徵兵令中左の通改正す

第四條中 「後備兵役は」の下に「陸軍は十箇年海軍は」を加ふ

第五條 補充兵役は陸軍に在りては十二箇年四个

月海軍に在りては一箇年にして其の年所要の現役兵員に超過する者の中所要の人員之に服す第六條第二項中 「後備兵役及び第一補充兵役を終りたる者」を「陸軍に在りては後備兵役又は召集せられたる補充兵にして其役を終りたる者」海軍に在りては後備兵役を終りたる者」に改む第十七條第一項第二項中 「第一補充兵」を「陸軍補充兵」に改め第三項を削る
第二十四條中 「第一補充兵」を「陸軍補充兵」に改む

附則

本令は發布の日より之を施行す
本令施行の際に於ける第一補充兵第二補充兵は前後の服役を通計して十二箇年四箇月に滿つる迄補充兵に服せしむ
本令施行の際第一國民兵役に在る陸軍出身者にして服役尙五箇年に滿たざる者は五箇年に滿つる迄後備役を終りたる者に在りては後備兵役に第一補充兵役を終りたる者に在りては補充役に服せしむ

廣告

東京市神田區淡路町二丁目七番地

電話番號本局八百七十二番

江木法律事務所

静岡縣静岡市紺屋町百廿一番地

江木倉橋法律事務所

辯護士法學博士

江木 衷

辯護士

卜部喜太郎

事務所

倉橋政直

東京市麴町區上六番町二番地

事務所執務時間

每日 自午前九時 至午後五時 日曜。大祭日。休業

(刊發號一第卷一第月一年七十二治明)

司法判例彙報第十五卷第十號第七十三號

一本誌ハ毎月一回發刊ス
 一本誌定價ハ一冊金十五錢六冊前金八十
 四錢十二冊前金一圓六十二錢外ニ郵稅
 一冊ニ付一錢但シ郵券代用ハ一割増
 一本誌ハ前金ニアラサレハ一切送致セス
 一本誌廣告料ハ一行五號活字廿二字詰金
 十錢半頁金二圓五十錢一頁金五圓
 一本誌代金ハ總テ東京飯田町郵便電信支
 局宛ニテ御拂込被下度候
 一代金拂込ノ際代金ノ領收證ヲ求メラル
 諸氏ハ送金ノ際端書一葉若シハ郵便
 切手一錢五厘ヲ送附セラルベシ
 一本誌前金盡キタルルハ發送ノ際封皮ノ
 氏名ヲ朱書可致候間次號發兌迄ニ
 御送金可被下候
 一本誌代價拂込ハ東京麹町區飯田町五丁
 目卅八番地 判例彙報社宛
 御差出被下度候

判例彙報大賣捌所

東京市神田區一ツ橋通町七番地
 有斐閣雜誌店
 東京市京橋區銀座四丁目
 東海堂 川合 晋
 東京市神田區表神保町
 東京 堂

明治三十七年十月十六日印刷
明治三十七年十月十八日發行

編輯人 東京市神田區淡路町二丁目七番地 江木 衷
 發行人 東京市麹町區飯田町五丁目三十八番地 工藤 角三郎
 印刷人 東京市神田區美土代町貳丁目壹番地 島 連太郎
 印刷所 東京市神田區美土代町貳丁目壹番地 三 秀 舍
 發行所 東京市麹町區飯田町五丁目三十八番地 判例彙報社

(行印舍券三地番一目丁二町代土美區田神市京東)

法學博士 江木 衷編輯

司法 行政 判例彙報

第 十 五 卷
 第 一 十 號
 第 七 百 七 十 三 號

判例彙報社

注意

- 一、本誌ハ毎月大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ言渡サレタル判決ノ全部ヲ審査熟讀シタル後法學研究者竝ニ實務執行者ノ爲メ最モ參考ノ價值アルモノト認メタル判例ヲ擢載セルモノニシテ專ラ法律運用ノ資ニ供スルヲ以テ目的トス
- 一、弊社ハ購讀者ニ限り法律上ノ質問ニ應ス
- 一、質問ヲ爲サントスル者ハ其要領ヲ明カニシテ郵税ヲ送附セラルヘシ
- 一、本誌ハ一箇年ヲ一期トシ毎年一月ヲ以テ第一號ヲ發刊シ毎月逐號發刊シテ十二月ニ至リ一卷ヲ完成ス
- 一、本誌ハ毎月一回發刊ス

判例彙報社編輯局

合本豫告

江木法學博士編纂

司法行政判例彙報第十五卷

洋裝金文字入製本堅固
一冊定價郵税共計圓五拾錢

本書は本年一月より十二月に至る滿一ヶ年分の大審院及び行政裁判所の判決の粹を集めたもの。所載の判例凡そ三百八十餘件。紙數一千二百餘頁。來る十二月十五日を以て出版仕候に付き同日迄に御申込の諸氏には定價の二割を割引仕候需用の諸士は至急御申込有之度候也。

判例彙報社

明治三十七年十一月

判例彙報合本廣告

江木法學博士編輯

司法判例彙報第十三卷合本

洋裝金文字入製本堅固
一冊定價郵稅共壹圓五十錢

本書ハ明治三十五年判例彙報ヲ合編シタルモノニシテ收ムル處ノ判例民事壹百四十六件刑事壹百四十九件行政五十件三十五年ニ於テ大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ起リタル事件ニシテ實務並ニ講學ノ參考タルヘキモノハ衆テ本書ノ收ムル所タリ紙數全篇ヲ通シテ壹千九十餘頁

江木法學博士編輯

司法判例彙報第十四卷合本

洋裝金文字入製本堅固
一冊定價郵稅共壹圓五十錢

本書ハ明治三十六年度判例彙報ヲ合編シタルモノニシテ收ムル處ノ判例民事壹百五十二件刑事壹百四十二件行政六十件三十六年度ニ於テ大審院及ヒ行政裁判所ニ於テ起リタル事件ニシテ荷モ實務及ヒ講學ノ參考タルモノハ衆テ本書ノ收ムル所タリ紙數全篇ヲ通シテ壹千八十餘頁

發行所

東京市麴町區飯田町五丁目三十八番地

判例彙報社

東京神田一ツ橋通

東京神田表神保町

東京々橋區銀座四丁目

大賣捌所

有 雙 閣

東 京 堂

東 海 堂

川 合 晋

司法判例彙報第十五卷第十一號目次

民事判例

● 荷爲替殘金及附帶費用請求事件……………	三九九	● 約束手形金請求事件……………	四三三
○ 荷爲替ノ性質(承前)		○ 手形提出人ハ手形ノ眞偽ヲ調査シ其ノ不正ナリト認メタルトキハ之レカ支拂ヲ拒絕スルコトヲ得ルヤ	四三三
● 株金拂込請求事件……………	四〇二	○ 證券訴訟ノ證據方法	四三六
○ 舊商法ノ本ニ於ケル株式會社ノ増資ノ方法	四〇二	● 株金拂込請求事件……………	四一六
○ 現行商法ノ本ニ於ケル株式會社ノ資本増加及ヒ其ノ減少ノ方法	四〇二	○ 解散シタル株式會社ノ權能	四一六
○ 株金額ノ増加及ヒ増株ノ割當	四〇二	○ 解散シタル株式會社ハ商法第百五十二條第百五十三條ニ依リ各株主ニ向テ株金ノ拂込ヲ請求シ又ハ不拂込者ニ向テ失權ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルヤ	四一六
● 約束手形金請求爲替訴訟事件……………	四三三	● 山林立木返還請求事件……………	四一九
○ 手形提出人ハ手形ノ眞偽ヲ調査シ其ノ不正ナリト認メタルトキハ之レカ支拂ヲ拒絕スルコトヲ得ルヤ	四三三	○ 和解ノ效力	四一九
○ 證券訴訟ノ證據方法	四三六	○ 裁判上ニ於テ和解ノ調ヒタルトキハ一事不再理ノ效力ヲ生スヘキヤ	四一九
● 株金拂込請求事件……………	四一六		
○ 解散シタル株式會社ノ權能	四一六		
○ 解散シタル株式會社ハ商法第百五十二條第百五十三條ニ依リ各株主ニ向テ株金ノ拂込ヲ請求シ又ハ不拂込者ニ向テ失權ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルヤ	四一六		
● 山林立木返還請求事件……………	四一九		
○ 和解ノ效力	四一九		
○ 裁判上ニ於テ和解ノ調ヒタルトキハ一事不再理ノ效力ヲ生スヘキヤ	四一九		
		● 約束手形金請求事件……………	四三三
		○ 時效中斷ノ方法	四三三
		○ 民法第百四十九條ノ所謂訴ノ却下トハ民事訴訟法上ノ所謂訴ノ却下ノミテ意味スルカ將テ請求ノ却下モ之ニ包含スルヤ	四三三
		● 不法處分取消請求事件……………	四三六
		○ 一定ノ申立ノ變更	四三六
		○ 控訴審ニ於ケル一定ノ申立ノ變更	四三六
		○ 控訴審ニ於テ訴ノ變更アリタルトキハ裁判所ハ如何ナル處分ヲ爲スヘキヤ	四三六
		● 扶養料請求事件……………	四三六
		○ 扶養料ノ性質	四三六
		○ 扶養料ハ已往ニ溯テ請求スルコトヲ得ルヤ	四三六
		● 松木雜木引渡事件……………	四三三
		○ 物ノ給付ヲ命スル判決	四三三
		● 刑事判例	
		● 封印破棄事件……………	三七七
		○ 封印破棄罪ノ構成	三七七
		○ 執達吏代理ノ施シタル封印破棄シタル者ノ處分(承前)	三七七
		● 公文書偽造行使選舉法違犯事件……………	三七七
		○ 豫審決定ノ確定ノ效力	三七七
		○ 有罪ノ決定	三七七
		○ 免訴ノ決定	三七七

判例彙報

判例彙報 第十五卷 第十二號 目次

行政判例彙報第十五卷第十二號目次

民事判例

約束手形金請求事件 四三二

時效中斷ノ方法 四三二

民法第四百九條ノ所稱ノ却下トハ民事訴訟法上ノ所稱ノ却下ノミヲ意味スルガ將ニ請求ノ却下ニ包含スルヤ 四三二

不法處分取消請求事件 四三六

一定ノ申立ノ變更 四三六

控訴審ニ於ケル一定ノ申立ノ變更 四三六

控訴審ニ於テ既ノ變更アリタルトキハ觀列所ノ如何ナル處分ヲ爲スヘキヤ 四三六

扶養料請求事件 四三八

扶養料ノ性質 四三八

扶養料ハ已往ニ溯テ請求スルコトヲ得ルヤ 四三八

松木雜木引渡事件 四三三

物ノ給付ヲ命スル判決 四三三

刑事判例

封印破棄事件 三七二

封印破棄罪ノ構成 三七二

執達吏代理ノ施シタル封印ヲ破棄シタル者ノ處分(承前) 三七二

公文書偽造行使選舉法違犯事件 三七二

豫審決定ノ確定ノ效力 三七二

有罪ノ決定 三七二

既決ノ決定 三七二

行政判例彙報第十五卷第十二號目次

民事判例

- 荷爲替殘金及附帶費用請求事件…………… 四三九
 - 荷爲替ノ性質(承前)
- 株金拂込請求事件…………… 四四二
 - 舊商法ノ本ニ於ケル株式會社ノ増資ノ方法
 - 現行商法ノ本ニ於ケル株式會社ノ資本増加及ヒ其ノ減少ノ方法
 - 株金額ノ増加及ヒ増株ノ割當
- 約束手形金請求爲替訴訟事件…………… 四四二
 - 手形振出人ハ手形ノ風俗ヲ調査シ其ノ不正ナリト認メタルトキハ之レカ支拂ヲ拒絕スルコトヲ得ルヤ
 - 證券訴訟ノ證據方法
- 株金拂込請求事件…………… 四四六
 - 解散シタル株式會社ノ權能
 - 解散シタル株式會社ハ商法第五百二十二條第五百二十三條ニ依リ各株主ニ向テ株金ノ拂込ヲ請求シ又ハ不拂込者ニ向テ失權ノ處分ヲ爲スコトヲ得ルヤ
- 山林立木返還請求事件…………… 四四九
 - 和解ノ效力
 - 觀列上ニ於テ和解ノ調ヒタルトキハ一事不再理ノ效力ヲ生スヘキヤ

- 約束手形金請求事件…………… 四三二
 - 時效中斷ノ方法
 - 民法第四百九條ノ所稱ノ却下トハ民事訴訟法上ノ所稱ノ却下ノミヲ意味スルガ將ニ請求ノ却下ニ包含スルヤ
- 不法處分取消請求事件…………… 四三六
 - 一定ノ申立ノ變更
 - 控訴審ニ於ケル一定ノ申立ノ變更
 - 控訴審ニ於テ既ノ變更アリタルトキハ觀列所ノ如何ナル處分ヲ爲スヘキヤ
- 扶養料請求事件…………… 四三八
 - 扶養料ノ性質
 - 扶養料ハ已往ニ溯テ請求スルコトヲ得ルヤ
- 松木雜木引渡事件…………… 四三三
 - 物ノ給付ヲ命スル判決
- 封印破棄事件…………… 三七二
 - 封印破棄罪ノ構成
 - 執達吏代理ノ施シタル封印ヲ破棄シタル者ノ處分(承前)
- 公文書偽造行使選舉法違犯事件…………… 三七二
 - 豫審決定ノ確定ノ效力
 - 有罪ノ決定
 - 既決ノ決定

● 收賄事件	三六	● 詐欺取財事件	四〇三
○ 判決文中ノ裁判所ノ表示		○ 罪トナラサル事實ハ犯罪事實ト均シク尙ホ證據ヲ明示スルニアラズシハ之ヲ認ムルコトヲ得サルカ	
○ 判決ニ裁判所名ヲ表示スル爲メ單ニ「管院」ノ二字ヲ記シタルハ裁判所ノ表示トシテ適法ナリヤ		● 公印盗用公文書偽造行使詐欺取財及私印盗用私書偽造行使偽證事件	四〇三
● 衆議院議員選舉法違犯事件	三六〇	○ 證書作成場所ノ表示	
○ 犯罪ニ依ル選舉權被選舉權ノ停止		○ 證書作成場所ノ記載	
● 森林窃盜事件	三六二	● 詐欺取財並附帶私訴事件	四〇六
○ 盗伐ノ材木ヲ以テ板ヲ製シタルトキハ之ヲ贓物トシテ處分スルコトヲ得ルヤ		○ 騙取ノ意義	
○ 贓物ノ意義			
● 封印破毀偽證及酒造税法違犯事件	三六七		
○ 封印ヲ破毀セシメテ封印ヲ施セル物件ヲ破壞若クハ妨取シタル者ノ處分			
○ 特許法違犯附帶私訴事件	三六九		
○ 損害賠償權ノ發生原因			
○ 損害賠償權ヲナサンニハ權利ヲ侵害セラレタル事實ノミヲ以テ足レリトスルカ將々實害ノ生スルコトヲ必要トスルヤ			
● 官吏抗拒事件	三九二		
○ 親告罪ニ對スル告訴ノ效力			
○ 親告罪ニ係ル現行犯アルトキハ司法警察官巡査憲兵卒ハ告訴ヲ待タズ直チニ刑事訴訟法第五十八條ノ特別處分ヲ爲スコトヲ得ルヤ			
● 船員法違犯事件	三九六		
○ 船員法第七十三條ノ解			
● 酒造税法違犯事件	三九九		
○ 間接犯則嫌疑者ノ尋問手續			
		● 不當裁決取消ノ訴	一七五
		○ 市税ノ賦課ニ關スル市議會會ノ行政訴訟(承前)	
		○ 町村制第二條ノ解	
		● 宗教學寮改築ニ付町會ノ決議ヲ以テ寄附金ヲ爲シタル件ニ付テノ訴	一八二
		○ 町村ハ學校寄附金ノ爲メニ町村稅ヲ其ノ住民ヨリ徵收スルコトヲ得ルヤ	
		● 郡會議員當選ノ效力ニ關スル縣參事會裁決取消請求ノ訴	一八七
		○ 町村助役ノ郡會議員被選舉權	
		○ 郡制第八條ノ所謂一ヶ月ノ期間ハ何ニ依テ定ムヘキヤ	
		● 不當懲戒處分取消ノ訴	一八九
		○ 村長カ私事ノ爲メニ旅行シタルコトニ付テノ懲戒處分訓令取消ノ訴	
		○ 水事組合會ノ權限	

行政判例

形債務ニ對スル擔保證書ニシテ荷爲替ニ關スルモノニ非スト判定セサル可ラスト云フニ在リ然レトモ現今我國ニ行ハル、荷爲替ト稱スルモノハ荷主カ隔地者ニ對シ物品ヲ送付スルニ方リ銀行ヨリ代金ノ融通ヲ得ル方法トシテ使用スルモノニシテ荷主ハ貨物引換證(若クハ船荷證券)並荷爲替手形カ不拂トナルトキハ銀行ニ於テ物品ヲ處分シ代金ヲ以テ辨濟ヲ受クルコトヲ得ヘキ旨及其物品ニ故障ヲ生シ銀行カ之ヲ處分シテ辨濟ヲ受クルコト能ハサル等ノ場合ニ於テハ辨濟ヲ爲ス責ニ任スル旨ヲ特約セル證書ヲ爲替手形ニ添ヘテ銀行ニ交付シ銀行ハ之ニ依リ其相當ト認ムル金圓ヲ貸出スモノナルハ御院明治三十六年(オ)第一六一號同年六月十三日ノ判決ニ於テ説明セラレタルカ如シ故ニ荷爲替タルヤ否ヤヲ決定スルニハ(第一)荷主カ隔地者ニ對シ物品ヲ送付スル場合タルコト(第二)其物品ノ貨物引換證及爲替手形ヲ銀行ニ交付スルコト(第三)爲替手形不拂トナル場合ニ於テハ銀行カ物品ヲ處分シ辨濟ヲ受クルコトヲ得ヘキ旨及ヒ其物品ニ故障ヲ生シ物品ヲ處分シ辨濟ヲ受クルコト能ハサル等ノ場合ニ於テハ辨濟ノ責ニ任スル旨ヲ特約セル證書ヲ爲替手形ニ添ヘテ銀行ニ交付スルコトノ三條件ヲ具備シテ銀行ヨリ相當ノ金圓ヲ領收スルニ因リテ成立スルモノトス而シテ此特約證書ニ荷爲替若クハ消費貸借ナルコトヲ示スヘキ文詞ヲ用ユルヲ要スルコトナク又之ヲ用ユヘキ慣例ナシ本件ニ於ケル事實關係ヲ按スルニ第一ニ在神戸市ノ被上告人濱田楠太郎カ新選羅白米三百袋及ヒ上海糯米一百袋ヲ岐阜市ノ遠藤德右衛門ニ送付スル場合ナルコトハ訴狀答辯書甲第二號證及ヒ上告人ノ援用シタル證人安田金五郎ノ調書ニ依リ明白ナル所ナリ第二ニ前記貨物ニ對スル貨物引換證(訴外神戸運送店中路歌次郎發行岐阜驛前運店宛荷爲替契約ノ性質

荷爲替契約ノ性質

出荷主濱田楠太郎受荷主遠藤徳右衛門)及額面金二千三百圓ノ濱田楠太郎振出遠藤徳右衛門宛ノ爲替手形(受取人住友銀行)ヲ上告銀行ニ交付シタルコトハ被上告人ノ争ハサル所ニシテ甲第一、二號證ニ明記セラル、所ナリ第三ニ前記爲替手形不拂ノ場合ニハ銀行ニ於テ貨物ヲ處分シ辨濟ヲ受クルコトヲ得ル旨ハ甲第一號證ニ「手形期日ニ至リ支拂相滞リ候節ハ前顯ノ擔保品ハ本人ノ立會ヲ要セス貴行ニ於テ御都合ノ時期御勝手ニ賣却(中略)被成手形金額利息並賣却ニ要スル諸費用等差引御計算被下」云々トアルニ依リ明確ニシテ若シ又貨物ニ故障アリ之ヲ處分シテ辨濟ヲ受クル能ハサル等ノ場合ニハ其辨濟ノ責ニ任スル旨ハ甲第一號證ニ前記文詞ニ續キ「若シ不足相立候時ハ本人保證人連帶ヲ以テ直チニ辨償可致ハ勿論貴行ノ御望ニヨリテハ連帶者ノ内一名ニテモ其義務屹度履行可致候萬一擔保品ニ付他ヨリ故障等有之候節ハ運署ノ者負擔致シ毫モ貴行へ御損難相掛申聞敷候」トアルニ依リ明白ナリ而シテ原告銀行カ此貨物引換證及爲替手形ノ交付ヲ受ケ相當ノ金圓ヲ被上告人ニ交付シタルコトハ被上告人ノ認メテ争ハサル所ナリ(被上告人ハ手形ノ割引ヲ受ケタリト申立ツルモ荷爲替ノ場合ニハ常ニ爲替手形ノ交付ヲ受ケ相當ノ金圓ヲ貸出スモノナレハ形式上ハ手形ノ割引タルコト勿論ニシテ之カ爲メニ荷爲替ニ非ストスルヲ得ス)果シテ然ラハ本件ノ事實關係ハ全然御院カ我國ノ慣習上荷爲替ナリトセラル、モノニ該當スルコト一點ノ疑ヲ容レサル所ナリ原院ハ甲第一號證ニ爲替手形ノ擔保トスル旨ノ明文アリ又上告人カ手形上ノ權利ヲ主張シタルコトアリトノ事實ニ依リ本件ヲ荷爲替ニ非サルモノノ如ク論定シタリト雖モ荷爲替ニハ常ニ形式上爲替手形ヲ要スルモノナレハ此手形ニ附隨スル特約ニ貨物引換證記載ノ貨物

ヲ手形支拂ノ擔保ト明記シ其不支拂ノ場合ニ其貨物ヲ處分シ辨濟ヲ受クヘキ旨ヲ定ムルハ御院判例ノ如ク寧ろ荷爲替ノ特質ト云フヘク之アルカ爲メニ荷爲替ト認ムヘカラストスルカ如キハ荷爲替ノ性質ヲ誤解シタルモノナリ又本件ノ事實關係カ荷爲替タルコト前述ノ如クナル上ハ會テ上告人カ手形上ノ權利ヲ主張シタルコトアレハトテ之カ爲メニ荷爲替カ變シテ單純ナル手形上ノ關係トナルヘキモノニアラス之ヲ要スルニ本件當事者ノ主張スル事實關係ハ荷爲替ノ條件ヲ具備スルモノナルニ原院ハ荷爲替ノ成立ニ必要ナル總テノ事實關係ノ存否ヲ當事者雙方ノ申立及ヒ證據ニ依リ審究セシテ單ニ甲第一號證ニ爲替手形金支拂ノ擔保トシテ差入ル、旨ノ記載アルト上告人カ會テ手形上ノ權利ヲ主張シタルコトアリトノ事實ノミニ依リ荷爲替ニ非スト判斷シタルハ荷爲替ノ性質ヲ誤リ裁判上必要ナル事實ヲ審究セシテ漫然事實ヲ確定シタルモノニシテ理由不備ノ不法アリト云フニ在リ

按スルニ荷爲替契約ハ荷送人ト銀行トノ間ニ於テハ一種ノ消費貸借關係ヲ生スルコトハ實ニ荷爲替契約ニ關スル法理トシテ本院ノ是認スル所ナリ而シテ荷爲替契約ハ我國ニ於テ商法施行以前ヨリ存在シタル行爲ナルヲ以テ荷爲替手形ハ必スシモ商法ニ規定シタル爲替手形タルコトヲ要セサルヤ自ラ明ナリ是故ニ原院カ甲第一號證ハ爲替手形ノ債務ニ對スル擔保證書ニシテ荷爲替契約ニ關スルモノニ非スト判斷シタルハ其專權タル事實ノ認定ニ外ナラスシテ荷爲替契約ノ性質ヲ誤解シタルモノト云フヲ得ス要スルニ本論旨ハ事實認定ヲ非難スルモノニシテ上告ノ理由トナラス

判決要旨

一、舊商法施行ノ本ニ於テ株式會社カ資本ノ増加ノ爲メ株金額ヲ増シ又ハ新株ヲ發行シテ之ヲ各株主ニ引受ケセシメントスルトキハ此等増資ニ關スル株主總會ノ決議ノ外更ラニ各株主ヨリ書面承諾ヲ受クルニアラスンハ其ノ拂込ヲ請求シ得サルモノトス。

說明

株式會社ノ資本ノ増加及ヒ其ノ減少。株式會社ノ資本ノ増加及ヒ其ノ減少ハ如何ナル方法ニ依リテ之ヲ爲シ得ヘキカヲ明カニスルハ講學上及ヒ實際上最モ緊要ノ事項ニ屬スルカ故ニ左ニ是ヲ解説スヘシ
一、資本ノ増加。我現行商法ノ本ニ於ケル株式會社ノ資本ノ増加ハ新株及優先株ヲ發行シテ之ヲ爲スコト商法第二百十條以下ノ規定スル所ニシテ其ノ増加ノ方法明カナリト雖モ獨リ疑ノ存スルハ新株優先株ノ方法ニ依ラス其ノ他ノ方法例

ヘハ已定ノ株數ヲ増加セスシテ單ニ株券面ノ金額ヲ増加シ又ハ新株優先株ヲ發行スルモ之レヲ一般ニ募集スルコトナク從來ノ株主ニ割當テ從來ノ株主ヲシテ之ヲ引受ケシメ以テ資本ノ増加ヲ計ル如キハ尙ホ株式會社ノ資本増加ノ方法トシテ之ヲ許スヤ否ヤノ問題是ナリ按スルニ右ニケノ方法ニ依ル資本ノ増加ハ法律ニ何等ノ規定ナキヲ以テ或ル論者ハ之ヲ消極ニ論定スルヲ以テ正當ナリトノ論ヲ主張スト雖モ余輩ノ觀念ヲ以テセハ斯ル方法モ尙或ル條件ノ本ニ有效ナル増資ノ方法トナスヲ妨ケサルモノト確信ス乞フ左ニ之ヲ解カシ
株式會社ノ株主ハ素ト有限責任ナルカ故ニ已定ノ株券面ノ金額以外ニ何等ノ義務ヲ負擔スルコトナシ左レハ如何ニ總會ノ決議ヲ以テスルモ券面ノ金額以外ニ株主ノ負擔ニ歸スルカ如キ事項ハ之ヲ株主ニ向テ強要スルコト能ハサルヤ勿論ナリトス今若シ此ノ點ヨリ觀察スルトキハ以上ニケノ方法即チ株金額ヲ増加シ若クハ各株主ヲシテ増株ヲ引受ケセシムルコトハ取モ直チ株主ヲシテ株金以外ニ義務ヲ負擔セシムルモノニシテ斯カル議決ハ之レヲ以テ直チニ各株主ヲ羈束スルニ足ラサルコト勿論ナリト雖トモ然レトモ期カル議決ト雖モ總會ノ議決トシテ敢テ無効ナルモノニアラス抑モ總會ノ決議ハ會社意思ノ決定ナリ意思ノ決定ハ法律ノ禁止ニ觸レサル以上ハ人格ノ範圍内ニ於テ全ク其ノ自由ニ屬スルカ故ニ決定意思ヲ以テ直チニ相手方ヲ羈束スルコト能ハサルノ理由ヲ以テ之レ

株式會社ノ資本ノ増加

三〇三

無効トナスコトヲ得ス今該會社カ資本ヲ増加スルニ當リ其ノ手段ニ株金額ヲ增加スルノ方法ヲ用ユルコトカ株式會社ノ人格ノ範圍ニ在テ且ツ法律ノ禁止スル所ニアラサルヲ考フルニ凡ソ會社カ資本ヲ増加スルコトハ取リモ直サス之レ定款變更ノ一種ナリトス而シテ法律ハ會社ノ定款ヲ變更スルコトニ付テハ漠然商法第二百八條ヲ以テ定款ハ株主總會ノ決議ニ依リテ之ヲ變更スルヲ止マリ其ノ變更スヘキ事項若クハ其ノ事項ノ體樣ノ如何ニ付テハ何等制限スル所ナシ茲ヲ以テ會社カ資本ノ增加ニ付キ定款ヲ變更スルニ當リテモ株券ヲ增加セスシテ單ニ株金額ヲ増加スル方法ニ依ルト將タ増株ヲナシテ之ヲ一般ニ募集スルト又ハ各株主ヲシテ引受シムルノ方法ヲ出ツルトハ等シク是レ定款ノ變更トシテ共ニ會社ノ權能ニ屬スルモノト認メサルヲ得ス

五三

得ヘク會社ハ是ニ依リテ各株主ヲシテ増株ヲ引受ケシムルコトヲ得ト論決セザルヲ得ス
要之ニ凡ソ株式會社ノ株主トシテ株主總會ノ決議ニ服従スヘキハ其株券額ノ範圍ニ限ル株金以外ニ在テハ全ク第三者ノ地位ニアルモノナレハ會社カ増株ヲナスニ當リ各株主カ任意ニ株券ノ引受ヲ爲スハ恰モ一般ニ之ヲ募集シタル場合ニ各人カ其ノ望ミニ應シテ引受ヲ爲スト異ナル所ナシ唯彼レニ在テハ已ニ株主タルノ關係ヲ有シ是ニ在テハ管テ株主タル關係ヲ有セサルノ差アルノミ又タ株金額ヲ増加スルコトモ元來會社ノ株式ハ一株二十圓以上ナルトキハ幾何ノ額面ヲ以テスルモ全ク會社ノ自由ニ屬ス左レハ始メヨリ百圓ノ株式ヲ發行スルモ又タ始ニ五十圓券ヲ發行シ後之ヲ増加シテ百圓ト爲スモ結局百圓ノ株式ヲ以テ會社ノ資本トナスニ過キサレハ法律ニ於テ之ヲ禁スルノ理由毫モ存スルコトナカルヘシ或ル論者ハ舊商法ニ株金増加ノ規定アリタルニ不拘新法之ヲ規定セサルハ許サハルノ趣旨ナリト云フモノナキニアラスト雖モ非ナリ商法ニ於テ明カニ之レカ規定ヲナサスト雖モ其ノ事公益ニ抵觸セス當事者間ニ完全ナル意思表示ノ合致スルニ於テハ商法第一條ニ依リ民法ノ規定ニ照ラシ其ノ有效無効ヲ斷スルニ何ノ妨ケカ之レアラシヤ是レ余輩カ新株優先株發行ノ外ニ以上二個ノ方法ヲ以テ株式會社ノ資本増加ノ方法トナス所以ナリ矣

株式會社ノ資本ノ増加

五三

二資本ノ減少。株式會社ノ資本ノ減少ニ付テハ法律ハ商法第二百二十條ヲ以テ左ノ規定ヲ爲スノ外明文ノ存スルコトナシ

株主總會ニ於テ資本減少ノ決議ヲ爲ストキハ同時ニ其ノ減少ノ方法ヲ決議スルコトヲ要ス

第七十八條乃至第八十條ノ規定ハ資本減少ノ場合ニ之ヲ準用ス

由是觀之ハ株式會社ニ於ケル資本ノ減少ハ如何ナル方法ニ依テ之ヲ爲スヘキヤハ全ク總會ノ決議ニ委テタルヲ以テ總會ハ其ノ選ム處ニ從ヒ如何ナル手段ヲ以テスルモ之ヲ爲スコトヲ得ヘク又總會ノ決議カ如何ナル方法ヲ以テスルヲ不問直チニ減少ノ效果ヲ生スルニ於テ資本増加ノ場合ト全ク其趣キヲ異ニセリ

資本減少ノ方法ニ付テハ法律ニ於テ何等規定スル所ナキ以上ノ如シト雖モ論理上ヨリ之ヲ探究シ來ルトキハ大凡左ノ方法ノ外ニ出スルコトナシ

(一) 株式ノ數ヲ減少セシメテ株金額ヲ減少スルコト此ノ方法ハ之ヲ減少シテ法律カ株金ノ最少額ヲ規定シタル以下ニ下ルコトヲ得サルハ勿論ナリ而シテ此方法ニ依ル資本ノ減少ハ更ラニ之ヲ左ノ三個ニ區別スルコトヲ得ヘシ

(イ) 株主カ未タ株金ノ全部ヲ拂込マサルニ先チ其ノ拂込マサル部分若クハ其ノ内ノ幾部ノ拂込ヲ免除スルコト

(ロ) 株主カ已ニ拂込ミタル株金額ノ一部ヲ拂戻スコト

(ハ) 會社ノ財産カ其資本額ニ及ハサル場合ニ於テ不足額ヲ株主ノ損失トシテ株金額ヲ減少スルコト

(二) 株金額ヲ變セシメテ株式ノ數ヲ減少スルコト此ノ方法ニ又タ二アリ

(イ) 株式ノ併合

(ロ) 株式ノ消却

(三) 株金額ト株式ノ數ト併セテ減少スルコト此前三ケノ方法ヲ併合シタルモノニシテ別ニ説明スルヲ要セス

之ヲ要スルニ株式會社ノ資本ノ減少ハ以上三ケノ方法ノ外ニ出スルコトヲ得ス而シテ之ヲ爲スニ當リテハ前記法條未項ノ所謂第七十八條乃至第八十條ノ規定ノ制限ヲ受ケサルヲ得サルハ法文自ラ明示スル所ニシテ即チ會社資本ノ減少ハ會社ニ對スル債權者ノ最モ利害關係ヲ有スル所ナルヲ以テ債權者ヲシテ資本ノ減少ニ異議ヲ述フルノ猶豫ヲ與ヘ若シ一定ノ期間内異議ヲ述ヘタルトキハ會社ハ其ノ債權ヲ辨濟スルニアラサレハ減少ヲナスコトヲ得ス

株式會社ノ資本ノ減少ハ前ニ掲ル商法第二百二十條ノ規定ニ隨テ之ヲ爲スヘキコト勿論ナリト雖モ法律ハ更ラニ第一百五十一條ニ於テ株式ハ資本減少ノ規定ニ從フニアラサレハ之ヲ消却スルコトヲ得ス但シ定款ノ定ムル所ニ從ヒ株主ニ配當スヘキ利益ヲ以テスルハ此ノ所ニアラスト規定シタルカ故ニ株主ニ配當ス

ヘキ利益ヲ以テ株式ノ消却ヲ爲スハ資本減少ニアラス隨テ前ニ掲ケタル資本減少ノ方法中(二)ノ(ロ)株式ノ消却中ヨリ此場合ヲ除外セサル可ラサルカノ感ナキニアラスト雖モ元來會社ノ資本ナルモノハ株式ヲ措テ他ニ存スヘキモノニアラス左レハ株式ノ數ヲ減シ若クハ株式ノ金額ヲ減スル以上ハ其ノ之ヲ消却スルニ用ユル金員カ株主ノ拂込ミタル會社ノ資本ヲ以テスルト將タ株主ニ配當スヘキ利益ヲ以テスルトハ毫モ間フ處ニアラス左レハ第百五十一條第二項但書ノ場合モ尙ホ資本減少ノ一タルヲ失ハサルヲ知ルヘキナリ唯其消却スヘキ金員カ株主ニ配當スヘキ利益ヲ以テスルトキハ實際上會社ノ營業資本ニ供スルコトヲ得ヘキ經濟的資本ハ所謂法律上ノ資本額ニ比シ減少ヲ來サルカ故ニ隨テ各株主カ會社ノ資本金ヨリ打算シテ自己ノ收益ヲ期待シタル目的ニ反セサルヲ以テ法律ハ此場合ニ於テハ資本減少ノ規定ニ依ルノ必要ナキモノトシテ斯ハ規定シタルモノナリト確信ス

第一審 松山地方裁判所 第二審 廣島控訴院

伊豫汽船株式會社破産管財人

上告人 吉田 長 敬

被上告人 合田 大 助

外一名

訴訟代理人

岡田 寅彦
村 敏夫

右當事者間ノ株金拂込請求事件ニ付廣島控訴院カ明治三十七年三月九日言渡シタル判決ニ對シ上

告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判 決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

上告ニ係ル訴訟費用ハ上告人之ヲ負擔スヘシ

理 由

上告ノ趣旨ハ第一原判決旨ノ(一)ハ株式會社ニ於ケル株主總會ノ決議ハ唯株式會社ナル法人ノ意思ヲ表白スルニ止マリ會社ト株主トノ契約ニアラサレハ株金増加ノ場合タルト新株募集ノ場合タルトヲ問ハス必スヤ嚴正ナル株主ノ書面承諾ヲ要ストノ旨趣ニシテ其舉證ノ責任ニ關シテハ原院ハ「而シテ株主ニ於テ引受承諾ヲ爲シタルヤ否ヤニ付後日ノ紛議ヲ避クル爲メニハ最モ嚴正ノ方法ニ依ラサルヲ得サルモノナルヲ以テ必ス書面承諾ナカルヘカラス此點ニ付控訴人(上告人)ニ於テ舉證セサルノミナラス」云々ト説明シ其舉證ノ責任ヲ全然上告人ニ負擔セシメラレタリ抑モ本件ニ付テハ被上告人ハ現在其株主タルノ事實ヲ認メ唯數年前上告會社ノ増資當時ニ於ケル形式ノ不完全即チ引受行爲ノ完タカラサルコトヲ争フモノニシテ換言セハ明治二十八年増資ノ際ニ於ケル株式引受行爲ニ缺クル所アルノ事實ヲ主張スルモノトセハ其立證ノ責任ハ普通ノ事態ニ反スル形式ノ欠缺ヲ主張スル被上告人ニ於テ是レカ舉證ヲナスヘキヲ當然トス然ルニ原院ハ此賭易キ舉證ノ責任ヲ顛倒シテ上告人ニ是ヲ歸着セシメラレタルハ舉證ニ關スル法則ニ違反シタル判決ナリトス第二原判決中同シク(一)判旨ノ内「被控訴代理人ノ援用スル證人町田重之ハ控訴會社ノ

株式會社ノ資本ノ増加

設立登記ニ關シテハ乙第七號證ナル株主申込簿カ登記所ニ存在スルモ株金増加ニ付テハ舊株主ノ承諾書又ハ新株ニ對スル株金申込簿ノ如キモノハ更ニ之ナキ旨證言スルニ由テ觀レハ舊株主タル被控訴人等ニ於テ株金増加ニ付書面ヲ以テ引受ケノ承諾ヲ爲シタルモノニアラスト認メサルヲ得ストト説明シタルハ結局現今登記所ニ右等ノ承諾書ノ存在セサルヲ以テ明治二十八年増資ノ際何等承諾書ヲ徵シタルモノニアラスト判定セラレタルモノ、如シ上告人ハ此點ニ關シ原院ニ於テ(1)今日右等書類ノ存否ト増資ノ際(二十八年則チ七年前)右等書類ヲ徵シタルヤ否ヤノ事實トハ全ク別箇別異ノ關係ニシテ互ニ原因結果ヲ素成スルモノニアラス(2)證人町田重之ノ證言中ニ於テモ右引受承諾書ハ爾後之ヲ紛失シタルモノナリトノ二個ノ抗辯ヲ提出シテ之ヲ論争シ此論争ノ諸點カ殆ント此點ニ關スル原院主要ノ争點タリシニ原院ハ何等判定ヲ與ヘスシテ唯前記ノ如ク漠然町田某ノ證言ヲ採用シ上告人主張ノ本件主要ノ争點ヲ無視シタルハ判決ニ理由ヲ付セサル不法アルモノナリトス第四株金ノ増加ハ株式ノ引受行為ニアラスシテ既ニ引受ケタル株式ノ金額變更ナリ此變更ニ關シテハ舊商法中株式引受ニ關スル條規ヲ適用スヘキモノナルヤ否ヤニ至リテハ何等ノ規定スル所ナキヲ以テ普通民法ノ意思表示ニ關スル法規ヲ適用スルヲ至當トス則チ明示タルト默示タルトヲ不問其意思ノ表示ヲ見得ヘクハ足レルモノトス若シ然ラザラン歟株金ノ増加ヲ承諾シテ全株主カ株金全部ノ拂込ヲ了シ十數年間其營業ヲ繼續シ居ルモノト雖モ單ニ書面承諾ナキノ一事ヲ以テ株金増加ノ全部ヲ無効トセサルヲ得サル如キ不都合ヲ生セン現行商法ニ於テモ亦タ新株募集ニ關シテハ株式引受ニ關スル規定ヲ適用スル旨ノ特別規定アルモ株金ノ増加ニ付テハ株式

引受ニ關スル規定ヲ準用スル旨ノ明文ナシ(而カモ現行商法ニ於テモ株金増加ニヨル資本増加ヲ認メ居レルコトハ施行法第五條ノ二項ニヨリ明カナリ)現行商法既ニ然リ舊商法ニ於テモ結局株金ノ増加ニヨル資本増加ニ付キテハ新株發行ノ場合ト同シク引受承諾ノ書面契約ヲ要ストノ主趣ニアラザルコト明カナリ然ルニ原院カ株券ノ金額増加ノ場合タルト新株發行ノ場合タルトヲ不問凡テ引受ニ關スル法律規定ヲ遵守スヘキモノトシ尙ホ必ス書面承諾ヲ要ストノ主趣ヲ以テ判決セラレタルハ明カニ商法第六十一條ヲ不當ニ適用シタル違法ナル判決ナリ仍テ按スルニ伊豫瀛船株式會社カ本訴係争株券ノ金額ヲ増シ又新株券ヲ發行シタルハ其ニ舊商法ノ施行時代ニ在リシコトハ原院決ニ於テ確定シタル事實ニ徵シテ自明ナリ而シテ株式會社資本ノ増加ハ其株券ノ金額ヲ増ス場合ト新株券ヲ發行シテ之ヲ各株主ニ分配スル場合トヲ分タス株主總會ノ決議ハ未タ以テ各株主ヲ羈束スルニ足ラス各株主ハ其書面承諾ヲ爲スニ因リテ始メテ羈束セラル、ニ過キササルコトハ舊商法株式會社ニ關スル規定ノ精神ナリトシテ從來本院ノ判例ニ於テ執持スル所ナリ上告人カ第十一ノ上告論旨ニ援用シタル本院明治三十七年(オ)第七十一號判決ハ事現行商法ノ規定ニ關スルノミナラス創立總會ノ決議無効ヲ主張センニハ一个月ノ期間内ニ之ヲ請求スルヲ要スル旨判示シタルニ外ナラザレハ毫モ本題ニ關スル本院ノ判例ト抵觸スル所ナシ翻テ原判決ヲ閱スルニ其理由ノ第一段ニ於テ本訴株金ノ増加ニ付テハ株主ノ承諾書存在セス又新株券ニ付テハ株式申込簿存在セサル事實ヲ確定シタルノミナラス第二ノ上告論旨ニ於テ主張スル如キ争點原審ニ顯レタル事蹟ハ訴訟記録ニ徵スルモ之ヲ認ムルニ由ナシ上告人ハ株金増加ノ承諾及ヒ

新株式ノ申込ニ關スル争點ニ付テ原院ハ立證責任ヲ顛倒シタリト論述スレトモ上告人ハ被上告人ニ對シテ株金増加ノ承諾友ヒ新株式ノ申込アリタル旨ヲ主張シテ本訴ヲ提起シタル者ナレハ其事實ノ存在ヲ立證スルノ責上告人ニアルコト勿論ニシテ本論旨ハ上告ノ理由トナラス然レハ則チ其他ノ上告論旨ニ付テハ假ニ其理由アル者トスルモ原判決ノ主文ハ前掲原判決ノ理由第一段ノ趣旨ニ依リテ維持スルニ十分ナルヲ以テ結局上告論旨ハ理由ナキニ歸スルモノト云ハサルヲ得ス故ニ他ノ上告論旨ニ付テハ特ニ其當否ヲ判斷セス

●約束手形金請求爲替訴訟事件

明治三十七年(オ)第三百六十七號
明治三十七年八月十五日 判決

(棄却)

判決要旨

一、手形ノ振出人ハ所持人カ正當ノ手形權利者ナルヤ否ヲ調査スルノ權利チ有ス隨テ振出人カ裏書讓渡ノ事實チ否認スル以上ハ所持人ハ其ノ裏書ノ眞正ナルコトヲ立證スルニアラズンハ手形金ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得ス
一、證書訴訟ノ場合ニ於テ其ノ證據方法カ證書ノミニ限ラレタルハ獨リ民事訴訟法第四百八十四條ノ場合ノミナラス證書

ノ眞否ヲ明ニスル場合ニ於テモ亦タ然ルモノトス

(參照) 證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得(民事訴訟法第四百八十七條第二項)

一定ノ金額ノ支拂其他ノ代價物若クハ有價證券ノ一定ノ數量ノ給付ヲ目的トスル請求ハ其請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リ證書コトヲ得ヘキトキハ證書訴訟ヲ以テ之ヲ主張スルコトヲ得(民事訴訟法第四百八十四條)

第一審 山口地方裁判所 赤間關支部 第二審 廣島控訴院
上告人 舟木 謙 齋
被告 人 泰 清 祐
訴訟代理人 渡 邊 澄 也

右當事者間ノ約束手形金請求爲替訴訟事件ニ件廣島控訴院カ明治三十七年四月二十五日言渡シタル判決ニ對シ上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告趣旨ノ第一ハ約束手形ノ振出人ハ振出行爲ニ因リ手形ノ文言ニ從ヒ絶對ニ手形上ノ義務ヲ負フハ手形法上ノ原則ナリ隨テ本件ニ付キ被上告人ハ甲第一號證タル約束手形ノ振出ヲ否認スル場合ハ格別尙モ振出ノ事實ヲ認ムル以上ハ手形所持人タル上告人ニ對シ手形金額ヲ支拂フノ義務ヲ負フコト固ヨリ論ナク訴外祐定辰次郎ト上告人間ニ於ケル裏書讓渡ノ事實ヲ云爲シテ手形上ノ義務ヲ免カル、コトヲ得ス蓋シ裏書讓渡ノ事實ハ訴外祐定辰次郎ト上告人間ニ於ケル關係ニシテ

手形振出人ノ手形調査權○證書訴訟ノ證據方法

被告上告人ハ何等ノ利害關係ヲ有セザレハナリ然ルニ原判決ハ「被控訴人（被上告人）ハ訴外祐定辰次郎ニ宛テ甲第一號證ナル金二百圓ノ約束手形ヲ振出シタルコトハ被控訴代理人ノ認メテ爭ハサル事實ナリ」ト判示シ被告上告人カ甲第一號證タル約束手形ヲ振出シタル事實ヲ認メナカラ上告人ニ於テ被告上告人ノ否認スル裏書讓渡ノ事實ニ關シ適法ノ立證ヲ爲サ、ルヲ理由トシテ上告人ノ請求ヲ排斥シタルハ手形ニ關スル法則ニ背戾スル不法アリト云フニ在リ

按スルニ上告人カ本訴約束手形ヲ所持スル所以ノモノハ裏書讓渡ニ因ル旨ヲ自ラ主張シタル事實ナルコトハ原判決ニ援用シタル第一審判決ノ事實摘示ニ徴シテ明ナル所ナリ抑約束手形ノ振出人ハ手形ノ正當ナル所持人ニ對シテ常ニ手形債務ヲ負フコトハ勿論ナリト雖モ所持人ノ正當ナル手形債權者ナルヤ否ヲ調査スル權利アルコトモ亦明ナリ何トナレハ民法第四百七十條指圖債權ノ債務者ハ其證書ノ所持人及ヒ其署名捺印ノ眞偽ヲ調査スル權利ヲ有スルモ其義務ヲ負フコトナシトノ規定ハ商法及ヒ商慣習法ニ此ト抵觸スヘキ法則存セサルヲ以テ商法第一條ニ依リ之ヲ約束手形ニ適用スヘキモノナレハナリ由是之ヲ觀レハ約束手形ノ振出人タル被告上告人カ本訴手形ノ裏書ヲ爭フ場合ニ於テ上告人ハ其裏書ノ眞正ナルコト即チ自ラ正當ノ所持人ナル事實ヲ立證スルニ非サレハ被告上告人ニ對シテ手形金ノ請求ヲ爲スヲ得サルコトハ自ラ明ナリ本論旨ハ至竟上告ノ理由トナラス

上告趣旨ノ第三ハ原判決説明ノ如ク假リニ上告人ハ訴外祐定辰次郎ヨリ甲第一號證タル約束手形ノ裏書讓渡ヲ受ケタル事實ヲ證明スル義務アリトスルモ原判決ニ説示スル如ク上告人ハ原院ニ於

テ祐定辰次郎ノ印鑑ヲ提出シ以テ甲第一號證タル約束手形中祐定辰次郎名下ノ印影ト對照シ證書ノ眞否ヲ決セラレンコトヲ申立タルニ拘ハラズ原判決ハ民事訴訟法第四百八十七條第二項ヲ援用シ上告人ノ立證方法ヲ以テ適法ノ證據方法ニ非ストシテ排斥セリ然レトモ民事訴訟法第四百八十七條第二項ハ「證書ノ眞否及ヒ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得」ト規定セルヲ以テ證書ノ眞否ニ關シテハ民事訴訟法第三百五十二條ニ規定セル檢眞ノ方法ヲ許スノ趣旨ナルコト明カナリ然ルニ「民事訴訟法第四百八十七條第二項ニ證書ノ眞否ニ關シテハ書證ノミヲ以テ適法ノ證據方法ト爲スコトヲ得トノ規定アルヲ以テ云々甲第二號證ナル印鑑トノ對照ヲ爲スハ本訴ノ如キ爲替訴訟ニ於ケル適法ノ證據方法ト爲シ難キコト云々」ト説明シテ上告人ノ唯一ノ立證方法ヲ排斥シタル原判決ハ法則ニ背戾スル不法アル

モノト信スト云フニ在リ
然レトモ民事訴訟法第四百八十七條第二項ノ規定ニ於テ適法ノ證據方法ヲ證書ノミニ限リタルハ獨リ第四百八十四條ニ掲ケタル以外ノ事實ニ關スルモノニ止マラス證書ノ眞否ニ付テモ亦然ルコトハ爲替訴訟及ヒ證書訴訟ニ於テ請求ヲ起ス理由タル總テノ必要ナル事實ヲ證書ニ依リテ證スルコトヲ得ヘキコトヲ第一義トシタル第四百八十四條ノ規定ニ徴シテ毫モ疑ヲ容ルヘキニ非ス之ヲ要スルニ本論旨ハ第四百八十七條第二項ノ規定ヲ誤解シタルモノニ外ナラスシテ上告ノ理由トナラス

●株金拂込請求事件 明治三十七年(オ)第三百號 明治三十七年七月七日判決 (破毀)

判決要旨

一、株式會社ハ解散シタル後ト雖モ清算ノ範圍内ニ於テハ會社トシテ尚ホ存續ス隨テ解散シタル株式會社ハ商法第百五十二條及第百五十三條ニ依リ株金ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ得

說明

開散シタル株式會社ハ開散ハ會社終了ノ一原因ナルカ故ニ開散シタル會社ハ最早會社タル存在ヲナスコト能ハサルヲ以テ純理トナスト雖モ然レトモ凡ソ會社ノ開散アルトキハ必ス之レニ清算事務ノ伴フモノナルカ故ニ清算事務處辨ノ爲メ便宜上開散ノ後モ尚ホ一定ノ期間會社タルノ存在ヲ認ムルハ近時各國立法制度ノ均シク是認スル所ニシテ我カ商法ニ於テモ其ノ第八十四條合名會社ノ清算ニ於テ之レヲ認メ更ニ同第百三十四條ニ於テ之ヲ株式會社ノ開散ニ準用シタルノ結果開散シタル株式會社ハ尚ホ開散シタル合名會社ト均シク其ノ清算ノ範圍内ニ於テハ會社タルノ資格ヲ有シ會社ノ名ヲ以テ凡テ權利ヲ請求シ義務ヲ辨

判例彙報第五卷民事判例

濟スルコトヲ得ルヤ明カナリ
已ニ清算ノ目的ノ範圍内ニ於テ會社タルノ資格ヲ有ストセハ會社ハ清算ノ目的ヲ達スルカ爲メ自己ノ債權ニ屬スル株金ノ拂込ヲ請求シ得ヘキヤ勿論ナリトス
已ニ株金ノ拂込ヲ請求シ得ヘシトセハ之ヲ求ムルニ付テノ凡テノ手續及ヒ株主カ之ニ應セサル場合ニ於ケル會社ノ處分權能ノ如キハ當然商法第百五十二條第百五十三條ノ規定ニ準據スヘキハ株金拂込ノ請求ヨリ生スル當然ノ結果タラス
ンハアラヌ株式會社ノ清算ニ付キ準用法條ヲ列記シタルヲ商法第百三十四條ノ規定中株金拂込ニ關スル商法第百五十二條及ヒ百五十三條ノ規定見ヘサルカ故ニ一見恰モ開散後ノ株金拂込ニハ此等ノ法條ヲ準用スルコトヲ得サルカノ如キ感ナキニアラスト雖モ此ノ觀察ハ眼光紙背ニ徹セサルノ誹ヲ免カレス蓋シ第百三十四條ヲ以テ準用セラレタル凡テノ法條ハ準用ノ規定茲ニ存シテ始メテ準用ノ效果ヲ生スルモノナルニ反シ株金拂込ニ關スル第百五十二條百五十三條ノ規定ノ如キハ株金拂込ヨリ生スル當然ノ結果ナリトス第百三十四條ノ列記中ニ入ラサルノニ理由ヲ以テ之ヲ準備ス可ラストナスノ論定ハ未タ法ノ精神ヲ得タルモノニアラサルナリ

第一審 名古屋地方裁判所 第二審 名古屋控訴院

被上告人 愛知燐寸株式会社
右清算人 服部 小十郎

訴訟代理人 (佐藤清三郎 南雲庄之助)

右當事者間ノ株金拂込請求事件ニ付名古屋控訴院カ明治三十七年三月一日言渡シタル判決ニ對シ
上告人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シ被上告人ハ上告棄却ノ申立ヲ爲シタリ

判決

原判決ヲ破毀シ更ニ辨論及ヒ裁判ヲ爲サシムル爲メ本件ヲ名古屋控訴院ニ差戻ス

理由

上告趣旨ノ要領ハ原判決ハ上告人カ乙第一號證ニヨリ株主タル權利ヲ喪失シタルヲ以テ(商法第
百五十三條ニヨリ)株金ノ拂込トシテノ本訴ノ請求ニ應スヘキ義務ナシトノ抗辯ニ對シ商法第百
五十三條ハ會社解散前ニノ適用スヘキ條規ニシテ清算中ニハ商法第百五十二條ニヨリ發シタル
乙第一號證ノ如キ失權ヲ催告スルモ法律上何等ノ效力生セサル旨判決セラレタルハ商法第百五十
二條及ヒ第百五十三條ヲ不當ニ適用セサル違法アル裁判ナリト云フニ在リ
按スルニ會社ハ解散ノ後ト雖モ清算ノ目的ノ範圍内ニ於テハ尙存續スルモノト看做ストハ實ニ商
法第八十四條ニ於テ明ニ規定スル所ニシテ此規定ハ株式會社解散ノ場合ニ準用セラルコトハ同
法第百三十四條ニ於テ規定スル所ナリ然レハ即チ解散シタル株式會社ト雖モ清算ノ目的ノ範圍
内ニ於テハ同法第百五十二條第百五十三條ノ規定ヲ準用スルヲ得ヘキコトハ自ラ明ナリト云フヘ
シ原院ハ第百三十四條ノ規定中ニ第百五十三條ヲ包含セサルヲ理由トシテ株式會社解散ノ後ニ

於テハ清算人ノ催告ニ因リ株金ヲ拂込マサル株主ハ其權利ヲ喪失スルモノニ非スト判示シタレト
モ第百三十四條ニ列載シタル株式會社ニ關スル規定ノ法條ハ一トシテ法律ノ明文アルニ非サレ
ハ株式會社ノ清算ニ準用スルヲ得サルモノニ非サルハ無シ之ニ反シテ第百五十二條第百五十三條
ノ如キハ第八十四條ノ準用ニ依リ特別ノ規定ヲ待タズシテ株式會社ノ清算ニ關シテ準用スルヲ得
ヘキコト上文既ニ判示スル所ニ依リテ明ナルヲ以テ原判決ハ失當タルコトヲ免レヌ又被上告人ハ
株主ハ株金ノ拂込ヲ爲サハルトキ商法第百五十三條ニ依リ其權利ヲ喪失スルモ義務ヲ免ルヘキモ
ノニ非ス故ニ原判決ハ結局正當ナリト辯護スレトモ株式ニ屬スル權利ト義務トハ固ヨリ分離特立
スヘキ性質ノモノニ非ス換言スレハ法律ニ於テ株式ト稱スルモノハ其權利ト義務トヲ包括スルモ
ノナレハ株主ノ權利ヲ喪失シタル者ニシテ尙其義務ヲ負擔スルコトハ不能ノコト、云ハサルヲ得
ス是レ第百五十三條第二項及第三項ニ於テ失權ノ株主ニ不足額辨濟ノ責任ト損害賠償若クハ違約
金辨濟ノ責任トアルコトヲ特ニ規定シタルヲ觀テモ亦之ヲ知ルニ難カラス由是之ヲ觀レハ若シ果
シテ商法第百五十三條ノ規定ニ依リ上告人ハ株主ノ權利ヲ喪失シタルモノトスレハ株金拂込ノ義
務ナキコト勿論ナリ然レトモ此點ニ關シテ原判決ノ確定シタル事實ハ未タ以テ裁判ヲ爲スニ熟セ
サル所アルヲ以テ本院ニ於テ事件ニ付裁判ヲ爲スコトヲ得ス

山林立木返還請求事件

明治三十七年(オ)第三百二十八號
明治三十七年七月八日判決 (棄却)

判決要旨

和解シタル事件ニ對スル再度ノ審理ノ和解ノ效力

一、裁判所ニ於テ當事者間ニ和解ノ調ヒタルトキハ一事不再理ノ效力ヲ生シ爾後其ノ事件ニ付キ再ヒ訴テ受クルコトナシ然レトモ其ノ和解ニシテ當事者ノ能力ニ欠缺アルカ又ハ其ノ目的法令ニ違背スルトキハ當事者又ハ其ノ承繼人ハ更ラニ訴ニ依リ其ノ無効ヲ主張スルコトヲ得隨テ裁判所ハ該契約ノ存在ヲ顧ミルコトヲク其ノ事件ニ付キ更ラニ審判スヘキモノトス

第一審 和歌山地方裁判所

第二審 大阪控訴院

上告人 南 捕太郎

訴訟代理人 菊池武藏 花井卓藏

被告 上阿田木神社 西川典三

右當事者間ノ山林立木返還請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十七年四月十八日言渡シタル判決ニ對シ上告代理人ヨリ全部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告理由第一點ハ和解契約ノ存在ハ其當事者カ前ト同一ナル事實及ヒ原因ニ基テ訴争ヲ再ヒスルコトヲ許サス隨テ和解ノ抗辯アルトキハ裁判所ハ先ツ前後ノ争カ同一ナリヤ否ヤヲ査定シ果シテ同一ナルトキハ後ノ訴ノ本案ニ立入りテ其當否ヲ判スヘキモノニ非ラス而シテ原院ハ和解ニ因リテ取下ケラレタル被上告人ノ前訴トカ同一ナリヤ否ヤヲ判示セラレス反テ本訴ノ内容ヲ審理シテ被上告人ノ請求ヲ容ラレタリト云フニ在リ第二點ハ和解ハ裁判ニ依リテ争ノ理否曲直ヲ明カニスルコトヲ避ケ其目的タル權利關係不確定ナル状態ニ於テ互讓融和スルモノナリ故ニ和解ノ效力ハ争ノ目的ノ如何ニ係ラスシテ偏ニ契約能力ニ基ツクヘシ然ルニ原院ハ和解ニ付テ當事者ノ能力ニ欠缺アルコトヲ認メラレサルニモ拘ハラス反テ訴ノ本案ニ立入り賣買ノ無効ナルコトヲ斷シ之ヲ理由トシテ和解ヲ無効ナリト判セラレタリト云フニ在リ依テ按スルニ凡ソ和解ヲ無効トスルハ當事者ノ能力ニ欠缺アル場合ノミナラス和解ノ目的ニシテ法令ニ違背スル等ノ場合ニ於テモ亦其和解ハ效力ヲ有スヘキモノニアラス何トナレハ法令ニ違背スル行為ハ如何ナル方法ニ依ルモ之ヲ遂行シ得ヘキモノニアラサレハナリ本件係争物ノ如キ神社ノ財産ハ明治九年教部省第三號達明治六年第二百四十九號布告ニ依リ監督官廳ノ許可ヲ受クルニアラサレハ假令賣却ノ必要アルモ管理人ハ絕對ニ之ヲ處分スルヲ得ス此規定ニ違背シタル賣買ハ其效ナキコト勿論ナリ故ニ此規定ニ違背シ官廳ノ許可ヲ經スシテ社有ノ財産ヲ賣却シタル行為ヲ遂行スルコトヲ期スルカ如キハ素ヨリ和解ノ目的ト爲ヌヲ得サル筋合ナリ然レハ當事者ノ能力ニ

和解シタル事件ニ對スル再度ノ審理○和解ノ效力

欠缺ナク和解ノ目的ニシテ法則ニ觸レサル限りハ其效力タルヤ上告論旨ノ如クナリト雖モ本件ノ如ク法令ニ違背シタル和解契約ハ一旦之ヲ締結スルト雖モ當事者又ハ承繼人ハ更ニ訴ヲ以テ其無効ヲ主張スルヲ得ヘク隨テ裁判所ハ其和解契約ノ存在ヲ願ミルコトナク其内容ニ立入りテ訴訟ノ當否ヲ判斷セサルヘカラス故ニ原裁判所カ被告上告人ノ主張ヲ是認シ本件和解契約ヲ無効ナリト判斷シタルハ正當ニシテ上告論旨ハ理由ナシトス

●約束手形金請求事件 明治三十七年(大)第三百五十七號 (棄却)

判決要旨

一時効中斷ノ場合ニ於ケル民法第四百十九條ノ所謂訴ノ却下トハ民事訴訟法上ノ所謂訴ノ却下ト請求ノ却下トノ兩者ヲ包含ス

說明

民事訴訟法ノ規定ニ立チ入り研究スルトキハ訴ノ却下ト請求ノ却下トハ其ノ間嚴正ナル區別ノ存スルヲ見ル即チ訴ノ却下トハ訴ノ要件ヲ具備セサル場合ニ於テ裁判所カ訴ノ有效條件ヲ缺如スルヲ理由トシ其ノ訴ヲ排斥スルヲ云ヒ請求ノ却下トハ訴ノ要件ニ缺クル所ナシト雖モ相手方ノ請求メントスル請求カ不當ナル

トキ即チ法律上請求シ得ヘカラスモノヲ請求シタルトキ其ノ請求ヲ排斥スルヲ請求ノ却下トハ云フナリ茲ニ注意スヘキハ一ノ訴ニシテ訴ノ有效條件ニ缺如アルノミナラス請求モ亦タ不當ナルトキハ裁判所ハ訴ノ却下ヲ爲スヘキカ將タ請求ノ却下ヲ爲スヘキ乎曰ク訴ノ却下ヲ爲スヘキモノトス是レ他ナシ抑モ請求ノ却下ナルモノハ實體的法律關係ニ立チ入り權利ノ有無ヲ決スルノ裁判ナリ即チ本案ノ裁判ナリトス元來本案ノ裁判ハ訴カ有效ニ成立シタル後ニ於テ始メテ之レアルヘク訴ノ成立ヲ見スシテ本案ノ裁判ヲ爲スカ如キハ訴訟法ノ許ス所ニアラサルヲ以テナリ又タ訴ノ却下ハ一タヒ之アリタル後ト雖モ時効ヲ經過セス若クハ控訴ノ期間ヲ經過セサル以上ハ再ヒ訴ヲ起スコトヲ得ルヲ原則トス請求ノ却下ハ本案ノ裁判ナルカ故ニ同一事件ニ付キ再ヒ起訴スルコトヲ許サハルヲ原則トス然レトモ辨濟期限ノ到來セサルカ爲メ其ノ請求ヲ不當ナリトシテ請求ノ却下ヲナシタル場合ノ如キハ期限ノ到來ヲ待テ再ヒ其ノ事件ニ付キ訴フルコトヲ得ヘキヤ勿論ナリトス

民法第四百十九條ノ所謂訴ノ却下ナル法語ノ意義ハ右二者ヲ包含スヘク解スル所以ノ理果シテ何レニ在ル乎曰ク訴ノ却下ハ訴ノ要件ヲ具備セサルトキニ之レアルコト以上説明ノ如クナルヲ以テ此ノ場合ニ於ケル訴ハ結局訴ノ效ナキモノ

ト同一ニ歸ス請求ノ却下ハ請求ス可ラサル事件ニ對シ不當ニ請求ヲナス場合ニ
之レアルモノニシテ此ノ却下アルトキハ勢ヒ訴モ亦々自然ニ却下セラレサルヲ
得サルニ至ルヲ以テ結局訴ノ却下ト同一ノ状態ニ歸ス然リ而シテ凡ソ時効ノ中
斷ハ裁判上ノ請求其ノ效アル場合ニ於テ之ヲ認メ請求其ノ效ナキ場合ニハ之ヲ
認メサルノ法意ナルコトハ第四百四十七條以下規定ノ精神ナルコトハ法文上明カ
ナルヲ以テ民法第四百四十九條ノ訴ノ却下ナル法語ノ意義ヲ解シテ訴ノ却下ト同
一ノ結果ヲ生スル請求ノ却下モ尙ホ之ニ包含スヘシト爲スハ寧ロ法ノ精神ヲ得
タルモノナレハナリ

(參照) 裁判上ノ請求ハ訴ノ却下又ハ却下ノ場合ニ於テモ時効中斷ノ效力ヲ生セス(民法第四百四十九條)

第一審 神戸地方裁判所 第二審 大阪控訴院

上告人 岡崎 藤吉

訴訟代理人 湊 啓

被告 岡村 種藏

右當事者間ノ約束手形金請求事件ニ付大阪控訴院カ明治三十七年五月九日言渡シタル判決ニ對シ
上告人ヨリ一部破毀ヲ求ムル申立ヲ爲シタリ

判決

本件上告ハ之ヲ棄却ス

理由

上告論旨第一點ハ本件手形金ニ關シ明治三十四年六月中裁判上ノ請求ヲ爲シタル處擔保物件ヲ處
分シタル上ニ非サレハ請求スル能ハサルモノトシテ其請求却下ノ判決ヲ受ケタルモノナレハ本件
ハ未タ時効ニ罹リタルモノニ非ラス原院ハ「乙第四號證ノ裁判上ノ請求ハ審理ノ未被控訴人ノ敗
訴ニ歸シタルモノニシテ民法第四百四十九條ニハ裁判上ノ請求ハ請求ノ却下ト訴訟ノ却下ヲ區別セ
ス苟モ其起訴者ノ敗訴ニ終ルトキハ時効中斷ノ效ヲ認メサルモノナリト」判示セラレタルモ該條
ニハ明カニ之ヲ區別シ訴ノ却下又ハ取下ト規定シ請求ノ却下ヲ包含セス殊ニ第四號證ノ判決ハ當
事者ニ特約アリテ擔保物件ヲ處分シタル上ニ非サレハ上告人ハ本件ノ手形金ヲ請求スル能ハサル
モノトシテ其請求却下ノ判決ナレハ該法條ニ關係ナキコト多辯ヲ要セス然ルニ原院ハ民法第四百
十九條ヲ誤解シ第四號證ノ判決モ該條ニ包含セルモノトシテ本件ノ請求ヲ排斥シタルハ法則ヲ不
當ニ適用シタル違法ノ裁判ナリト云フニ在リ
按スルニ裁判上ノ請求カ訴ノ却下トナリタルトキハ時効中斷ノ效力ナキコトハ民法第四百四十九條
ノ規定スル所ニシテ該法文ニ所謂訴ノ却下トハ民事訴訟法上所謂請求ノ却下ヲモ包含スルモノニ
シテ決シテ狹義的意義ニ於ケル訴ノ却下ニ止マラサルモノトス何トナレハ裁判上ノ請求ニヨリ時
効中斷ノ效力ヲ生スルニハ權利者ハ相手方ニ對シテ適當ナル請求ヲ爲シ以テ有效ナル權利ノ行使
ヲ爲サルヘカラス然ルニ其提起シタル訴カ請求ノ不當ナルカタメ裁判上其請求ヲ却下セラレタ
ル場合ニ在リテハ其請求無効ニシテ即チ有效ニ權利ノ行使ヲ爲シタルモノニ非サルカ故ニ之レカ
タメ時効中斷ノ效力ヲ生セサルハ極メテ明瞭ニシテ狹義的意義ニ於ケル訴ノ却下カ時効中斷ノ效